41816
教科書文庫
4
810
41-1927
2000302685

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

資料室
教科書文庫
4
810
41-1927
2000302695
375.9
Ka9

昭和二年二月十四日

文部省檢定濟

中學校國語科用

國文新編

卷五

（第五學年用）

東京高等師範學校教授垣内松三編

広島大学図書
2000302695

社會式株
東京・明治書院・神田

一　縱に學年を貫き横に學期に亙りて特に全篇の組織に留意せり。

一　教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。

一　原作の更改は教科書としての用意に出づ原作家の諒恕を乞ふ。

廣島大學圖書之印

廣島大学 教 39348 図書

目次

一　大西祝　批評論　八
二　菊池寛　恩讐の彼方に　一四
三　阿部次郎　人格主義　三二
四　夏目漱石　山路　四二
五　高山樗牛　國民精神の統一　五五
六　森鷗外　高瀬舟　七三
七　尾崎紅葉　鹽原　九七
八　幸田露伴　暴風雨　一〇三

九　高須芳次郎　新しい詩の生誕　一〇九
一〇　朝比奈知泉　賴山陽　一二三
一一　村田春海　芳宜園大人の靈を祭る詞　一三三
一二　横井也有　百蟲譜　一三六
一三　近世の俳句　一四一
一四　十返舍一九　梯子賣　一四三
一五　上田秋成　白峯の陵　一四九
一六　井原西鶴　蚤の籠ぬけ　一五三
一七　松尾芭蕉　奥の細道　一五七
一八　近松門左衛門　曾我會稽山　一七二

一九　坪内逍遙　シーザーの館　一八四
二〇　吉田兼好　四季　一九五
二一　（謠曲）　景清　一九九
二二　小宮豐隆　能樂の面　二一〇
二三　（新古今集）　新古今集抄　二一七
二四　（增鏡）　新島守　二二一
二五　（平家物語）　大原御幸　二三〇
二六　（古今集）　古今集抄　二四二
二七　和辻哲郎　古代の信仰　二四八
二八　金子筑水　希臘思潮　二五四

二九　芳賀矢一　上古の文學　二六四
三〇　藤岡作太郎　中古の文學　二七五
三一　五十嵐力　近古の文學　一九七
三二　佐々政一　近世の文學　三一八
三三　藤村作　現代の文學　三二八
附錄
土居光知　國民文學と世界文學
國文學年表

大西祝 文學博士。明治三十三年歿、年三十六。

ゲーテ Goethe 獨逸の詩人。

マコーレー Macaulay 英國の歴史家、政治家。

シェークスピア Shakespeare 英國の劇詩人。

レッシング Lessing 獨逸の詩人、批評家。

バイロン Byron 英國の詩人。

一 批評論

大西祝

一、創作と批評

名評の得難き、殆ど名作の得難きに下らず。ハムレットを評する者ゲーテの如きあり。其の批評の至妙なる、マコーレーをして嘆美と絶望とに餘念なからしめたり。然れどもシェークスピアのゲーテを得る迄は、殆ど二百年を經過せり。夫れ文學及び美術上の創作は、主として結構的作用に屬す。理解的慧眼を以て其の結構の妙處を穿つは、これ批評家の本領とする所なり。批評家と創作家とは頗る其の才能の趣を異にするを以て、一人にして此の兩者の極處に達するは殆ど望む可らざるの難事なり。古來此の兩種の才能を兼ね具したる者にして、ゲーテ若しくはレッシングの如きは至つて稀なり。彼のバイロンの詩を賦するや、其の

廣島大學圖書之印

音調の爽快なる、其の詞句の有力なる、恰も一種魔術に似たりと雖も、一旦心を潛めて詩文の批評を爲さんとするに當つては、其の言ふこと極めて拙なり。彼の歌ふや天使に似たり。其の考ふるや三歳の童子に等し。夫れ詩才動くが故に詩人歌ふ。然れども必ずしも自ら其の由つて來る所を知らざるなり。詩人は能く美妙を直覺す。之を理解する者は批評家なり。詩人は恰も神明に通ずる者の如く、自ら其の理を解せずしてよく天地の美妙を開き、よく其の眞理を穿つ。詩人の爲に其の理を解する者は批評家なり。詩人は美妙を執つて之を其の作中に宿らしむ。彼もとより作中の美妙を知る。然れども必ずしも其の美たる所以を解釋し得るにあらず。之を解釋する者は批評家なり。然らば則ち詩人は天然を解する者、批評家は詩人を解する者と謂ひて可なり。此の詩人と其の批評家との關係は、之を推さば、以て概ね自餘の創作家と

其の批評家との關係を知るに足らん。

されば批評家は創作家の爲に殿となるの位地にあれども、亦よく之が先驅となるの榮譽を負へり。蓋し名評は名作の後に出づるのみならず、又よく未來の名作を誘引するの力あり。批評は啻に往時を顧みるに止らず、又將來を指揮するの力あり。批評家は己自ら創作せずと雖も、後世の創作家を敎へて望ある行路を取らしむることを得。且夫れ文學史上創作の時代と批評の時代とは、頗る其の趣を異にする所あるを以て、一國の文學若し批評の時代にある時は、創作は敢へて望む可からず。寧ろ之が爲に準備を爲すべし。創作の時代は招いて直ちに來る者にあらず。其の來るや深く國家百般の情況に因緣す。

彼のエリザベス時代の英國文學に於ける、又彼のゲーテ・シルレル時代の獨逸文學に於ける、其の例古來幾何かある。斯の如き

シルレル Schiller 獨逸の劇詩人。

創作時代の因となり緣となる者、固より一にして足らずと雖も、一般の國民、新鮮の思想を呼吸し、活潑なる精神的運動を始むるに於ては、其の國の文學望むらくは創作の時代に近からん。此の時に當り、社會に飛奔する種々雜多の思想を判別批評して、其の眞價を明かにし、以て當時の思想界に先だつ者は、蓋し批評家なり。此の時に當り、草を刈り土を反し種子を下して、以て將來の文華を招き來す者は、蓋し批評家なり。將に來らんとする文華の遲速と、其の情態とは大いに之に先だつ所の批評如何に關係す。兩者の相關する所太だ親密なるを知るべし。

二、批評の職分

批評の創作に關する所の如何を知れば、其の職分は、從つて推知し得らるべし。其の職分は他なし、在る物を在りの儘に見ることと是なり。此の事たる至つて爲し易きが如く見ゆべけれども、一

たび深く其の事の眞に何たるかを考ふれば、其の極めて難事なるを認識し得べし。蓋し事物を創作するには一種の才能を要する如く、其の創作の眞相を觀るにも、亦一種の才能なかる可からず。事物の相を認識するは、恰も鏡面の物象を受くるが如く、曇なく凹凸なき者にして始めて其の眞相を寫し得べく、智力の發達圓滿、心情の感應宏寛なる者にして始めて其の眞相を認識し得べし。且又事物の眞相は屢〻其の表面に出現せず、寧ろ其の內部に埋伏するが故に、慧眼を有するにあらずば之を發見する能はず。其の眼孔は事物の全面に亙ると共に、其の根柢に達せざる可からず。されば批評家が文學上の創作を品評し、其の眞相を明かにし、其の妙處を穿つは實に爲し難きことと謂ひつべし。

然らば則ち批評家は如何の作用によりて文學的創作の眞相を發見し得るか。今其の作用を分析して二段となし得べし。第一、

創作家と同情となること、第二、創作家の著作を我が有する所の最高の標準に照らすこと、是なり。人常に曰ふ、批評は須らく局外の人に委託すべしと。蓋し其の局に當る者は、動もすれば事の一方に執着して公平の判斷を失ふことあればなり。然れども唯眞理の半ばをいへるに過ぎず。何となれば、當局者にあらざるよりは其の事の內實隱微の邊に通じ難く、從つて皮相の見解を下すこと多ければなり。されば批評家たる者は、先づ身を創作家の位地に置き、其の考を自ら更に考へ、其の感覺を自ら更に感覺し、全く彼と同情となり、云はば一旦は彼創作家と變ぜざる可からず。此の如くにして始めて其の思想と感情との祕密の邊を探り得て毫も遺憾なきに到るべし。然れども一度身を創作家の位地に置きし上は、また翼を擊つて理想の上地に上り、最高の標準に照らして、其の創作家の著作に絕對的の批評を下さざる可か

らず。卽ち一度は近づき、一度は遠ざかり、一度は親友、一度は他人とならざる可からず。大自在の心なき者豈に之を爲し得んや。啻に心の自在なるのみならず、非凡の智力と感應力とを具ふる者にあらざれば、文學上最高の標準を發見し、且廣く創作家に對して同情となること能はざるなり。

三、批評の範圍

上來論じたる所は專ら文學の批評に關すれども、批評なるものは廣く之を解すれば、獨り文學に限るにあらず。美術には美術の批評あり、哲學には哲學の批評あり、創作のある所批評あらざるなし。且夫れ歷史は一種の批評に外ならず。或は國家の歷史、或は文學の歷史、或は學術の歷史、皆これ既往の事實を批評する者と謂つて可なり。將に社會に流布せんとする思想あるか、爰に最も缺く可からざるは之が批評なり。其の思想にして若し眞實の

價値あらば、宜しく之に印して思想界の貨幣となすべし。而して之に印する者は卽ち批評なり。且夫れ批評の職分は其の批評を下す所の事件に隨ひて多少其の趣を異にすべければ、文學的著作の批評家と、哲學若しくは其の他學術的著作の批評家とは、其の間自ら差別ありと雖も、其の批評家たるの大體に於ては、上來論じたる所と概ね相違ふことなかるべし。（大西博士全集）

○　山部赤人

春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寢にける

○　柿本人麿

ひんがしの野に陽炎の立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ

（萬葉集）

菊池寛
文學者。京都帝國大學文科大學出身。

二　恩讐の彼方に

菊池寛

享保九年の秋であつた。市九郎は赤間ヶ關から小倉に渡り、豐前の國宇佐八幡宮を拜した後、山國川を溯つて耆闍屈山羅漢寺に詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷に沿うて辿つた。

筑紫の秋は驛路の宿り毎に更けて、雜木の林には櫨赤く爛れ、野には稻黃色く實り、農家の軒には、この邊の名物の柿が眞紅の珠を聯ねてゐた。

それは八月に入つて間のない或日であつた。市九郎は秋の朝の光に輝く山國の清冽な流を右に見ながら、三口から佛坂の山道を越えて、午近き頃樋田の驛に着いた。

淋しい驛で晝食の齋にありついた後、再び山國谿に沿うて南

を指した。樋田驛から出外れると、道はまた山國川に沿うて火山岩の川岸を傳うて走つてゐた。

歩み難い石高道を、市九郎は杖を賴りに辿つてゐた時、ふと道の傍に、この邊の農夫であらう、四五人の人々が罵り騷いでゐるのを見た。

市九郎が近づくと、その中の一人は早くも彼の姿を見付けて、「御出家樣、これはよい處へ來られた。非業の死を遂げた哀な亡者ぢや。通りかゝられた緣に一遍の回向をして下され。」と賴んだ。

非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた旅人の屍骸ではあるまいかと思うた市九郎は、自分の過去の惡業を想起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚の竦むのを覺えたが、それは水死した男の屍骸であつた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々皮肉の破れてゐるのは如何

した仔細ぢや。」と、市九郎は恐る〳〵訊いた。

「御出家は旅の人と見えて御存じあるまいが、この川を半町も上れば鎖渡しといふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が悉く難儀する處ぢや。この男はこの川上の柿坂郷に住んでゐる馬士ぢやが、今朝鎖渡しの中途で馬が狂うたため、五丈に近い處を眞逆様に落ちて、見られる通りの無慚な最後ぢや。」と、その中の一人が言つた。

「鎖渡しと申せばかねゞ〳〵難所とは聞いてゐたが、かやうな哀を見ることは度々ござるかの。」と、市九郎は屍骸を見守りながら打ちしめつて訊いた。

「一年に三四人、多ければ十人も思はぬ憂目を見ることがある。無雙の難所故に、風雨に棧が朽ちても修繕も思ふに委せぬのぢや。」と答へながら、百姓達は屍骸の始末にかゝつた。

市九郎は、この不幸な遭難者に一遍の經を讀みをへると、足を早めてその鎖渡しへと急いだ。

其處まではもう一町と隔つてゐなかつた。見ると、山の左に聳えてゐる山が、山國川に臨む處で、十丈に近い絶壁に切裁たれて、そこに灰白色のぎざ〳〵した襞の多い肌を露出してゐるのであつた。山國川の水は、その絶壁に吸寄せられたやうに此處へ慕ひ寄つて、その裾を洗ひながら濃緑の色を湛へて渦卷いてゐるのであつた。

里人等が鎖渡しと言つたのはこれだらうと、市九郎は思つた。平坦な道はその絶壁に絶たれてしまつた、その中腹を松杉などの丸太を鎖で聯ねた棧道が危げに傳はつてゐる。か弱い婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え、心戰くも理であつた。

市九郎は岩壁に縋りながら、戰く足を踏みしめて、漸く渡り終つて、その絶壁を振向いて見た。その刹那であつた。彼の心に咄嗟にある大誓願が勃然として萌したのである。積むべき贖罪の餘りに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業に逢ふ事を祈つてゐた。今、目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命が奪はれる難所を見た時、自分の身命を捨ててこの難所を除かうといふ思附が旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百餘間に餘る絶壁を刳貫いて道を通じようといふ不敵な誓願が彼の心に浮かんで來たのも無理ではなかつた。

市九郎は、自分が求め歩いたものが漸く此處で見付かつたと思つた。一年に十人を救へば、十年には百人、百年千年と經つ中には千萬の人の命を救ふことが出來ると思つたのである。

かう決心すると、彼は一途に實行に着手した。その日から羅漢

寺の宿坊に宿りながら、山國川に沿うた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めたのである。

が、何人もこの邊には馴染のないこの風來僧の言葉に耳を傾けなかつた。

「三町をも超える大磐石を刳貫かうといふ瘋狂人ぢや。はゝゝ」と嗤ふものはまだよい方であつた。

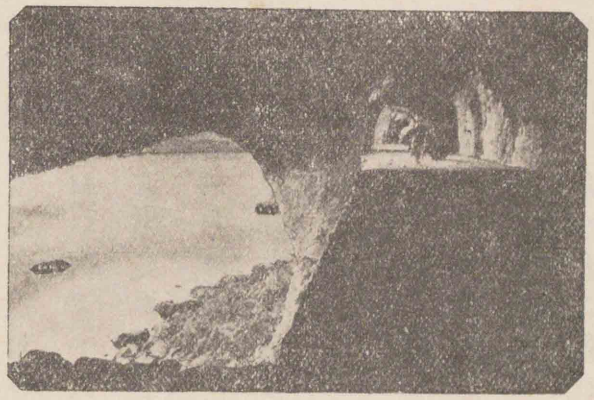
「大騙ぢや。針の目から天をのぞくやうな事を言前にして、金を集めようといふ大騙ぢや。」と、市九郎の勸説に迫害を加へる者さへあつた。

市九郎は一月にも近い間勸進に努めたが、何人も耳を傾けぬのを知ると、奮然として獨力この大業に當ることを決心した。彼は、石工の持つ鎚と鑿とを手に入れると、自分たつた一人でこの大絶壁の一端に立つた。削り落し易い火山岩であるとは云へ、川

を壓して聳え立つ蜒々たる大絶壁を、市九郎は自分一人の力で刳貫かうとするのであつた。

「到頭氣が違つた。」と、行人は市九郎の姿を指しながら嗤つた。

併し、市九郎は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して、觀世音菩薩に祈誓を籠めた後、渾身の力を籠めて第一の鎚を下したのであるが、それに應じて只二三片の碎片が飛散つたばかりであつた。再び力を籠めて、第二の鎚を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から分離したばかりであつたが、市九郎は少しも失望しなかつた。第三、第四、第五と、彼は懸命に鎚を下した。空腹を感



青の洞門

ずれば近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向かつて鎚を下した。懈怠の心を生ずれば眞言を唱へて勇猛の心を振起した。一日、二日、三日、市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人はその傍を通る度に嘲笑の聲を送つたが、市九郎の心は、その爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に鎚を持つ手に力を籠めた。

やがて市九郎は、雨露を凌ぐ爲に絶壁に近く木小屋を建てた。朝は山國川の流が星の光を映す頃から起出で、夕は瀨鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃迄も、鎚を振ふ手を止めなかつたが、行路の人々はなほ嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたわけぢや。」と、市九郎の努力を眼中に置かなかつた。

が、市九郎は一心不亂に鎚を振つた。鎚を振つて居りさへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨も其處

にはなかつた。極樂に生れようといふ欣求も無かつた。只そこに晴々した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來、夜毎の寢覺に身を苦めた自分の惡業の記憶が日に薄らいで行くのを感じた。彼は益〻勇猛の心を振起して、一向專念に鎚を振つたのである。

新しい年が來た。春が來て、夏が來て、早くも一年が經つた。市九郎の努力は空しくはなかつた。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれてゐた。それは、ほんの小さい洞窟ではあつたが、市九郎の强い意志は最初の爪痕を明かに止めてゐた。

が、近鄕の人々はまだ市九郎を嗤つた。

「あれ見られい。狂人坊主があれ丈掘りをつた。一年の間もがいてたつたあれ丈ぢや。……」と嗤つたが、市九郎は自分の掘穿つた穴を見ると、涙の出る程嬉しかつた。それはどんなに淺くとも、自

分の精進の力の如實に現れてゐるものに相違なかつた。また一年が經つた。市九郎は年を重ねて更に振ひ立つた。夜は如法の闇に、晝も猶薄暗い洞窟の裡に端坐して、只右の腕のみを狂氣の如くに振つてゐた。市九郎にとつて、右の腕を振ふ事のみが彼の宗教的生活のすべてになつてしまつた。

洞窟の外には、日が輝き、月が照り、雨が降り、嵐が荒んだが、洞窟の中には間斷なき鎚の音のみがあつた。

二年の終にも里人は猶嗤笑を止めなかつたが、それはもう聲に迄は出て來なかつた。只市九郎の姿を見た後、顏を見合はせて互に嗤ふだけであつた。更に一年經つた。市九郎の鎚の音は、山國川の水聲と同じく不斷に響いてゐた。村の人達はもう何とも言はなかつた。彼等が嗤笑の表情は、何時の間にか驚異のそれに變つてゐた。市九郎は長い間梳らない爲に、頭髪は何時の間にか伸

びて雙肩に掩ひかゝり、浴せざれば垢づきて人間の姿とも見えなかつた。彼は自分が掘穿つた洞窟の裡に、獸の如く蠢きながら、狂氣の如くその鎚を振ひつゞけてゐたのである。

里人の驚異は何時の間にか同情に變り始めてゐた。市九郎が暫しの暇を盜んで、托鉢の行脚に出かけようとすると、洞窟の出口に思ひがけなく一椀の齋を見出すことが多くなつた。市九郎はその爲に托鉢に費すべき時間を更に絶壁に向かふ事が出來た。

四年目の終が來た。市九郎の掘穿つた洞窟は最早五丈の深さに達してゐたが、その三町に超える絶壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものの、まだかくばかり見え透いた徒勞に合力する者は一人もなかつた。市九郎は只一人その努力を續けねばならなかつたが、もう掘穿つ仕事

に於て三昧に入つてゐた市九郎は、只鎚を振ふ外は何の存念もなかつた。土鼠(もぐら)のやうに、命のあるかぎり掘穿つて行く外には、何の他念もなかつた。彼は只一人拮々として掘り進んだ。洞窟の外には春が去つて、秋が來て、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の鎚の音のみが響いた。

「可哀さうな坊樣ぢや。物に狂つたと見え、あの大磐石を穿つて行くわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを。」と、行路の人々は、市九郎の空しい努力を悲み始めたが、一年經ち、二年經ち、丁度九年目の終に、市九郎の穿つた穴は入口より奥まで二十二間を計るまでに掘り進んでゐた。

樋田鄕の里人は、始めて市九郎の事業が可能であるのに氣が付いた。一人の瘠せはてた乞食僧が九年の力でこれ迄掘穿ち得るものならば、人を增し、歲月を重ねたならば、この大絶壁を穿ち

貫く事も必ずしも不思議な事ではないといふ考が、里人等の胸の中に銘ぜられて來た。九年前、市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川に沿ふ七郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に附き始めた。數人の石工が市九郎の事業を援ける爲に雇はれた。もう市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の鎚の音は、勇ましく賑やかに洞窟の中から洩れはじめたのである。

が、翌年になつて、里人達が工事の進み方を測つた時、それが未だ絶壁の四分の一にも達してゐないのを發見すると、彼等は再び落膽疑惑の聲を洩らした。

「人を增しても迚も成就はせぬ事ぢや。あたら了海どのに騙されて入らぬ物入をした。」と、彼等は捗取らぬ工事に何時の間にか飽き始めてゐた。市九郎は、又一人取殘されねばならなかつた。彼は自分の傍に鎚を振る者が、一人減り、二人減り、遂には一人も居

なくなつたのに氣がついたが、彼は決して去る者は追はなかつた。默々として自分一人その鎚を振ひ續けて行くのであつた。

里人の注意は全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が深く穿たれゝば穿たれるほど、その奥深く鎚を振ふ市九郎の姿は、行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は闇の裡に鎖された洞窟の中を透して見ながら、

「了海さんはまだやつてゐるのかなあ。」と疑つたが、さうした注意も、しまひには段々薄れてしまつて、市九郎の存在は里人の念頭から屢消失せようとしたが、市九郎の存在が里人に對して沒交渉である如く、里人の存在も亦市九郎に沒交渉であつた。彼には只眼前の大岩壁のみが存在するばかりであつた。

市九郎は、洞窟の中に端坐し始めてから、最早十年にも餘る間、暗い冷たい石の上に坐り續けてゐた爲に、顏は色蒼ざめ、雙の眼

は窪んで、肉は落ち、骨は露れ、この世に生ける人の姿とも見えなかつたが、市九郎の心には不退轉の勇猛心が頻りに燃え旺つて、只一念に穿ち進む外には、何物もなかつた。一分でも、一寸でも、岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎は、只一人取殘されたまゝに、また三年を經た。すると、何時の間にか里人達の注意は再び市九郎の上に歸りかけてゐた。彼等がほんの好奇心から洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間、川に面する岩壁には採光の窓が一つ穿たれ、最早この大岩石の三分の一は、主として市九郎の瘠腕に依つて貫かれてゐる事がわかつた。

彼等は再び驚異の眼を刮いた。過去の無智を耻ぢた。市九郎に對する尊崇の心が再び彼等の心に復活した。やがて寄進された十人に近い石工の鎚の音が、再び市九郎のそれに和した。

また一年經つた。一年の月日が經つ中に、里人達は何時かしら目先の遠い出費を悔い始めてゐた。寄進の人夫は、何時の間にか、一人減り、二人減つて、おしまひには市九郎の鎚の音のみが洞窟の闇を打顫はしてゐたが、傍に人が居ても居なくても、市九郎の鎚の力は變らなかつた。彼は只機械の如く、渾身の力を入れて鎚を擧げ渾身の力を以てこれを振下した。彼は自分の一身をさへ忘れてゐた。主を殺した事も、剽賊を働いた事も、人を殺した事も、凡ては彼の記憶の外に薄れてしまつてゐた。

一年經ち、二年經つた。一念の動くところ、彼の瘠せた腕は鐵の如く屈しなかつた。丁度、十八年目の終であつた。彼は何時の間にか岩壁の二分の一を穿つてゐた。

里人はこの恐ろしき奇蹟を見ると、最早市九郎の仕事を少しも疑はなかつた。彼等は、前二回の懈怠を心から耻ぢ、七郷の人々

が合力の誠を盡くして、擧つて市九郎を援け始めた。その歳、中津藩の郡奉行が巡視して、市九郎に對して賞美の言葉を下した。近郷近在から三十人に近い石工が蒐められた。工事は枯葉を燒く火のやうに進んだ。

人々は、衰殘の姿痛々しい市九郎に、「最早そなたは石工共の統領をなさりませ。自ら鎚を振ふには及びませぬ。」と勸めたが、市九郎は頑として應じなかつた。彼は殪れゝば鎚を握つたまゝ殪れたいと思つてゐるらしかつた。彼は三十の石工が傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ懲命の力を盡くすこと少しも前と變らなかつたが、人々が市九郎に休息を勸めたのも無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く坐り續けた爲であらう、彼の兩脚は永い端坐に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いてゐた。僅かの歩行にも杖に縋らねばならなかつた。

◎中央公論
◎政治、経濟、
◎創作、小説、
◎日本第一雜誌、

その上、長い間闇に坐して日の光を見なかつた爲であらう、また不斷に彼の身邊に飛散る石の碎片がその眼を傷けた爲でもあらう、彼の兩眼は朦朧として光を失ひ、物のあいろも辨へかねるやうになつてゐた。

遠に不退轉の市九郎にも、身に迫る老衰を傷む心はあつた。身命に對する執著はなかつたけれど、中道にして殪れることを何よりも無念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱ぢや。」と、彼は心の裡に叫んで、身の老衰を忘れようと懸命に鎚を振ふのであつた。

冒し難き大自然の威嚴を示して、市九郎の前に立塞つてゐた岩壁は、何時の間にか衰殘の乞食僧の鐵のやうな心に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は命あるものの如く一路その核心を貫かんとしてゐるのであつた。（我鬼）

阿部次郎
東北帝國大學
教授。

三　人格主義

阿部次郎

人格主義とは何であるか。それは少くとも人間の生活に關するかぎり、人格の成長と發展とを以て至上の價値となし、この第一義の價値との聯關に於て、他のあらゆる價値の意義と等級とを定めて行かうとするものである。人格に代る價値として他の何物をも認容しないと同時に、人格の價値に奉仕するかぎりに於て、他のあらゆる物に價値を分與せんとするものである。併し人格とは、一體何であるか。私達の考察は先づ此處から出發しなければならない。

私は人格の概念を明かにするために、此處に四つの標識を擧げることが出來ると思ふ。第一に、人格は物と區別せられるところにその意味を持つてゐるものである。第二に、人格は個々の意

カント
Kant
獨逸の哲學者。

識的經驗の總和ではなくて、その底流をなして、これを支持し、これを統一するところの自我である。第三に、人格は分つべからざるものと云ふ意味に於ての個體である、一つの不可分な生命である。第四に、人格は先驗的要素を內容としてゐる意味に於て、後天的性格と區別される。カントの言葉を用ひれば、それは單純な經驗的性格ではなくて、睿智的性格を含んでゐるところにその特質を持つてゐるのである。

精神と物質とは、異なれる存在を持つてゐるものであるか。或は同一存在の兩方面に過ぎないものであるか。若しくは孰れかが根本的存在であつて、他はその派生的存在に過ぎないのであるか。此等存在に關する問題は如何に解釋せられるにせよ、兎に角精神と物質とを區別して考へることが許されるかぎり、それは異なれる意味を持つてゐるものでなければならない。その意

味の相違は、精神が思考し、感じ、意欲する主體であるのに對して、物質が思考せられ、感ぜられ、意欲せられる對象であるところにある。若しくは、凡ての存在は、それが思考や、感情や、意欲の主體であるかぎりに於て精神であり、それが單に或他の精神によつて思考せられ、感ぜられ、意欲せられる對象であるに止つて、自ら思考や、感情や、意欲の主體でなくなるかぎりに於て物質である。私達が苟も精神と物質とを何かの意味に於て區別する時、その區別は當然に兩者の間に於ける此の對立を意味しなければならない。隨つて少くとも價値の問題に關するかぎり、精神と物質とを區別するとは、直ちに精神を主として物質を客とすること、若しくは從とすることになるのである。物の價値は精神によつて始めて與へられる。精神の要求を無視して物の價値を云爲するは、本來無意味である。さうして人格とはこの精神であり、價値と

ニイチェ Nietzsche 獨逸の哲學者。
ツァラツストラ Zarathustra

意味との主であるところのものに名附けた名であつて、その對象たるに止るところの物は之に對立する。人格主義は精神であるが故に、私達が人格であるかぎり、私達は智者であり、感情家であり、努力家であることが出來る。併し私達は金であり、時計であり、又肉體であることは出來ない。此等の物は――私達の肉體と雖も――唯私達によつて持たれるものであるに止るのである。私達は或者であり、何物かを持つ。私達の持つ物を私達の精神的屬性と區別するところに、人格の概念の第一の標識は成立するのである。

併し私は茲で、上述の所說と表面上正反對であるやうに見える一つの思想に、自分の立場から解釋を下して置く必要を感ずる。それはニイチェのツァラツストラに於ける「肉體の侮蔑者について」の一章である。彼の說に從へば、精神はたゞ微小なる理性

であり、自我の如きは或者の意志に操らるゝ玩具の類に過ぎない。背後にあつてこれを驅使する者は、更に偉大なる理性、威力ある命令者、知られざる賢者である。それはツァラツストラの命名に從へば、自體である。而も自體は畢竟肉體であるが故に、人間を根本より支配するものは、精神や自我ではなくて、肉體でなければならない。「汝の肉體の中には、汝の最良の智慧よりも、更に多くの理性がある。それは自我を云はずして、自我を行ふ。」「創造する肉體は、其の意志の手として自己のために精神を創造したのである。」―私達は此の如き肉體の讃美と精神の侮蔑に對して如何なる立場を取るべきであるか。正面から私達の立場を覆さんとするが如き此の說に對して、私達は如何に答ふべきであるか。思ふに此の答は、意外に簡單に片附けることが出來るであらう。若しツァラツストラの意味が、精神的生活の自然的條件として、肉體

の意義を高調するところにあるならば、それは「健全なる精神は健全なる肉體の中に宿る。」といふ古諺と同義に歸着する。然るに此の古諺は、精神の健全を目的とする者は、其の自然的條件として肉體を健全にしなければならぬと主張するに止つて、價値若しくは目的の見地よりすれば、それは依然として精神を主位に立ててゐるのである。隨つて此の諺にどれほどの一般的眞理が含まれてゐるにせよ、それは私達の從來の立脚地を覆すには足りないのである。さうして若しツァラツストラの眞意が、――前述の引用によつても明かであるやうに、――單に自然的條件として、肉體の意義を高調するに止らずに、肉體の價値の優越を主張するところにあるとすれば、彼が此の優越を主張する根據は、畢竟何處にあるか。それは肉體が精神以上に偉大なる理性者・命令者・智者・不言實行者・創造者であるところになければならない。換言

すれば、それが、日常の言葉を用ひれば、肉體以上の或者、私達の言葉を用ひれば、正に精神であるところになければならない。ツァラツストラは肉體若しくは自體といふやうな衝動的な言葉を用ひて、其の實精神の世界に於ける二種の區別に注意を喚ばうとしてゐるのである。さうして彼の言葉を此の意味に解すれば、私達は其の中に、人格の第二の標識を指示する意味深い眞理を讀むことが出來るであらう。私達の人格は個々の刹那に於ける思考內容・感情內容・意欲內容の總和若しくは連續ではない。それは此等のものを生起せしめ、消長せしめつゝ、而も自らも充分に自己を把握し得ざるが如き內面的活動の主體である、統一の原理である、生命である。人格と外界との關係は、單に意識と其の所與との關係ではなくて、創造者と其の材料との關係である。私達は人格の概念を問題とする時、特にこれと意志若しくは生命の

觀念との聯關に注目することを要する。

隨つて人格は一つの分つべからざるもの、一つの生命を本質とする個體でなければならない。一つの生命によつて貫かれてゐないものは一つの人格ではない。一つの生命の連續を缺く時、類似は固より全然同一と雖も、人格の同一の根據とはなることが出來ないのである。此の意味に於て、人格は個體である。隨つて人格が個體たる所以は、他の人格との對立、若しくは相互制限にあるのではなくて、一貫の生命を持つてゐるところにある。對立若しくは相互制限とは、私達といふ特殊の人格に於て發見せられる經驗的事實に過ぎない。私達が若し制限を絕して、而も一つの生命を有する神若しくは宇宙といふものを想定することを許されるならば、其の生命が精神的なものであるかぎり、私達はこれを個體と名づけ、人格と呼ぶに何の矛盾をも感ずる必要が

ないのである。人格となるとは、他との對立を強制することではなく、自己の本質に復歸することである。此處に人格の第三標識が、――人格主義を普通の個人主義と區別すべき主要な着眼點が成立する。

最後に人格の生活には、自己の如何ともし難き性格をも、猶之を批判したり、詰責したりするやうな普遍的・先驗的原理が含まれてゐる。如何なる境遇と性格と宿命とによるにせよ、之に背反することを許容せず、苟も之に背反する者に自ら安んずることを得ざらしめるやうな斷言的命令が與へられてゐる。人格は單に一つの生命として、自然的統一を有するのみならず、又一つの嘗試によつて先驗的に統一せられてゐなければならない。此處に人格と經驗的性格との差別がある。人格の先驗的要素は、經驗的性格を鼓舞し、激勵し、苦め、惱ましし、洗煉し、淨化して、人格を人格

として琢磨せんとする。人格主義を主觀主義と區別する人格の第四の標識は、此處に成立するのである。

人格主義とは、此の如き人格の成長と發展とに至上の價値を置くものである。（人格主義）

○

綱島梁川

或は曰く、瞑想は獨語なりと。加へて云はん、獨語は祈禱なりと。祈禱をして常にわれ知らず心の底より迸り出づる天眞の獨語たらしめよ。かくてそは如何ばかり美はしく且力あるべき。

無念無想の祈あり。言ひがたき嘆の祈あり。涙にあまる思慕の祈あり。一言の祈あり。千萬言の祈あり。爭鬪向上の祈あり。感謝平和の祈あり。すべて眞心より出づるものは皆祈なり。

（同光錄）

夏目漱石
名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。

四山路

夏目漱石

山路を登りながら考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い所へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ、鬼でもない。矢張向三軒兩隣に、ちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて越す國はあるまい。あれば、人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。

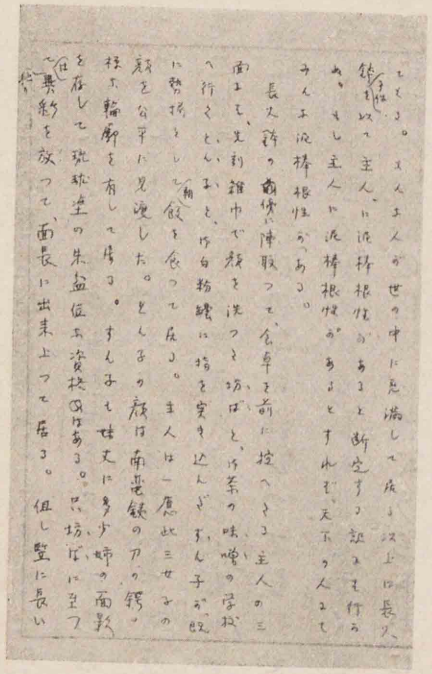
こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐かにする故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩を引拔いて、有り難い世界をまのあたり寫すのが詩である、畫である。あるひは音樂と彫刻とである。こまかに云へば、寫さないでもよい、只目のあたり見ればそこに詩も生き歌も湧く。着想を紙に落さずとも、瓊鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向かつて塗抹せぬでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱するの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾

坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

長者の息子は正月を知らず。
觀樂極まつて。哀傷多し。



夏目漱石筆蹟

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のある所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。喜の深きとき、憂愈深く、樂の大いなほど苦も大きい。これを切放さうとすると身が持てぬ。片付けようとすれば、世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば、寢る間も心配だ。

らう。

閣僚の肩は、數百萬人の足を支へて居る。脊中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ。存分食へば後が不愉快だ。余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏みそこなつた。平衡を保つために、すはやと前に出した左足が仕損じの埋合せをすると共に、余の腰は工合よく方三寸ほどな岩の上に卸りた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍りだしただけで、幸と何の事もなかつた。

立上る時に向を見ると、路から左の方に、馬尻を伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か分らないが、根元から頂まで悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、つゞき目が確と見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。

禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ、はつきりして居る。行く手は二町ほどで切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても石は平かにならぬ。石は切碎いても岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等のために道を讓る景色はない。向で聞かぬ上は、乘越すか廻らなければならぬ。巖のない所でさへ、歩きよくはない。左右が高くつて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより、川底を渉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶら〳〵と七曲へ

漸層法長所。

かゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて居たたまれない樣な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もないのだ。

漸層法の好例

さなければ氣が濟まぬと見える。其の上、どこ迄も登つて行く、いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛上つて來るのか

と思つた。次には落ちる雲雀と上る雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も上る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只、菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に、魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた所だけ諳誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其の二三句のなかに、こんなのがある。

前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。

シェレー Shelley 英國の詩人。

腹からの笑といへど、苦のそこにあるべし。
美しききはみの歌に、悲しさのきはみの想、籠るとぞ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の樣に思ひ切つて一心不亂に、前後を忘却してわが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲も多からう。そんならば、詩人になるのも考へものだ。しばらくは路が平らで、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に、時々蒲公英を踏みつける。鋸の樣な葉が遠慮なく四方へのして、眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎭

坐して居る。呑氣なものだ。又考をつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も。―櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦も起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し、苦のないのは何故だらう。只此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只此の景色が、―腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂ませつゝあるから、苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。

吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

苦んだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽きくした。飽きくした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。

どこ迄も世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、此の境を解脫することを知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけ

で用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を驅けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理ではない。うれしい事に、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採菊東籬下、悠然見南山。

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向に隣の娘が覗いてる譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害得失の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月來相照。

只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽車・汽船・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寢込む樣な功

採菊云々　陶淵明の詩。

獨坐云々　王維の詩。

德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵呑氣な扁舟を浮かべて、此の桃源に溯るものはない樣だ。余は固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣げようと云ふ心掛も何にもない。只自分には、かう云ふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも樂になるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも有り難く考へられる。かうやつて只一人、繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそ〳〵歩くのも、全くこれが爲である。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く

ファウスト　ゲーテの作。
ハムレット　シェークスピアの作。

續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も、好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寢た男でもなからう。矢張餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かう云ふ余も其の通り。いくら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山のなかへ野宿するほど非人情が募つては居らぬ。

こんな所でも人間に逢ふ。ちん〳〵端折の頬冠や、赤い腰卷の姉さんや、時には人間より顏の長い馬にまで逢ふ。百萬本の槍に取圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭は中々取れない。それ所か、山を越えて落ちつく先の今宵の宿は那古井の溫泉場だ。（草枕）

高山樗牛
名は林次郎。文學博士。明治三十五年歿、年三十二。

五　國民精神の統一

高山樗牛

獨逸に Zeitgeist（ツァイトガイスト）の語あり。茲に時代精神と飜す。一時代の人文の全部を貫通して其の活動進歩の動機となる根本思想の義なり。

高山樗牛

一定の歳時及び方處に於ける時代精神は、必ずしも唯一ならず。否多くの場合に於ては、諸種の傾向互に交貫離合して其の歸向する所同じからざるを常とす。これ社會的範圍の廣きに隨つておのづから萬人の思想の統一せられ難き事情あればなり。人文發達の上より見る時は、この時代精神の統一は必ずしも希望すべき事にあらず。沈滯固陋なる形式主義の打破せられたる

曉には、從來の强制的統一に對する反動として、社會の人心に數多の異なりたる思想を惹き起すべく、斯くして惹き起されたる數多の理想の追求は、將に來らんとする統一時代に到達するの準備として極めて必要なる事なり。

今一例として文藝復興期の美術を擧げんに、中世紀の宗教的形式を擺脱して個人的自在を發展せんとするこの時代の精神につれ、美術も亦古代傳說及び宗教の繫縛を離れて自家獨立の進歩に向かひぬ。中世の美術は徹頭徹尾宗教によりて統一せられたり。建築も彫刻も繪畫も一に宗教の頤使に任じたるを以て、其の間に一致融合の存在するあり。この一致融合てふ形式的事實は甚だ嘉すべしと雖も、これあるが爲に各科美術は其の自由の發展を拘束せられ、沈停腐爛に陷るを免れず。これ統一の利益に對せる弊害の一面なり。この弊の究る所、一切の製作は教會の

名に依りて立ち、美術家の名稱は多く堙滅し、其の題目及び內容は一に宗教的傳說の決する所となり、美術家の唯一の職能は唯僅かに刀鋸の技巧にありき。文藝復興期に萌發したる近世的精神は、方にこの繫縛を打破すべく起りぬ。今や良し教會と美術と全く分離するに及ばずと雖も、美術家は超然として傳說・證典の外に立ち、宗教的題目に關しても一に自家獨立の思想によりて解釋し、古來陳套の資材に新生命を與へたり。さしも中世紀に賤まれたる天然も、今や彼等は快灑なる胸襟を披拂して其の美を包容し、荒唐不自然なる從來の美術に更に一段の寫實的分子を貼襯せり。是に於てか人體解剖・遠近投射の研究漸く行はれ、光線・空氣の影響は素より、色彩濃淡の完美を究めたり。人體を以て汚穢の肉塊と觀じたるの風全く地を拂ひ、優雅なる人物畫・風景畫は盛んに行はれ、憂鬱なる世界は玆に一種愉快の空氣を以て充

たされたり。是に於て中世紀に於ける抽象理想主義全く仆れ、自由なる自然主義は旭日中天の勢を以て當代の美術界を風靡せり。建築・彫刻・繪畫は宗教の束縛を離れ、各自其の獨立の進路を取りて自由の發展を求め得たり。美術史上希臘のペリクレース期を外にして、他に比類無きラファエル時代の全盛は、斯の如くにして發現せられき。此を以て是を見れば、文藝復興期は美術界に於ける精神的分裂の端緒を開きたり。然れども是の如き精神的分裂は中世の固陋なる形式主義の統一を壞り、近代美術を啓發するに於て寧ろ大いに必要なりしなり。これ分裂の弊害に對する利益の一面なり。

この例に於て見るが如く、時代精神の統一必ずしも喜ぶべきにあらず。其の分裂亦必ずしも悲むべからず。要は進歩に益するの如何にあるのみ。然れども人文發達の極致は、形式上素より分

裂にあらずして統一に存すべし。而してこの極致に當るべき統一は、外部の壓力を以て一時の合同を強ふる者に非ずして、必ずや各部分の自由なる發達を包容せる內面的調和に存すべし。故に時代精神の分裂の時として喜ぶべきは、是の如き極致の統一に達するの一階段たるの場合に於てのみ。分裂其の物は毫も希望するに足らざるなり。文藝復興期に於ける美術の分裂が、中世の統一よりも喜ぶべしとなすは、この分裂が永久のものに非ずして、彫刻と繪畫と建築との三者が個々相獨立して全內部の發達を成就したらん後、更に其の結合を再びするの時あらんを思へばなり。

翻つて我が邦の現狀を觀ずれば、吾人は時代精神の分裂漸く其の主力を磨滅し、今や方に其の統一の機に迫りつゝあるを見る。統一の弊や、則ち沈滯腐爛、分裂の害や、卽ち扞格齟齬。其の弊た

福澤氏
福澤諭吉。
中江氏
中江篤介。

り害たるに到りては卽ち一なり。吾が邦の今日は方にこの扞格齟齬の害を被りつゝあるにあらざるか。請ふ吾人をして少しく是を陳べしめよ。

抑〻本邦國民が德川氏の司配の下に三百年の太平を樂みしや、所謂時代の精神は江戸覇府の權力を代表せる一種の封建的形式主義によりて、兎も角も其の統一を保ちたり。政治・宗教・文學・美術等一切の文物は、この形式主義の圈套に拘禁せられ、互に其の否塞をかこちながら、兎も角も調和一致せりき。然れども維新の革新と共に社會の活動の大頭腦大把柄たる封建制度の顚覆せらるゝや、多年形式主義の壓制に困みし人心は、玆に激烈なる反動を起して個人自由の發展を主張し、奔放騰逸、左支右吾、一時は其の停る所を知らざるの勢ありき。一方には福澤氏の所謂楠權論の如き爭あり。他方には中江氏の民約論の譯書の都鄙に歡迎

箕作氏
箕作麟祥。
西村氏
西村茂樹。

せらるゝあり。箕作氏の勸善訓蒙、若しくは西村氏の智氏家訓の如き、個人的倫理主義は孝經・論語に薰陶せられたる從來の人には如何に異樣の觀ありしぞ。眞政大意・立憲政體略の如き政治書は百個條の德川憲法を見慣れたる眼に如何に奇怪に映ぜしぞ。功利主義・民約主義の西洋思想が急進者流の間に汎濫せし時に當りて、他方には國學・神道の再興あり。平田流の所謂皇學は幕府の下に忍びたる久屈の餘勢を振起して一部の人心を風靡せり。觀來れば、紛然雜然其の歸向する所を知らず。保守と進步と、外國と內國と、政治・宗教・文學の上に到る處に衝突軋轢せり。今日より見れば、かゝる思想の分裂は一見甚だ奇怪なりと雖も、當時國民思想の不定なるや、是の如き異なる物を包容して毫も其の弊害を自覺せざりしなり。

この渾沌たる狀態は明治十年以後に到りて漸く剖判の氣運

に向かひたり。維新この方引續きたる改革の精神も漸く靜穩となり、無謀なる急進と頑迷なる保守とは朧げながらも漸く自他の長短を覺識し、民約論的急進派も彼我國情の差別を覺りて自ら猛省し、皇學的守舊派も漸く世界の大勢に鑑みて其の反動の氣焰を收め、茲に共に眼を放ちて自國の世界に對する位置を考察し、以て國家將來の方針を打算し來らんと企てぬ。德富氏の將來の日本、志賀氏の南洋時事一類の書が一時洛陽の紙價を貴からしめしは、所詮これ氣運の高潮に乘じたるを以てなり。

顧ふに維新の改革は鎖國の覆面を轉落し、國民をして自國以外に世界あることを知らしめたりき。喩へば猶多年暗室に拘禁せられたる人の一朝白日の下に放たれたるが如くなり。一時外物に眩惑して自ら爲す所を知らず、手足の觸るゝ所情意の催す所に隨つて偸合苟容これ事とせしは、寧ろ自然の勢のみ。これ明

德富氏　德富猪一郎。
志賀氏　志賀重昂。

治十年以前の國民が殆ど無意識に盲動せし所以なり。然れども其の以後に於ける國民思想の經過を依傍すれば、暗移默從の間おのづから一理の貫通するあり。照應收繳以て其の根本的動機を成しつゝあるを見る。何ぞや、國民的自覺の發達これなり。而して吾人は是の國民的自覺の發達は時代精神の統一に向かつて着々其の歩を進めつゝあるの事實を認む。

抑、其の國民的たると個人的たるとを問はず、なべての自覺は三個の階段を經由して發達するを常とす。その初は純客觀的にして、中ごろは純主觀的となり、終には主客兩觀の比量に本づける眞正の自覺に到着す。蓋し自覺の概念は第一自他の差別を豫想す。自己たるを覺するには先づ自己ならざる他物の認識を須要とす。これ素より論無きなり。而して自己存在の眞意義は自己と俱存せる一切の實在物と自己との關係を知了する上に存す。

これ亦當に然るべきなり。唯この自覺の眞境地に達し、自他の公平なる比較を遂げ得る前には、或は主觀の一面に偏依し、或は客觀の他面を過重す。これ振子の中正を得んが爲には左右の擺動を免れざると一般、亦自然の數なりと謂ふべし。

今我が邦にありては、維新の改革は則ち國民的意識を覺醒せる曉鐘なり。吾人が一個の國民としての生活は、實にこの時を以て始れりと謂ふも敢へて不可無きなり。唯創めて國民的意識に目覺めたるものが、頭を擧げて當眼先づ西洋諸國の燦然たる文物に眩惑したるを以て、他を擧げて己を卑うし、偏に外邦の事物を移殖して我が土壤を飾表せんことに務む。これ國民的自覺の發達上、所謂純客觀の階段にして、極端なる歐化主義の行はれたる時代なり。是を宗教的意識の發達に比すれば、太古素朴の民族が天地の崇大に接し、自ら抑畏して自然現象を神として拜する

が如し。然れども是の如き極端なる歐化主義を實際に行はんとするに臨み、其の民情・國性と相調和せず、往々枘鑿相容れざるものあるを經驗するに及びてや、茲に初めて各國人文の特性に想到し、彼と我とも亦獨立獨歩の發達を爲すべきものなりと斷定し、翻つて自尊排他の精神を振起するに到る。これ明治十年前後に於て皇學の勃興に伴へる保守論の精神なりとす。これ國民的自覺の發達上純主觀の階段に屬す。これ猶自然宗教に反對して、所謂主觀的宗教が萬有に遍在せる神は亦吾人の精神中にも現るべきを信じ、隨つて眞正の宗教は神を身外に拜するにあらずして心内に觀ずるにあることを認むると相似たり。この純客觀と純主觀との二個の傾向は、實際上必ずしも截然相繼承せず、時に隨つて盛衰起伏するを常とす。然れども維新以來國民思想の變遷が其の消長と提挈左右したることは爭ふべからざるなり。

殊に近來兩者の主張漸く極端を遠ざかりて中正に近づき、先の楠權論と皇學論とは中ごろ歐化主義と國粹主義とに移り、今や形を變じて世界主義と國家主義との對峙を觀るに到れり。是等の名稱は主として倫理上に關せりと雖も、百般の文物多少同一の影響を被らざるは無し。

吾人は以上の觀察によりて、最近三十年間に於ける國民的自覺の發達が、時代精神の統一に向かつて着々其の歩を進めつゝあるを確認す。試みに今の世界主義を以て往日の歐化主義に比せよ。若しくは現時の國家主義を以て疇昔の國粹主義と較べよ。其の說く所の正偏優劣は素より日を同じうして論じ得べからざるものあり。これ畢竟國民が多年の經驗に指導せられ、漸く自他の間に公平なる商量を遂げ得る所の、吾人の所謂眞正なる國民的自覺に接近しつゝあることを示すものに非ずや。而して是

の眞正なる國民的自覺を代表せるものは、所謂世界主義の極端に走らず、所謂國家主義の固陋に陷らず、國性・民情の特質及び其の發達の理想を自覺して、世界人文の我に及す勢力を商量し、其の生存及び進歩に必要なる條件を以て中正なる國家主義に歸する所の日本主義卽ちこれのみ。吾人は時代精神の統一を以て日本主義の天職なりと信じ、且この統一が目下の急務なるを認む。

先にも言ひし如く、時代精神の分裂其の物は決して喜ぶべきことに非ず。唯々更に完全なる統一に達せんが爲の準備として其の用を見るのみ。吾人は思ふ、維新の改革と共に四分五裂したる國民思想は、爾來三十年間の獨立の發達によりて、既に其の分裂の結果を改め了りたるには非ざるか。而して今や方に其の統一せらるべき時期に到達したるには非ざるか。國民的自覺の發

達に連れたる時代の大勢は、暗移默從の間におのづからこの統一の氣運を形成せり。然れども已にこの大勢を自覺したる吾人は、其の自由意志の活動によりて、この氣運の進行を幇助するの責なきか。況や當に統一せらるべき時代精神の依然として分離せるが爲に、幾多弊害の蘊釀せらるゝの事實を認むるに於てをや。

吾人と反對の意見を有する一派の學者あり。以爲らく人生の多趣なる、是を一主義に捕へんこと難し。故に經世家は成るべく寛容の精神を以て反對の見解を等しく思想の大海に游泳せしむるを要すと。この派の論者又說を爲して曰く、今の世に於て日本主義若しくは國家主義を以て國民の精神を拘束するは、維新の改革によりて端緒を開かれたる啓蒙時代の精神を半途にして遮斷するものなり。若かず福澤流の極端なる歐化主義をして

更に其の自由の發達を遂げしめんにはと。吾人遂に其の意を解する能はず。

人生は多趣多面多岐なる、洵に論者の說の如し。而も然るが故に思想の統一を否定するの理由何處にかある。吾人を以て是を見れば、人生愈〻多趣にして統一の必要愈〻加る。人生を說明する方法は盧山の八面によりて人々見る所を異にす。吾人は是等の說明の何れをも否定せざるなり。唯其の實行の主義に至りては、則ち一ありて二無し。論者の如きは畢竟說明と實行とを混同し、而して二者の概念各〻別種の範疇に屬するを覺らざるの弊に坐す。或は言はん、一主義を活如たらしむるは反對の主義なり。其の反對の存するは他方の苦痛とする所なれども、其の苦痛は却つて之をして腐朽枯死せしめざる所以に非ずやと。これ寧ろ笑ふべきなり。試みに問はん、健全なる體軀は何の苦痛ありてしかく健

全なりや。彼の外部の刺撃によりて其の生存を繼承するものは未だ自動自覺の境地に達せざる自然物のみ。滯水腐敗の例を以て明瞭なる自覺を有する國家若しくは個人に比擬せんとす、甚だ幼稚の見と謂ふべきなり。若し夫れ今の我が邦には時代精神の統一尙早しと謂ふが如きは、吾人を以て是を見れば所詮時勢を見るの明無きなり。

見ずや論者の所謂啓蒙時代の精神は、已に其の極點まで發展せられ、國民は今や方に其の過度の弊に苦みつゝあるを。士風の廢頽、節義の衰微を效したるものは、昔日の楠權論的功利主義に非ずや。國家の存立の意義をも忘れ、我が國本を危殆に導くをも測らず、徒らに歐米の文明に眩惑して玉石の甄別もなく、自ら我を劣弱なりとして他國の下風に立つに甘んじ、古來の美風良俗をも破壞して顧みず、一意歐風の模倣にのみこれ勉めて、過根の

その間に萌すをも慮らざるは歐化主義に非ずして何ぞ。是の如くにして歐化主義の發達は尙且足らずとするか。言ふ勿れ、これ其の弊のみと。然り弊ならん、而も其の必然の弊なるを如何せんや。夫の天下の人をして拜金宗の門徒たらしめしものは神道か大和魂か、將た歐化主義か。吾人は現今人情の澆季、風俗の廢頽を以て、主としてこの歐化主義に本づける拜金宗の勢力に歸せんと欲するなり。其の弊是の如くにして論者は尙且つ歐化主義の勢力を足らずとするか。

人事は偶然にして成らず、社會の發達は吾人の力行に待つもの多し。今の時は時代精神の統一を要するの時にあらずや。吾人が自然の氣運に先だちてこの必要を認むるは、畢竟國民的自覺の發達に職由す。この機に乘じ嶄々然として天下の公義を喚起し、是の紛れたる思想の分裂に一振攝を加ふるもの、豈吾人の義

務にあらずや。政治や宗教や文學や、國家の人文に對してもと一體たり。須らく一大精神を以て是を統一し、萬派飛流注いで一壑にある底の大觀を成さざるべからず。凡て大事業を成就して典型を後世に遺すの時代は、上下百方を通じ一國猶一人の如く、一線以て萬條を貫き、部勒法あり、大將數十萬の兵を將ゐて呼應牽聯一歩も亂れざるが如くなるべし。山奔海立の歴史的大勳功は是の如くにして初めて成し得べし。而して今の日本に於てこの國民的精神の大頭腦大把柄たらんものは、吾人遂に是を日本主義に待たざるべからざるなり。（樗牛全集）

○

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月　蕪村

はるさめや綱が袂に小提灯　同

森鷗外名は林太郎。醫學博士・文學博士。陸軍軍醫總監・帝國美術院長・東京帝室博物館長等に歴任。大正十一年歿、年六十一。

六　高瀬舟

森鷗外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。德川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されるのである。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此の同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた、默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために、人を殺し、火を放つたと云ふやうな、獰惡な人物が多數を占めてゐたわけでは

ない。高瀬舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために、想はぬ科を犯した人であつた。

さう云ふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀬舟は、黑ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ、東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは、夜ごほし身の上を語り合ふ。いつも〳〵悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聽いて、罪人を出した親戚・眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た。所詮町奉行の白洲で表向の口供を聽いたり、役所の机の上で口書を讀んだりする役人の、夢にも窺ふことの出來ぬ境遇である。

同心を勤める人にも、いろ〳〵の性質があるから、此の時唯うるさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみ〴〵と人の哀を身に引受けて、役柄故氣色には見せぬ

ながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつては、非常に悲慘な境遇に陷つた罪人と其の親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、其の同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間で不快な職務として嫌はれてゐた。

いつの頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃ででもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも唯一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乘込んだ同心羽田庄兵衛は、唯

喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、此の痩肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衞は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に細かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭を霞ませ、やう〳〵近寄つて來る夏の溫かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつ

そりとして、唯舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寢ることは、罪人でも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで默つてゐる。其の額は晴れやかで、目には微かな輝きがある。

庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ不思議だと、心の內で繰返してゐる。それは、喜助の顏が縱から見ても横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の內に思つた。これまで此の高瀨舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。併し載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに、此の

男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。此の色の蒼い瘦男が、其の人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいやそれにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衞には喜助の態度が、考へれば考へる程分らなくなるのである。

暫くして、庄兵衞は悚へ切れなくなつて呼掛けた。

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」と云つてあたりを見廻はした喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して、

庄兵衞の氣色を覗つた。

庄兵衞は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求めるいひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。

「いや、別にわけがあつて聽いたのではない。實はな、己は先刻からお前の島へ往く心持が聽いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分いろ〳〵な身の上の人だつたが、どれも〳〵島へ往くのを悲しがつて、見送に來て、一緒に舟に乘る親類のものと、夜どほし泣くに極つてゐた。それに、お前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのかい。」

喜助はにつこり笑つた。

「御深切に仰しやつて下すつて、あり難うございます。なるほど

島へ往くといふことは、外の人には悲しいことでございませう。其の心持はわたくしにも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、其の結構な土地で、これまでわたくしのいたして參つたやうな苦は、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。わたくしはこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませんでした。今度お上で島にゐろと仰しやつて下さいます。そのゐろと仰しやる所に落着いてゐることが出來ますのが、先づ何よりもあり難い事でございます。それに、わたくしはこんなにかよわい體ではございますが、ついぞ病氣をいたしたことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、

體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるに附きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

かう云ひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百文を遣すと云ふのは當時の掟であつた。喜助は語を續いだ。

「お恥づかしい事を申し上げなくてはなりませぬが、わたくしは今日まで二百文と云ふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事をたづねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜まずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面のよい時で、大抵は借りたものを返して、又跡を

借りたのでございます。それがお牢にはひつてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るか分りませんが、わたくしは此の二百文を、島でする仕事のもと手にしようと樂んでをります。」

かう云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衞は「うん、さうかい。」とは云つたが、聽く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出來ずに考へ込んで默つ

てゐた。

庄兵衞はかれこれ初老に手の屆く年になつてゐて、もう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足する程手元を引締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、女房が內證で里から金を持つて來て帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は、所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は五節供だと云つては、里方から物を貰ひ、子

供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふので
さへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたの
に氣が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうなことの
ない羽田の家に、折々波風の起るのは是が原因である。

庄兵衞は今喜助の話を聽いて、喜助の身の上をわが身の上に
引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人
手に渡して無くしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境
界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間
に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右か
ら左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我と
の相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助のあり難が
る二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれ

を貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持は、こつちか
ら察して遣ることが出來る。併し、いかに桁を違へて考へて見て
も、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐるこ
とである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさへ
すれば、骨を惜まずに働いて、やう〳〵口を糊することの出來る
だけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食
が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、
生れてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衞はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との
間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて
行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つて
ゐる。手一ぱいの生活である。然るに、そこに滿足を覺えたことは

殆どない。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようと云ふ疑懼が潜んでゐて、折折妻が里方から金を取出して來て穴塡めをしたことなどが分ると、此の疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體此の懸隔はどうして生じて來るだらう。唯うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと云つてしまへばそれまでである。併しそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衞は思つた。

庄兵衞は唯漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此の病がなかつたらと思ふ。其の日其の日の

食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其の蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出來るものやら分らない。それを今目の前で踏止つて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衞は氣が附いた。

庄兵衞は、今さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時庄兵衞は空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。

庄兵衞は喜助の顏をまもりつゝ、又「喜助さん。」と呼掛けた。今度は「さん」と云つたが、これは十分の意識を以て稱呼を改めたわけではない。其の聲が我が口から出て我が耳に入るや否や、庄兵衞は此の稱呼の不穩當なのに氣が附いたが、今さら既に出た詞を

取返すことも出來なかつた。

「はい。」と答へた喜助も、「さん」と呼ばれたのを不審に思ふらしく、おそる〳〵庄兵衞の氣色を覗つた。

庄兵衞は少し間の悪いのを怺へて云つた。

「色々の事を聽くやうだが、お前は今度島へ遣られるのは、人をあやめたからだと云ふ事だ。おれに、序にそのわけを話して聽かせてくれぬか。」

喜助はひどく恐れ入つた樣子で、「かしこまりました。」と云つて、小聲で話し出した。

「どうも飛んだ心得違で、恐ろしい事をいたしまして、なんとも申し上げやうがございません。後で思つて見ますと、どうしてあんな事が出來たかと、自分ながら不思議でなりません。全く夢中でいたしましたのでございます。わたくしは小さい時に、二親が

時疫で亡くなりまして、弟と二人あとに殘りました。初は丁度軒下に生れた狗の子に不憫を掛けるやうに、町内の人たちがお惠み下さいますので、近所中の走使などをいたして、飢ゑ凍えもせずに育ちました。次第に大きくなりまして、職を搜しますにも、なるたけ二人が離れないやうにいたして、一緒にゐて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟と一緒に、西陣の織場にはひりまして、空引と云ふことをいたすことになりました。そのうち弟が病氣で働けなくなつたのでございます。其の頃わたくし共は、北山の掘立小屋同樣の所に寢起をいたして、紙屋川の橋を渡つて織場へ通つてをりましたが、わたくしが暮れてから食物などを買つて歸ると、弟は待受けてゐて、わたくしを一人で稼がせては濟まない濟まないと申してをりました。或日いつものやうに何心なく歸つて見ますと、弟は蒲團の上に

突伏してゐまして、周圍は血だらけなのでございます。わたくしはびつくりいたして、手に持つてゐた竹の皮包や何かを、そこへおつぽり出して、傍へ往つて「どうした〳〵。」と申しました。すると、弟は眞蒼な顏の、兩方の頰から腮へ掛けて血に染まつたのを擧げて、わたくしを見ましたが、物を言ふことが出來ませぬ。息をいたす度に、創口でひゆう〳〵と云ふ音がいたすだけでございます。わたくしにはどうも樣子が分りませんので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい。』と云つて、傍へ寄らうといたすと、弟は右の手を床に衝いて、少し體を起しました。左の手にしつかり腮の下の所を押へてゐますが、其の指の間から黑血の塊がはみ出してゐます。弟は目でわたくしの傍へ寄るのを留めるやうにして、口を利きました。やう〳〵物が言へるやうになつたのでございます。『濟まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなほりさうにもない病氣

だから、早く死んで、少しでも兄きに樂がさせたいと思つたのだ。笛を切つたら、すぐ死ねるだらうと思つたが、息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思つて、力一ぱい押込むと、横へ辷つてしまつた。又はこぼれはしなかつたやうだ。これを旨く拔いてくれたら、おれは死ねるだらうと思つてゐる。物を言ふのがせつなくていけない。どうぞ手を貸して拔いてくれ。』と云ふのでございます。弟が左の手を弛めると、そこから又息が漏ります。わたくしは、なんと云はうにも聲が出ませんので、默つて弟の喉の創を覗いて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持つて、横に笛を切つたが、それでは死切れなかつたので、其の儘剃刀を刳るやうに深く突込んだものと見えます。柄がやつと二寸ばかり創口から出てゐます。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようと云ふ思案も附かずに、弟の顏を見ました。弟はぢつとわたくしを見詰

めてゐます。わたくしはやつとの事で『待つてゐてくれ、お醫者を呼んで來るから。』と申しました。弟は怨めしさうな目附をいたしましたが、又左の手で喉をしつかり押へて、『醫者がなんになる。あ苦しい。早く拔いてくれ。賴む。』と云ふのでございます。わたくしは途方に暮れたやうな心持になつて、唯弟の顏ばかり見てをります。こんな時は、不思議なもので、目が物を言ひます。弟の目は『早くしろ、早くしろ。』と云つて、さも怨めしさうにわたくしを見てゐます。わたくしの頭の中では、なんだか、かう車の輪のやうな物がぐる〳〵廻つてゐるやうでございましたが、弟の目は恐ろしい催促を罷めません。それに、其の目の怨めしさうなのが段々險しくなつて來て、さう〳〵敵の顏をでも睨むやうな、憎々しい目になつてしまひます。それを見てゐて、わたくしはさう〳〵、これは弟の言つた通りにして遣らなくてはならないと思ひました。わ

たくしは『しかたがない、拔いて遣るぞ。』と申しました。すると、弟の目の色がからりと變つて晴れやかに、さも嬉しさうになりました。わたくしはなんでも一思にしなくてはと思つて、膝を突くやうにして體を前へ乘出しました。弟は衝いてゐた右の手を放して、今まで喉を押へてゐた手の肘を床に衝いて、横になりました。わたくしは剃刀の柄をしつかり握つて、ずつと引きました。此の時わたくしの內から締めて置いた表口の戸をあけて、近所の婆さんがはひつて來ました。留守の間、弟に藥を飲ませたり何かしてくれるやうに、わたくしの賴んで置いた婆さんなのでございます。もう大分內のなかが暗くなつてゐましたから、わたくしには婆さんがどれだけの事を見たのだか分りませんでしたが、婆さんは、あつと云つたきり、表口をあけ放しにして置いて、驅出してしまひました。わたくしは剃刀を拔く時、手早く拔かう、眞直に

抜かうと云ふだけの用心はいたしましたが、どうも抜いた時の手ごたへは、今まで切れてゐなかつた所を切つたやうに思はれました。又が外の方へ向いてゐましたから、外の方が切れたのでございませう。わたくしは剃刀を握つた儘、婆さんのはひつて來て、又驅出して行つたのを、ぼんやりして見てをりました。婆さんが行つてしまつてから、氣が附いて弟を見ますと、弟はもう息が切れてをりました。創口からは大層な血が出てをりました。それから年寄衆がお出でになつて、役場へ連れて行かれますまで、わたくしは剃刀を傍に置いて、目を半分あいた儘死んでゐる弟の顔を見詰めてゐたのでございます。」

少し俯向き加減になつて、庄兵衛の顔を下から見上げて話してゐた喜助は、かう云つてしまつて視線を膝の上に落した。

喜助の話は好く條理が立つてゐる。殆ど條理が立過ぎてゐる

と云つても好い位である。これは半年程の間、當時の事を幾度も思ひ浮かべて見たのと、役場で問はれ、町奉行所で調べられる其の度毎に、注意に注意を加へて浚つて見させられたのとのためである。

庄兵衛は其の場の樣子を目のあたり見るやうな思をして聽いてゐたが、これが果して弟殺と云ふものだらうか、人殺と云ふものだらうかと云ふ疑が、話を半分聽いた時から起つて來て聽いてしまつても、其の疑を解くことが出來なかつた。弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだらうから、抜いてくれと云つた。それを抜いて遣つて死なせたのだ。殺したのだとは云はれる。しかし其の儘にして置いても、どうせ死なくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へなかつたからである。喜助は其の苦を見てゐるに忍びなかつた。苦から

救つて遣らうと思つて命を絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救ふためであつたと思ふと、そこに疑が生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心の中には、いろ〳〵に考へて見た末に、自分より上のものの判断に任す外はないと云ふ念、時の權威に從ふ外はないと云ふ念が生じた。庄兵衛はお奉行樣の判断を其の儘自分の判断にしようと思つたのである。さうは思つても、庄兵衛はまだどこやらに腑に落ちぬものが殘つてゐるので、なんだかお奉行樣に聽いて見たくてならなかつた。

次第に更けて行く朧夜に、沈默の人二人を載せた高瀨舟は、黑い水の面を辷つて行つた。（鷗外全集）

尾崎紅葉
名は德太郎。文學者。明治三十六年歿、年三十七。

七　鹽原

尾崎紅葉

車は駛せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我は安からざる悒鬱を抱きて、遣る方無き五時間の獨に倦憊れつゝ、始めて西那須野の驛に下車せり。

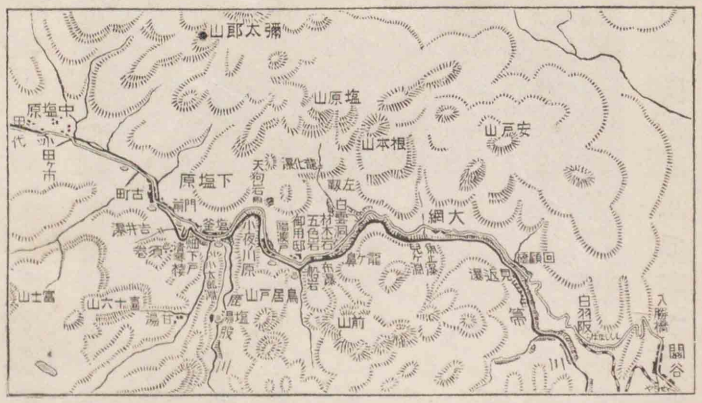
尾崎紅葉

直ちに西北に向かひて、今尙茫々たる古の那須野原に入れば、天は濶く、地は遐かに、唯平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は其處ぞと見えて、行くほどに路は窮らず。漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に到れば、人家の盡くる處に淙淙の響ありて、之に架れるを入勝橋となす。

橋を渡りて僅かに行けば、日光冥く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、

壑深く陷りて、幾廻せる葛折の後には密樹に聲々の鳥呼び、前には幽草歩々の花を發き、愈〻躋れば、遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺く露れて、すはや、こゝに空山の雷、白光を放ちて頽れ落ちたるかと凄じかり。道の右は山を剔りて長壁となし、石幽かに蘚碧うして、幾條とも白絲を亂し懸けたる細瀑・小瀑の珊珊として濺げるは、嶺上の松の調も、定めて此の緒よりやと見捨て難し。

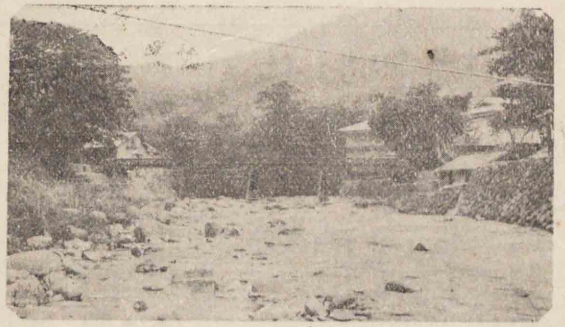
白羽坂を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を蹻みて、山中の景は始めて奇なり。之より行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり。全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり。全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり。全村にして四十五湯。猶數ふれば十二勝・十六名所・七不思議、誰か一々探り得べき。



そも〳〵鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流に泝る片岨にして、到る處巉巖の水を夾まざる無きは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀧・兒ケ淵・左靱の險は古りて、白雲洞は朗かに、布瀧・龍が鼻・材木岩・五色岩・船岩などと眺め行けば、鳥井戸・前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

途すがら、前面の崖の處々に躑躅の殘り、山藤の懸れるが、甚だ興ありと目留れば、又此の邊殊に谿淺く、水澄みて、大いなる古鏡の沈める如

く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。名を問へば不動澤といふ。



鹽原

踵を回して急げば、行路の雲間に塞り、て、地を拔く何百丈と見上ぐる異形の天狗巖あり。絶頂には、ばら〳〵松も危く立疎み、幹竹割に割放したる斷面は、半空より一文字に垂下して、岌々たる其の勢、幾ど眺むる眼も留らず。足に任せて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して、水之が爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れ競ふが如し。此の亂流の間に横たはりて高さ二丈に餘り、其の頂は平に潤りて、寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、

鱗も添はず、毛も生ひざれど、狀恐ろしげに蹲りて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪に漬りて、夜な〳〵天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物あり。其の昔、蒲生飛驒守氏鄉此の處に野立せし事あるに因りて、野立石と名付くとか。それより鹽釜の湯、甘湯澤、兄弟瀧、小太郎が淵などを過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。

一村十二戸、溫泉は五箇所に涌きて、五軒の宿あり。此に清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩く廻れる磧に臨み、俯しては水石の粼々たるを弄び、仰げば西に富士、喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤に落來る流は二十丈の絶壁に懸りて、素縑を垂れたる如き吉井瀧あり。東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾深く夏日の畏るべきを遮りたれば、四面遊目に足りて、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めたる別境なり。

我は此の繪を看る如き清穩の風景に値ひて、彼の途上險しき巖と峻しき流とのために、幾度か魂飛び肉銷して、理むる方なく搔亂されし胸の内は、蕭然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れたり。

誠に好くこそ我は來つれ。胡ぞ來るの甚だ遲かりし。山の麗しといふも、壤の堆きのみ、川の暢しといふも、水の逝くに過ぎざるを、牢として拔く可からざる我が半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべき者ならんと、齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚の者ならずや。看よ、看よ、木々の綠も、浮かべる雲も、秀づる峰も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、鷄の鳴く音も、空の色も、皆自ら浮世の物ならで、我はこゝに憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は彼の雲と輕く、心は此の水と淡し。希はくば今より此の如くして我が生を了らんかな。（續々金色夜叉）

幸田露伴
名は成行。文學博士。

八 暴風雨

幸田露伴

時は一月の末つ方、感應寺生雲塔いよ〳〵物の見事に出來上り、世に珍らしき塔供養あるべき筈に支度とり〴〵なりし最中、夜半の鐘の音の曇つて、常には似つかず耳にきたなく聞えしが、漸々あやしき風吹出して、眠れる兒童も我知らず夜具踏脫ぐほど、時候生暖くなるにつれ、雨戸のがたつく響烈しくなりまさり、闇に揉まるゝ松柏の梢に、天魔の號びもの凄くも、人の心の平和を奪へ、平和を奪へ。浮世の榮華に誇れる奴等の膽を破れや、睡を攪せや。愚物の胸に血の濤打たせよ。僞物の面の紅き色奪れ。斧持てる者斧を揮へ。矛持てるもの矛を揮へ。汝等が鋭き劍は饑ゑ

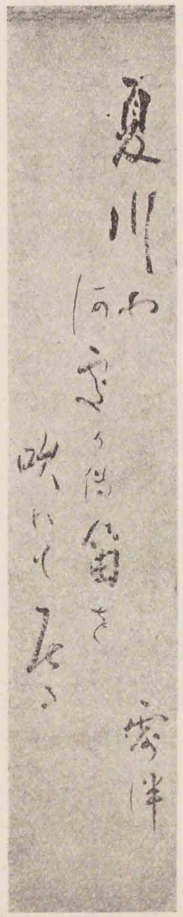
幸田露伴

たり。汝等劒に食をあたへよ。人の膏血はよき食なり。汝等劒に飽くまで喰はせよ。飽くまで人の膏膩を餌へ。」と號令きびしく發するや否や、猛風一陣どつと起つて、斧を持つ夜叉、矛持てる夜叉、饑ゑたる劒持てる夜叉皆一齊に暴れ出しぬ。

長夜の夢を覺されて、江戸四里四方の老若男女、惡風來たりと驚き騷ぎ、「雨戸の横柄子しつかと挿せ。辛張棒を強く張れ。」と家々ごとに狼狽ふるを、あはれとも見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲高たけだけしく、「汝等人を憚るな。汝等人間に憚られよ。人間は我等を輕んじたり、久しく我等を賤みたり。我等に捧ぐべき筈の定めの牲を忘れたり。這ふかはりとして立つて行く狗、驕奢の塒作れる禽、尻尾なき猿、物言ふ蛇、露誠なき狐の子、汚穢を知らざる家の女、彼等に長く侮られて遂に何時まで忍び得ん。我等を長く侮らせて、彼等を何時まで誇らすべき。忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべき

だけ誇らせたり。六十四年は既に過ぎたり。我等を縛せし機運の鐵鎖、我等を囚へし慈忍の岩窟は、我が神力にてちぎり棄てたり、崩れさせたり。汝等暴れよ、今こそ暴れよ。何十年の恨の毒氣を彼等に返せ、一時に返せ。彼等が驕慢の氣の臭さを鐵圍山外に攫んで捨てよ。彼等の頭を地につかしめよ。無慈悲の斧の刃味の好さを彼等が胸に試みよ。慘酷の矛、瞋恚の劒の刃糞と彼等をなしくれよ。彼等が喉に氷を與へて苦寒に怖れわなゝかしめよ。彼等が膽に針を與へて秘密の痛に堪へざらしめよ。彼等が眼前に彼等が生したる多數の子孫を殺して、玩物の念を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶兒の家を奪ひぬ。汝等彼等の家を奪へや。彼等は蠶兒の智慧を笑ひぬ。汝等彼等の智慧を讃せよ。すべて彼等の巧と思へる智慧を讃せよ、大と思へる意を讃せよ、美しと自ら思へる情を讃せよ、協へりとなす理を讃せよ、剛しとなせる力を讃せよ。

すべては我等の矛の餌なれば、劒の餌なれば、斧の餌なれば、讃し
て後に利器に餌ひ、よき餌をつくりし彼等を笑へ。なぶらるゝだ
け彼等をなぶれ。急に屠るな、なぶり殺せ。活しながらに一枚一枚
皮を剝ぎとれ、肉を剝ぎとれ。彼等が心臓を鞠として蹴よ。枳棘を
もて背を鞭てよ。歎息の呼氣、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、其等



幸田露伴筆蹟

をすべて人間より取れ。殘忍の外快樂なし。酷烈ならずば、汝等疾
く死ね。暴れよ、進めよ。無法に住して、放逸無慚、無理無體に暴れ立
て、暴れ立て。進め、進め、神とも戰へ、佛をも擲け。道理を壞つて壞り
すてなば、天下は我等がものなるぞ。」と、叱咤する度、土石を飛ばし
て、丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも、毫も止まず勵ま

し立つれば、數萬の眷族勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸
を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に黃ばませて、日の光をもほ
と〳〵掩ひ、斧を揮つて數寄者が手入れ怠なき松を冷笑ひつゝ、
ほつきと斫るあり。矛を舞はして、板屋根に忽ち穴を穿つもあり。
ゆさ〳〵〳〵と怪力もて、さも堅固なる家を動かし、橋を搖がす
ものもあり。「手ぬるし、手ぬるし、酷さが足らぬ。我に續け。」と憤怒の
牙嚙鳴らしつゝ、夜叉王の躍り上つていらだてば、虛空に充ち滿
ちたる眷屬をたけび鋭くをめき叫んで、遮二無二暴威を揮ふほ
どに、神前・寺内に立てる樹も、富家の庭に養はれし樹も、聲振絞つ
て泣き悲み、見る〳〵大地の髮の毛は、恐怖に一々豎立なし、柳は
倒れ、竹は割るゝ折しも、黑雲空に流れて、樫の實よりも大きなる
雨ばらり〳〵と降出せば、得たりとます〳〵暴るゝ夜叉、垣を引
捨て、塀を蹴倒し、門をも壞し、屋根をもめくり、軒端の瓦を踏碎き、

たゞ一揉に屑屋を飛ばし、二揉揉んでは二階を捻取り、三たび揉んでは某寺を物の見事に潰し崩し、どう〳〵どつと鬨を揚ぐる其の度毎に、心を冷し、胸を騒がす人々の、彼に氣づかひ、此に案ずる笑止の樣を見ては喜び、居所さへも無くされて悲むものを見ては喜び、いよ〳〵圖に乘り、狼藉の有らんかぎりを逞しうすれば、八百八町百萬の人、みな生ける心地せず、顏色さらにあらばこそ。中にも折角僅かに出來上りし五重塔は、揉まれ揉まれて九輪は搖ぎ、項上の寶珠は空に得讀めぬ文字を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り、楯をも貫くべき雨のぶつつかり來るたび、撓む姿、木の軋る音、もどる姿、又撓む姿、軋る音、今にも覆らんずる樣子なり。（五重塔）

高須芳次郎　嘗て梅溪と號す。文學者。早稻田大學出身。

ロマンチック　Romantic　空想的。

藤村　島崎春樹。

晩翠　土井林吉。

泣菫　薄田淳介。

有明　蒲原隼雄。

九　新しい詩の生誕

高須芳次郎

新しい詩の生れる時代は美しい夢を追ふ時である、理想の青い花を求むる時である、憧憬の眼を輝かして聲朗かに高く歌ふ時である。日清戰後、國民的自覺の精神が强められると共に、社會は活氣づき、人氣は湧立ち、文壇は著しく勃興の機運に向かつた。こゝに明治文學の第一躍進時代が來たのである。創作に、評論に、新人が活躍した。しかも全體を通じてロマンチックの色彩が强く詩歌の勃興を促した。新體詩・俳句・短歌などの上に華々しい革新運動が起つた。そしてそれが或程度まで成功の美果を收めたのである。新體詩の革新と勃興とは特に著しいものがあつた。それは機運の成熟にもよつたが、一つは島崎藤村・土井晩翠等を中心に、薄田泣菫・蒲原有明其の他の有力な詩人が輩出して詩壇に

盡くした爲であつた。

明治三十年八月に出た島崎藤村の「若菜集」は詩界の混沌を破つて、若き日本の詩の向かふところを知らしめた劃時代的の一産物であつた。內容・詩形・詞藻の上で、藝術的一致を具現した最初の詩集であつた。詩界の黎明の色は「若菜集」によつて濃度を加へて來た。

藤村が「若菜集」を出して、新體詩人としての顯著な成功を得たわけは、(一)專念ヨーロッパの詩に讀耽つて、スキンバアン・ロセッチ等の影響を受けたこと、(二)詩形・用語の上に細心の注意と研究とを傾けたこと、(三)藝術的氣稟が豐かで新代の感情を代表的に歌ひ出たこと、(四)叙事・抒情兩面に於ける才能を備へたこと、(五)國文學・支那文學の素養が相當にあつたことなどによるであらう。藤村の詩には勿論彼の個性の色彩・匂はあるが、詩人として奔放

スキンバアン Swinburne 英國の詩人。

ロセッチ Rossetti 英國の詩人にして畫家。

な情想を披瀝したロセッチや、「バイロンの再生」と稱せられたスキンバアンの官能的な抒情の歌などに影響せられたことは否まれぬやうである。それに彼自身、有りあまるほどの情熱を抱いて、孤獨の境、漂泊の旅などに自然の美を思ひ、憧憬愛慕の感に身を浸したのである。それらの體驗を透して、彼は若き日本に於ける青春の人々の感情を直覺して、それを烈しく「若菜集」に歌ひ出たのである。而も彼には、藝術的に細心な用意があり、修練があり、優れた技巧があつたから、其の詩の上に何等の破綻を示さなかつたのである。かうして「若菜集」が劃期的な痕を詩壇に印したのは當然のことだ。

勿論、今日から見ると、「若菜集」にはセンチメンタルな傾向が多くて、餘りに夢を見過ぎたやうなところがある。人生に對して高踏的、逃避的な點があるが、さうした缺陷があつても、「若菜集」の美

センチメンタル Sentimental 感傷的。

點は決して傷つけられない。そこに永遠の美しい夢があるからだ、消しても、消しても、消えさらぬ情熱の噴泉があるからだ。「若菜集」中の秀拔な詩はどれであるかと云ふことについては、各自の好みがあらう。私は「深林の逍遙」・「四つの袖」・「秋風の歌」などを推したい。

清しいかなや、西風の
まづ秋の葉を吹けるとき、
さびしいかなや、秋風の
かのもみぢ葉にきたる時、

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく、
吹き漂はす秋風に、

センチメンタリズム Sentimentalism 感傷主義。

飄り行く木の葉かな。

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく、
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり。（秋風の歌）

「若菜集」で成功した藤村は、其の向上の一路を歩むことを忘れなかつた。其の翌年の初夏には「一葉舟」を出し、冬には「夏草」を出して、彼の詩的心境の推移を示した。「一葉舟」には、彼の情熱に一味の沈靜を加へた跡が見える。「夏草」には、藤村が空想の世界から現實の世界へ移つてゆかうとした心持が見える。此の傾向は三十四年に出した「落梅集」に至つて一層具體化されたことが分る。センチメンタリズムの殼を破ることは可なりに困難であつたが、藤

村は力めてそれを打破つて現實の上に自己の新しい地盤を築きあげようとしたのである。

情熱の詩人藤村に對して、瞑想の詩人土井晩翠が居たのは好個の對照であつた。藤村は女性的、晩翠は男性的、一は考へるよりも先づ鋭く感じ、一は感ずるよりも先づ深く考へる。前者は優雅清新の致を具し、後者は雄健豪放の趣を備へて居る。そして其の何れもロマンチックであつた。

晩翠の詩的成功の素因は、(一)當時彼の如き瞑想派の詩人が殆ど居なかつたこと、(二)詩的表現の明快であつたこと、(三)男性的風格に富んで、而も粗放蕪雜に流れなかつたこと等を擧げることが出來る。彼の最初の詩集は、三十二年に出した「天地有情」である。そこには、主觀的に人生に對して現實の悲痛・無情を嘆き、一個理想の天地に憧憬を寄せた詩人の胸懷が明かに洩らされて居る。

其の詩思の上にまつはつて居るのは、燃ゆるやうな青春の情熱ではなくて、理智に根ざした哲理的な思想の流である。「暮鐘」は殊に其のうちで優れた詩篇である。

祇園精舍の檐朽ちて
葷酒の香のみ高くとも、
セント、ソヒヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも、
聞けや、夕の鐘のうち、
靈鷲・橄欖いにしへの
高き尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ、
わが膽鬱の夢さめて、

鳳樓いつか跡もなく、
うつゝは脆き春の世や。
岑上の霞たちきりて、
縫へる仙女の綾ごろも
袖にあらしはつらくとも、
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲、
その一音はこゝにあり。

晩翠は「天地有情」の次に三十四年になつて「曉鐘」を出した。それには以前よりも現實味が加つて、技巧が進んで居た。また北清事變を主題として「黑龍江上の悲劇」などを歌つたが、其の詩想の上では何等の向上を見せなかつた。詩的生命の流動が遲緩になつて居た。蓋し彼は藤村のやうに、自己の進路について反省し凝思

シェレイ Shelley 英國の詩人。
キイツ Keats 英國の詩人。

しなかつたために、早く行詰つたのである。

藤村・晩翠のほかに、稍後から出た青年詩人中の双璧は薄田泣菫・蒲原有明である。泣菫は大體に於て藤村と同じ行き方をした。最初はロマンチックの情想に浸つて居た。ところが二三年の後には一轉して、現實に親み、美しい夢よりも當面の現實に興味を見出すやうになつた。それらが藤村の歩いた道によく似て居ると同時に、恐らく泣菫には藤村から少からぬ感化影響を受けた時期があつたらうと思はれる。

泣菫の最初の詩篇「暮笛集」は三十二年十一月に出た。彼は中國の生れで、暖い情緒と溢るゝやうな才氣とを持つて居た。そしてイギリスの詩人シェレイ・キイツなどに私淑して、「希臘古瓶賦」などを愛誦し、「西風の歌」などに共鳴したものだと思はれる。さうした影響も亦彼の詩のうちに見出される。「暮笛集」の熱烈な情操と

清新典雅の格調とは、最初から泣菫の詩的成功を著しくした。そして彼は三十四年に至つて「行く春」を出した。こゝにも「暮笛集」時代の名殘を見ることが出來るが、一方に於て、泣菫が農民・田園を始め當面の時事問題などにも眼を注いで、彼の詩想をそれらに奔らせたものが往々見える。「石彫獅子の賦」は彼の秀什である。

裂けたる岩に爪かけて、
雄々し、憤るかその姿、
鬣ながく背にまきて、
見れば湧きよる春の潮。
胸はゆたかに力男が
曳きしぼりたる弓のごと、
忿怒現ずる明王の

ひろき肩より燃えあがる
焔か、ながき尾は躍り、
綿毛密なる脚の裏、
落ちて野薔薇の花蹈むも、
巣くへる鳥は眼ざめんや。

雄麗の趣に於て、泣菫の詩中、特異とすべきものだが、泣菫の缺點は、內容よりも詞藻の上により多く苦心して、ともすると美しい言葉に囚はれ易い傾があつたことだ。ある意味に於て、彼は詞藻美の詩人であつた、藝術至上主義者であつた。で、詩形などの上でもいろ〳〵の工夫を凝らした。八六調其の他に苦心を重ねて、不退轉の熱心を示した。けれども思想的・情意的に飛躍すべきことを彼は閑却して居た。

蒲原有明は、泣菫よりも稍深みのある詩人であつた。少くとも

思想的に彼は内在する生命を摑まうとする傾向を持つて居た。「草わかば」は彼の最初の詩集で、靈的神祕の境地に觸れようと力めた。そこからくる煩惱や悶えや淋しさを歌つたのが、三十六年五月に出た「獨絃哀歌」であつた。有明はロセッチに私淑した傾向があつたので、「獨絃哀歌」にはさうした影が印せられて居た。そして神祕の色と詩的情想とが一つに解けあつて、有明の特色・個性が漸く滲み出て居た。今「幻影」中の二聯を引く。

今眼に入れるかげ見れば、
小甕は涙に燃え浮かび、
甕のおもてはかゞやきて、
火もて描ける火の少女。

幻影はげにこゝに盡き、

ロマンチシズム Romanticism 浪漫主義。
スコット Scott スコットランドの詩人、小説家。
白星 平木照雄。
鐵幹 與謝野寛。
林外 前田儀作。

小甕は涙に沈むとき、
わが身——焔の琴の絃、
火の小指もて誰か彈くべき。

以上の四詩人は、何れもロマンチシズムの時代を代表する人たちである。そして此の期の一特質として見るべきは史詩の流行であつた。それは過去の歴史・人物などの美に對する強い憧憬が中心となつて、史詩を生んだのである。スコットが中世の騎士に憧憬したのと同趣である。白星の「釋迦」・「おさよ新七」、鐵幹・林外・白星等の合作「源九郎義經」、岩野泡鳴の「豐太閤」・「田戸の海ぬし」、其の他多くの史詩が一時續出して、ロマンチックな夢をそゝつた。泣菫の如きは此の趨勢につれて、神話の世界を歌つた。

（日本現代文學十二講）

朝比奈知泉
元東京日日新聞主筆。

一〇 賴山陽

朝比奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に在りては、文學再興して古文辭其の盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の餘習已に脫して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學・詞藝其の秀を鍾め、其の華を競ひたれども、我が近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若し此の時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふものあらんか、其の風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は奬勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黃金時代は必ず三四十年前に來りしならん。

つら〳〵各國文運の振興を考ふるに、其の先を作すものは大

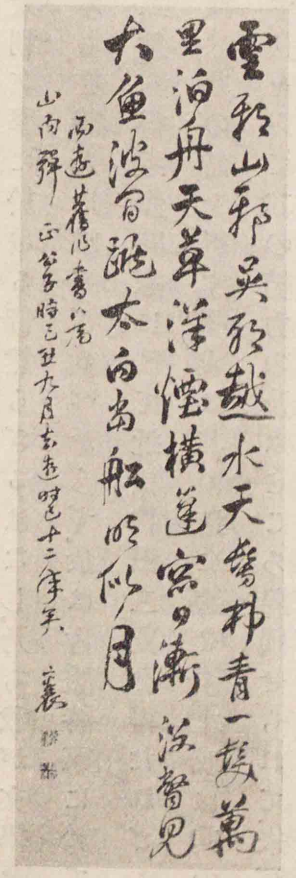
チョーサー Chaucer 英國の詩人。
スペンサー Spenser 英國の詩人。
ミルトン Milton 英國の詩人。
シェクスピヤ Shakespeare 英國の劇詩人。
コルネイユ Corneille 佛國の劇詩人。
モリエール Moliere 佛國の喜劇作家。
ラシーヌ Racine 佛國の悲劇作家。
ゲーテ Goethe 獨逸の詩人。

抵詩人ならざるはなく、其の衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チョーサー・スペンサー・ミルトン・シェクスピヤの英文學に於ける、コルネイユ・モリエール・ラシーヌの佛文學に於ける、ゲーテ・シルレル・レッシングの獨逸文學に於ける、ダンテ・ペトラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。乃ち我が文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。余は古體詩家に於て眞淵・景樹二翁を得、近體詩家に於て近松・竹田二叟を得たれども、出づるに或は其の時を得ず、學或は其の道に適せず、才或は其の志に合はず、是を以て其の勢力の及ぶところ局限せられて、未だ文學の全體に向かつて其の積衰を振ふこと能はざりしを見る。余は彼の諸家の外に於て、其の才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しながら、稀世の偉才を抱いて其の用處を誤りたるが爲に、日本文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒らに史家なり、策家なり、文

シルレル Schiller 獨逸の劇詩人。
レッシング Lessing 獨逸の文學者、批評家。
ダンテ Dante 伊太利の詩人。
ペトラルカ Petrarca 伊太利の詩人、文學者。
眞淵 姓は賀茂、縣居と號す。國學者。(一六三五—一七四二九)
景樹 姓は香川、桂園と號す。歌人。(一七四二八—一八五〇三)
近松 近松門左衛門。淨瑠璃作者。(一六三一三—一七二三八四)
竹田 竹田出雲。淨瑠璃作者。近松の弟子。(一六三五一—一七二四一六)
老博士 儒者柴野栗山(一七三九四—一八四六七)を指す。
政記 日本政記。神武天皇より後陽成天皇に至る間の事蹟を記したる漢文の歴史。
外史 平氏・源氏以下德川氏に至る諸武家の事を記したる漢文の歴史。

家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世絶代の文豪を以てせらるゝに至らず、「萬能達して一心足らず。」といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未だ曾て其の人と其の才とを痛惜せずんばあらず。余は今日、世人が猶其の人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所なきにしもあらずといへども、退いて之を再考すれば、更に深く惜む所なかるべからず。其の人を誰とかする。山陽賴氏是なり。

「詩は別才なり。」といひ、「詩人は生る、成るにあらず。」といふは、東西



賴山陽筆蹟

一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、其の性格といひ、其の言行といひ、其の著作といひ、一として詩ならざるなし。其の童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。其の父母を懷ふに厚く、其の王室を懷ふに厚く、其の忠臣・義士を懷ふに厚く、天下・國家を懷ふに厚く、情の熱するところ、常に理の冷やかなるに勝ちたるは詩なり。其の北馬南船、行李卸さざる所なく、春花秋月、遊屐遍からざる所なきは詩なり。其の畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王侯に接するは詩なり。山陽の性格・言行、誰か之を詩にあらずといはん。

試みに其の著作の史篇を視よ。政記の一書は固より多とするに足らず。外史何の取る所ぞ。其の議論は平凡のみ、其の事實は謬誤のみ、其の體裁は偏失のみ。然れども其の筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。敍事或は精、或は疎、或は長、或は短。精にして

長なる時は、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈々の餘情を含み、或は嫋々の餘韻を存す。爭戰を敍すれば、讀者をして汗を握らしめ、別離を敍すれば、讀者をして涙に咽ばしむ。而して其の敍論の如き、俯仰低回、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。此等の文字、此等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。其の題目を擇ぶに源平以後の爭戰記を採りたるが如き、其の事實に於ては博引旁搜と明證確說とを主として讀者を了悟せしむるを務めず、專ら其の文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を立つる標準一定ならずして、其の體裁に前後の矛盾を來せるを顧みざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の敍事詩たるのみ。

試みに其の論策・文章を視よ。民政といひ、市糴といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして實用に施すべからざるもの比々として皆是なれども、其の熱情の溢れたる、其の文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。而して外史以前の文章に就きて其の精華を求むるに、其の寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字にあり。其の形體は卽ち論策たり、文章たり。其の本質は卽ち想像のみ、詩詞のみ。

去りて其の詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、遒麗なるものあり、輕妙なるものあり。而して其の最長を見るは歌行にあり、樂府にあり、料を史傳に取りて之を詩詞に寓したるものにあり。山陽亦自ら以て得意とし、「余不レ欲レ詠レ物。詠物不レ若レ詠レ史。史中有レ無數好題目。隨レ讀淺深皆可レ成レ眞詩。舍レ之而曰レ雁字鶯梭無レ爲也。」とは、其の平常の持論なりき。亦以て其の才の日本の文學を振ふ

今樣　花よりあくるみ吉野の、春の曙見渡せば、もろこし人も高麗人も、大和心になりぬべし。

李北地　名は夢陽。支那の明代の詩人。

嚴海珊　支那の清代の詩人。

に足りしを見るべきなり。余嘗て其の戲に作れる今樣を讀み、其の跌宕飄逸自ら不群の趣あるに服し、思へらく、此の詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり。若し馳驟縱横、奇想を天外に飛ばし、其の事實に拘泥することなく演義述作する所あらしめば、其の造詣何ぞ唯李北地・嚴海珊にして止まんや。わが史傳は未だ多く題詠に入らず。潛心好案を求め、研精妙句を探り、其の外史に灑ぎたる心血を傾倒して之を詩賦に注がんか、儼然たる敍事詩を作りて、わが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して、固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて、專ら功力を詩に用ひざりしこと。

余が山陽の專ら詩人とならざりしを惜む理由頗る多し。今且くこれを擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、其の天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して

江木鰐水　名は戩。山陽の門人。明治十四年歿、年七十二。

古賀穀堂　名は燾。佐賀藩の儒者。(一四三八—二四九六)

史傳を以て料とすること其の卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王の誠と忠臣・義士を思ふ情とは、面に盎れて背に浹し。これ三なり。

而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、其の「常曰謂我才子、未悉我者也。謂我能刻苦者、眞知我矣。」といふに至り、竊かに其の實を失へるにあらざるかを訝りしが、後彼の前兵兒謠並びに蒙古來の原稿を觀るに及び、其の苦心經營一句も苟もせざりし實迹を審かにし、且其の古賀穀堂を訪ひ、初め其の千言立ちどころに成る敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひたる時、其の文稿の依然として改刪する所なかりしを見て、茲に與し易きのみの念を起したりといふ逸事を聞き、其の意匠慘憺、勉勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐ろに景慕の情を催したり。蓋し創意

の才は、必ず刻苦の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜む第四の理由とするは、卽ち此の經營刻苦の氣力のみ。

又山陽が當時の儒者の如くに、經義に耽り、章句・訓詁の末を爭ふ風なかりしは、頗る其の才の發達に便なりしなるべしと雖も、彼の經濟・實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦其の常套を襲ふを免れず。つら〳〵山陽の才幹を窺ふに、政治・吏務は其の長ずる所にあらざりしが如し。卽ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はば、其の成功何ぞ啻に今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大いに尊王の氣象を喚起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞ此の大功を奏するを得ん。」と。嗚呼これ詩を知らざるも

春水、名は惟寛。幕府の儒官。（一四〇六―一二四七六）

のの言のみ。詩の人心を感發するは、其の勢力遙かに散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはば、外史中の事實を敷衍して之を詩にせるもの、亦豈其の遠因となる能はざらんや。且外史の如きは、其の文章如何に靈妙なりとも、今日の史學より之を視れば、小說と實錄との間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず。焉ぞ始より純然たる詩篇たるの愈れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て大いに嘆賞し、實材たらしむべし、詞人たらしむべからず。」とて、山陽の父春水に勸めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脫せずといへども、其の史を學ばしめたるは大いに可なり、其の遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽のために再四歎惜する所なり。（今世名家文鈔）

村田春海
織錦齋・琴後翁と號す。國學者。文化八年歿・年六十六。

芳宜園
加藤千蔭。

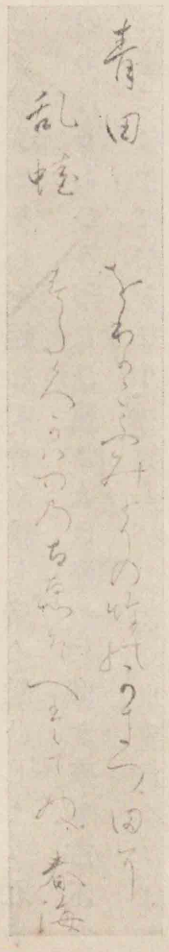
縣居
加茂眞淵。

一一　芳宜園大人の靈を祭る詞

村田春海

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを燒きて、うなねつきて申さく。あはれ悲しきかも。君は吾に十とせいひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたにまゐるとては、君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべにまかるとては、君の御袖のもとに縋りて、あひうるはしみまつれること、親子・はらからにも何か異ならむ。書讀むとては、君を師ともたふとみ、歌作るとては、吾をおとゞひのつらにぞ教へ給ひける。

中ごろにして君は仕への道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては、吾道しるべをなし、月を思ふとては、君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふる業のまめごともあだごとも、かたみに隔なく心をかはせつること、今にはたとせ、その初を繰返し數ふれば、あひ友たること既に五十とせにぞ餘りける。さるを、今おくれたてまつりて、いつの世にか相見む、いづれの時にかことはむ。常無きは人の身の習ぞと知れど、これをいかでか歎かざらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。



蹟筆海春田村

くひぜを守り宋人有耕田者。田中有株、兎走觸株、折頸而死。因釋其耒而守株、冀復得兎。兎不可復得。而身爲宋國笑。（韓非子）

舟にきだつくる楚人有涉江者。其劒自舟中墜于水。遽刻其舟曰、是吾劒所從墜也。舟止、從其所刻處入水、求之。舟已行矣、而劒不行。求劒若此、不亦惑乎。（呂氏春秋）

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、倭文機のあやあるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥み、こゝにひかれて、なほ怪みとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたりあひうづなひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌世に盛になりにたるなり。

その自らよみいで給へる歌を見るに、古きしらべ、新しき姿、とり〴〵に備らざるはなし。その古を寫せるは、藤原寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは、堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは、口に盡くさざることなく、目に觸るゝものは、言葉にのせざることなむあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を知られては、身の面おこしと思ひて、世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今黃金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがごちの歎のみかは、おほかたの世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜まざらむ、かゝるを誰かは慕はざらむ。あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても遙かに見そなはせとなむ申す。（琴後集）

○

秋ふけて小雨そぼふる隅田河誰が墨がきのすさびなるらむ　　橘千蔭

横井也有
尾張侯の重臣。俳諧を嗜み、半掃庵・蘿陰など號す。天明三年歿、年八十二。

やがて死ぬ云々
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。（芭蕉）

一二　百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物のかぎりなるべし。それも啼く音を愛づるものならねば、籠に苦む身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものの事、更にも謗り難し。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、この者ばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

貧の學者
支那の晉代の人、車胤。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は只この者のためにやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、この者の本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはこの眞似すべからず。

横井也有筆蹟

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくつくぼふしといふ蟬は、つくし戀ひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべから

ず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。もろこしのむかしには退隱の媒(ナイカラウド)ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代、朝敵の初として、賴光をさへおびやかしたる、いとおそろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒の、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふる折もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲は誰がために身をこがす。や。蜉蝣(カゲロウ)ははかなきためしにひかれ、蓼(タデ)くふ蟲は不物ずきの謗(ソシリ)となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に

槐安の都　淳于棼、夢に槐安國に至り、南柯郡に守となりしが、覺めて古槐樹下を掘りて蟻穴を得たりといふ故事。

歐陽氏　名は修。支那の宋代の文人。「憎蒼蠅賦」あり。

長嘯子　木下勝俊。若狹小濱の城主。後封を失ひ、隱棲して和歌をよくす。慶安三年歿、年八十一。

聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安(ナイアン)の都をのがれて、その身の安き事を得むとさるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に嚙まるゝ蚤はたま〳〵にして、猿の手にさぐらるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家もちたれども、行く先々をおひ歩くは、雲水の安きにも似ず。蛇・蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織（はたおり）・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名によばる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、ひとりは後生をねがひ、ひとりは殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりぐすのつゞりさせとは、人の爲に夜寒を敎へ、藻に棲む蟲は、われからとたゞ身の上を歎くらむを、蓑蟲のちゝよと呼ぶは、母をば慕はで、など父をのみ戀ふらむとあやし。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、始めて仄かに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく殘りたるは、寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。（鶉衣）

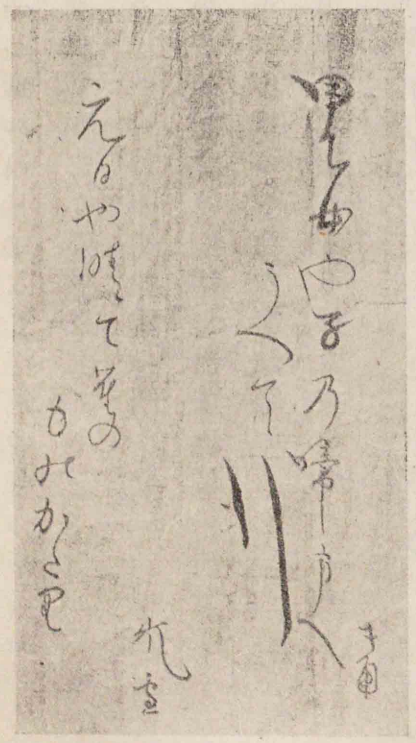
一三　近世の俳句

古池や蛙飛びこむ水の音　芭蕉

旅人と我が名呼ばれむ初しぐれ　同

菊の香や奈良には古き佛たち　同

旅に病みて夢は枯野をかけ廻る　同



其角と嵐雪との筆蹟

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春　其角
蒲團着て寢たる姿や東山　嵐雪
應々といへど叩くや雪の門　去來
我が事と泥鰌のにげし根芹かな　丈草
欄干にのぼるや菊の影法師　許六
東風吹くと語りもぞ行く主と從　太祇

蕪村筆蹟

春の海ひねもすのたり〳〵かな　蕪村
子規平安城をすぢかひに　同
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな　同
柳散り清水涸れ石ところ〴〵　同

十返舍一九
本名は重田貞一。戯作者。天保二年歿、年五十七。
境内　八坂神社境内。

十返舍一九
東海道中膝栗毛

一四　梯子賣

十返舍一九

それより境内を出で、もとの四條通を行くに、日もはや七つさがりとなれば、急ぎ三條に宿をもとめ、足休めんと辿り行く先に立ちて、近在の女商人、いづれも頭に柴薪、或は梯子・連木・槌などをいたゞきて、四五人打連れだち、梯子買はしやんせんかいにやあ。」北八「こう見ねえ。豪勢なものを頭へのれん木いらんかいにやあ。」女商人「たきゞ買はしやんせんかいにやあ。」と行き〳〵せて行くは。

て河原に出る。かの女どもおの〳〵こゝに荷をおろし、すり火打にて煙草などのみて休む。彌次「ちと冷かしてやらうか。」と烟管を出し、女商人の側へより、「御無心ながら火をひとつ。パッパ〳〵。時にお前方はとんだ重いものをよく頭へのせて歩きなさるの。」女商人「さよぢやわいな。」北八「これ位なものを。おいらなんざあ二十

貫や三十貫目ある石を頭で振廻したものだ。」女商人「お前さんはうどん屋の粉ひきぢやろわいな。」彌次「えゝ手前だまつてゐろ。」女商人「お前さん方、どうぞ此の連木買うておくれんかいな。」彌次「なに、すりこ木か。あゝ買ひたいが、こりや細い。わつちらが所ぢや、なんでも材木のやうな、そして四角なすりこ木でなくちやあ間に合はねえ。」女商人「おほゝゝ。氣さくなおかたぢやわいな。あの連木おいやなら、梯子買うておくれんかいな。」彌次「はゝゝ。梯子、面白い。いくらだ。」女商人「今日は何もよう賣らんさかい、安うしてあぎよわいな。六匁下んせ。」彌次「二百ばかりなら引受けようさ。」女商人「あのぢやらぢやら云うてぢやわいな。もちと買うて下んせ。」彌次「いやだ〳〵。」女商人「お前さん、こないに味ようしてあるわいな。もし、五匁にあぎよかいな。」彌次「いや〳〵。」女商人「よいわいな。是もていんだら叱られよう。二百にまけてあぎよわいな。」彌次「やあ、まけるか。情ないこと

をいふ。」女商人「きやうとう廉いもんぢやわいな。」彌次「いくら廉くつても、梯子買つてどうするもんだ。うちもねえくせに。」女商人「よいわいな。さあもていなんせ。」彌次「こいつはあやまる。ありやうは、おいらは旅の者で、今宵は三條に泊らうといふのだから、梯子を買つても仕方が無い。」女商人「なに云はんすぞいな。入らん物を値つけさんす事は無いわいな。」彌次「そりやもう、値をつけたが不肖だから、入らねえものでも、袂か懐へはひるものなら買つてもやらうが、何を云つても、此の梯子だから恐れる〳〵。」女商人「それぢやてて、私らをなぶらんしたのかいな。こちや商賣ぢやわいな。そないな事いやぢや。もていなんせ。」と、女ども四五人口々にやかましくしやべり立ちて、彌次郎兵衛を中に取捲き、責めたつる。すべて此の女商人は皆氣の強きものゆゑ、なか〳〵合點せず。物見高い京の人達、何事やらんと折重なりて、ぐるりと取捲くに、彌次郎兵衛逃げ

られもせず、大きに困り果て、様々にいひわけしても一向聽入れず。相手は皆女の事なり、喧嘩にもならず。詮方なく、錢二百文出してやり、こう〳〵梯子を買取り、人の見る前捨てられもせず。見物どつと笑ひて散る。彌次「こいつは意氣地もねえ目にあつた。北八そこらまでかついでくれ。」北八「えゝ、とんだ事を云ふ。お前持ちなせえな。」彌次「又一ばんへこんだ。業腹な。」

いかにせん梯子の親とこのやうなやつかいものを引受
けし身は

かくて四條通を寺町へ下りて行く道々も、梯子の持重りして、つぶやきながら、彌次「なんと北八、手前附合を知らぬものだ。ちつとばかり持つてくれろ。」北八「いかさま、お前、心がらとはいひながら氣の毒なこつた。さぞ重たかろ。かうしなせえ。あの女どものやうに、頭へ乘つけてもつて見なせえ。」彌次「なるほど〳〵。」と手拭を

たゝみ、頭へ載せ、その上へ梯子を載せ、兩手に持添へ行くと、往來の人「こりや何ぢやいな。あぶなうてならんわいな。」彌次「はい〳〵、向がさつぱり見えねえであるかれぬ。」往來の人「こりやぢやうもんがいくさうぢや。お水もて出やしやんせんかいな。」ぢやうもんがいくとは火事があるさうなといふことなり。往來の人「どこにぢやうもんがいくぞいな。」往來の人「あれあこへ梯子もていくわいな。あほよ〳〵。」彌次「何ぬかしやがる。」往來の人「ふぬけなわろぢやは、、、。」彌次「いや、このべらさくめら。」と梯子を頭へ載せたなりに、ぐつと振返れば、その梯子あとさきにて往來の人の頭をこつつり。往來の人「あいたゝゝ。何ぢやい、滅相な。此の人中で長いもの、横たふしにしくさつて、えらい馬鹿ぢやな。天窓ぢやいてこませやい。」彌次「なに、たはことぬかしやがる。」往來の人「わしが額の痰瘤が無うなつた。そこらにないか見て下んせ。」彌次「えゝ、おいらが知るものか。馬

鹿な面な。」往來の人「えらいおとがいなわろぢや。たゝんでこませやい。」と、いづれもきかぬ氣の者と見えて、大勢ごや〳〵と立ちかゝれば、北八とめて、「こりや、こちらがわるかつた。どなたも御料簡下さりませ。さあ〳〵彌次さん、あゆみなせえ。」彌次「いめえましい奴等だ。北八どうもひとりでは持たれぬ。あとの方へ肩を入れてくれぬか。」北八「どれ〳〵、こりやおれまでをとんだ目にあはせる。」

是もまたはなしのたねよはる〴〵と京へのぼりし梯子

一脚

彌次「えゝ、歌どころぢやねえ、どうぞうつちやつてしまひてえもんだが。」と、厄介物の梯子打捨てて行かんと往來少き横町へ入り、そつと据ゑおき逃げんとすれば、折惡しく人に見つけられて咎められ、詮方なく擔ぎ歩き、又何方へぞ捨てん〳〵と思ふうち、うかうかと三條通にさしかゝる。（道中膝栗毛）

上田秋成　國學者。無腸公子・鶉居等の號あり。文化七年歿、年七十八。

新院　崇德上皇。

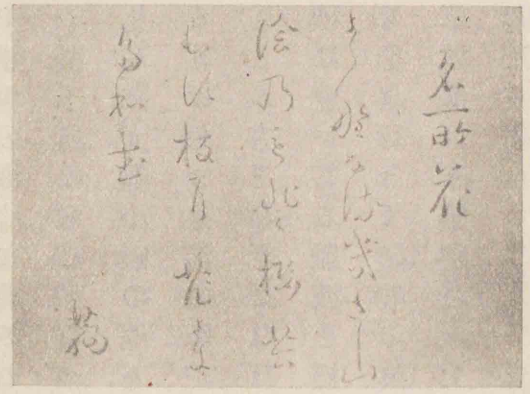
一五　白峯の陵

上田秋成

逢坂の關守に許されてより、秋來し山のもみぢ葉見すごし難く、濱千鳥のあと蹈みつくる鳴海潟、富士の高根の煙、浮島が原、清見が關、大磯・小磯の浦々、むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蜑が苫屋、佐野の舟梁、木曾のかけ橋、心のとゞまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、蘆がちる難波を經て、須磨・明石の浦吹く風を身にしめつゝも、行き行きて讃岐の眞尾阪の林といふにしばらく笻をとゞむ。草枕遙けき旅路のいたはりにもあらで、觀念修行の便りとせし庵なりけり。

この里近き白峯といふ所にこそ新院の陵はあれと聞きて、拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登る。松・柏は奥深く茂り

合ひて、青雲のたなびく日すら小雨そぼ降るが如し。兒が嶽こい
ふけはしき嶺うしろに峙ちて、千仞の谷底より雲・霧おひのぼれ
ば、まのあたりもおぼつかなき心ちせ
らる。木立わづかにすきたる所に、土高
く積みたるが上に、石を三かさねに疊
みなしたるが、うばら・かづらに埋れて
うら悲しきを、これなむ陵よと思へば、
心もかきくらまされて、更に夢現とも
分きがたし。



上田秋成筆蹟

げにまのあたりに見奉りしは、紫宸・
清涼の御座に大政きこしめさせ給ふ
を、百のつかさ人は、かく賢き君ぞとて、御言かしこみて仕へまつ
りき。近衛院に讓りましし後も、藐姑射の山の玉の林をしめさせ

藐姑射の山　仙洞御所のこと。藐姑射山有二神人一居之。（莊子）

給ひしに、思ひきや、麋鹿の通ふ路のみ見えて、まうづる人もなき
深山のおごろの下に、神がくれ給はむとは。萬乘の君にてわたら
せ給ふさへ、宿世の業といふもののおそろしくも添ひたてまつ
りて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞ
けて、涙わき出づるがごとし。夜もすがら供養し奉らばやと、陵の
前の平かなる石の上に座を占めて、經文靜かに誦しつゝも、かつ
歌詠みてたてまつる。

松山の涙のけしきはかはらじをかたなく君はなりまし
にけり

なほ心おこたらず供養す。露いかばかり袂にふかかりけむ。日
は入りしほどに、山ふかき夜のさまつねならで、石の床、木の葉の
衾いとさむく、神清み、骨冷えて、物とはなしにすさまじき心ちせ
らる。

月は出でしかど、茂樹がもとは影をも漏らさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく「圓位、圓位。」と喚ぶ聲す。眼を開きて透し見れば、そのさま異なる人の背高く痩せおとろへたるが、顏のかたち、著たる衣の色紋も見えで、こなたに對ひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、おそろしともなくて、「此處に來たるは誰そ。」といへば、かの人いふ、「前によみつる言の葉の返りごと聞えむとて見えつるなり。」とて、

松山の涙に流れて來し船のやがてむなしくなりにける

かな

「嬉しくも詣でつるよ。」と聞ゆるに、西行、新院の靈なることを知りて、地にぬかづき涙を流しぬ。（雨月物語）

井原西鶴　松壽軒・二萬堂等の號あり。俳人、小說家。元祿六年歿、年五十二。

一六　蚤の籠ぬけ

井原西鶴

富士颪の騷がしく、府中の町も用心時の年の暮になりぬ。世を渡る萬の事も不足なく、武道具も昔を棄てず、歷々の浪人津河隼人と申せしが、如何なる思入れにや、下人なしに、たゞ一人少しの板廂を借りて住みけるに、十二月十八日の夜半に、盜人大勢忍び入りしに、夢覺め、枕刀を拔合はせ、四五人も斬立て、追つ散らし、何にても物は取られず、沙汰なしにして、近所も起さず濟ましぬ。

其の夜また同じ町はづれの紺屋に夜盜入りて、家を荒し、染絹・懸硯を取りて行くに、亭主鎗の鞘はづして出合ひけるに、七八人も取捲き主人を斬りこかし、思ふまゝ諸道具まで取つて行く。夜明けての御詮議に、下々の申すは、皆髭男の大小をさしてまゐつたといふ。かゝる折ふし、彼の浪人の門に血の流れたる、世間より

申し立て、さまざまの申譯其の證據もなければ、是非なく牢舍してぞありける。

「昔は如何なる者ぞ。」と御尋あるに、「此の身になつて名は無し。」と打笑つて申す。何とも難かしき詮議にて、年月を重ね、七年過ぎて、駿河の牢舍殘らず京都の牢に引かるゝ事あり。又此の中に交り、都の憂き住居、武運の盡なり。

井原西鶴とその筆蹟

數多人はあれども、其の身に科をおぼえて、今更公儀を恨みず、命を惜まず。或雨中に鐵の窓より幽かなる光明を受け、鮑の貝にて髭を拔くもあり、塵紙にて佛を造るもあり、色々藝盡くし、一人も鈍なる者はなし。其の中

に髮白く捲上り、さながら仙人の如くなるが、薄緣の絲にて細工に蟲籠を拵へ、此の中に十三年になる虱、九年になる蚤、之を愛して、食物には我が肥肉股を喰はしける程に、勝れて大きになり、優しくも懷きて、其の者の聲に、虱は獅々踊をする、蚤は籠拔けする、悲しき中にもをかしさ增りぬ。後は石川五右衞門より傳授の畫盜の大事、又は高名咄になつて、ちよろりの新吉といふ男に、片耳の無い仔細を聽く人に語るは、「我險しき事に出合ひしは四十三度、一度も手を負はざりしに、或時駿河にて、浪人方に押込みしに、手ばしこく斬立て、皆々命をやう〳〵拾ふ。一代にこれ程好かぬ目に逢ひつる事はなし。それにも懲りず、其の夜染物屋へ入りて、主人を斬殺して。」と有りの儘に語るを聽きて、「我こそ其の浪人の隼人と申す者ぞ。其方どもの仕業我が難儀となるなり。かゝる身となりて更々命を惜むにはあらず。侍の惡名取つて相果つる事

口惜し。何卒此の難晴るゝやうに。」と申しければ、盗人聽分け、我々はそれのみならず、此度は人を殺しての科、彼此遁るゝ事なし。御身の事御訴訟申さん。」と、牢番を賴み、兩人あらましを申し上げたれば、久しく濟まざる事の埒明き、浪人を召され、永々の難儀の段思召し、何にても願を協へ下さるべき仰なり。浪人有り難く存じ、然らば此の二人の命を申し請けたし、最前に彼等故の難に逢ひ候へども、此度の申譯にて、武士の名の埋まぬ事の嬉しさと、重ね重ね言上申し助けけるとなり。（諸國ばなし）

○

白露や無分別なるおきどころ　宗因

やがて見よ棒くらはせん蕎麥の花　同

辻駕籠や雲に乘り行く花の山　西鶴

松尾芭蕉
名は宗房。伊賀の人。桃青・風蘿とも號す。俳諧正風の祖。元祿七年歿、年五十一。

去年の秋
元祿元年秋、信濃の旅より歸りしことをさす。

杉風
通稱は杉山藤左衞門。魚賣。芭蕉の門弟。（一六〇七—一六九二）

一七　奥の細道

松尾芭蕉

一、

月日は百代の過客にして、行交ふ年も亦旅人なり。船の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年より か、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關越えんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず。股引の破れをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸けおき、彌生も末つ七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれる物から、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢又いつかはと心細し。睦まじきかぎりは宵よりつどひて船に乘りて送る。千住と云ふ所にて船をあがれば、前途三千里の思、胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙を濺ぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

是を矢立の初として、行く道なほ進まず。人々途中に立ちならびて、後かげの見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮のうらみを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、若し生きて歸らばと定めなき賴みの末をかけ、其の日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づ苦む。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜のふせ

吳天去年九月到二東洛一、今年九月來二吳鄉一、兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黃。（白樂天）

ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさりがたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

二、

那須の黑羽といふ所に知人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遙かに一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬにはあらず。いかゞすべきや。されども此の野は縱横にわかれて、うひ〳〵しき旅人の道ふみたがへん、あやしう侍れば、此の馬のとゞまるところにて馬を返し給へ。と貸し侍りぬ。ち

旅立つ芭蕉（蕪村筆）

ひさきもの二人、馬の跡したひてはしる。一人は小姫にて名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし
やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結付けて馬をかへしぬ。

三、

當國雲岸寺の奥に佛頂和尚の山居の跡あり。

竪横の五尺にたらぬ草の庵
むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付け侍りと、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲岸寺に杖を曳けば、人々進んで共にいざなひ、若き人多く、道のほど打騒ぎて、おぼえず彼の麓に至る。山は奥あるけしきにて谷道遙かに、松杉黒く苔したゝりて、卯月の天今なほ寒し。十景盡くる所、橋をわたつて山門に入る。さて、かの跡はいづくのほどに

當國雲岸寺
下野國那須にあり。禪宗。

佛頂和尚
常陸國、鹿島なる根本寺の住職。深川に留錫せし時、芭蕉は屢〻參じて禪を問ひたりといふ。

やと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵、岩窟に結びかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に殘し侍りし。

是より殺生石に行く。馬にて送らる。此の口付のをのこ短册を得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと、

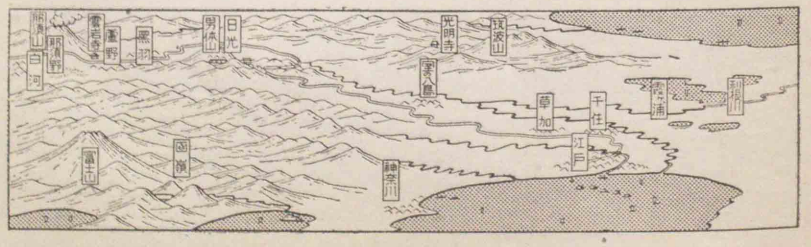
野を横に馬牽きむけよほとゝぎす

殺生石は溫泉の出づる山かげにあり。石の毒氣いまだほろびず、蜂・蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又「清水ながるゝ」の柳は蘆野の里にありて田の畔に殘る。こゝの郡守戸

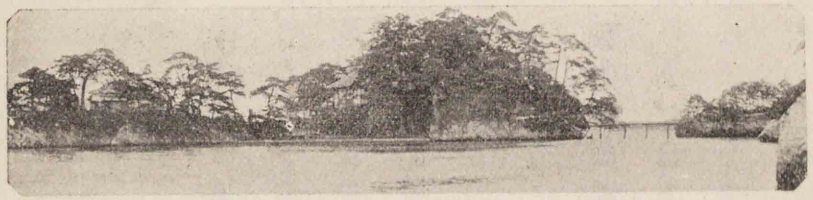
妙禪師
支那の宋代の僧。高峰山に住み、庵の戸を閉ぢて死關と稱し、生涯遂に出でざりしといふ。

法雲法師
支那の宋代の僧。石室に籠り、馬糞を焚きて芋を煮、之を食ひて修法せしといふ。

清水ながるゝ
道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ。(西行法師)



洞庭　支那湖南省の北部にある大湖。
西湖　支那浙江省杭州府城の西にあり。



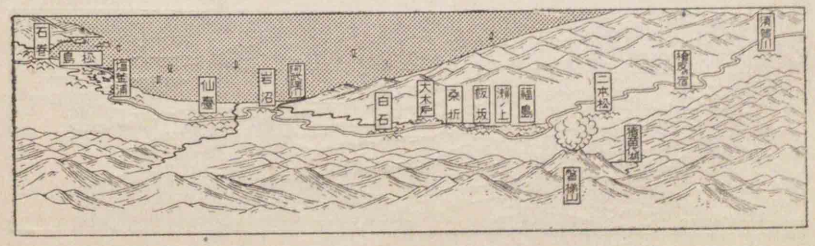
松島（雄島）

部某の、此の柳見せばやなど折折にのたまひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日此の柳のかげにこそ立ちより侍りつれ。

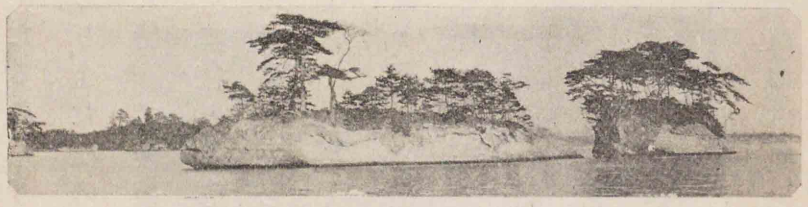
田一枚植ゑて立去る柳かな

四、

そも〳〵事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を辱む。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の數を盡くし

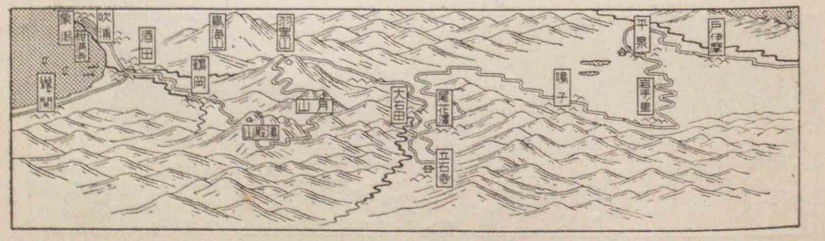


て、欹つものは天を指し、臥すものは波に匍匐ふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃かに、枝葉汐風に吹撓められ、屈曲おのづから矯めたるが如し。その氣色宵然として美人の顏を粧ふ。千早振神代の昔、大山づみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡くさん。



松島（二子島）

雄島が磯は地續きて海に出



雲居禪師　元和の頃の名僧。

曾良　通稱は川合惣五郎。芭蕉の門弟。(一三九—一三七〇)

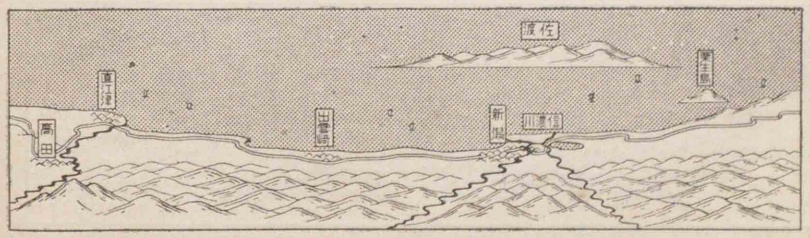
瑞巖寺　松島村にあり。禪宗。眞壁平四郎　法名は法心。

でたる島なり。雲居禪師の別室の迹、座禪石などありぬ。また松の樹蔭に世を厭ふ人もまれ〳〵見え侍りて、落穗・松笠などうち煙りたる草の庵、靜かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づなつかしく、立寄る程に、月海に映りて、晝のながめまた改りぬ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き、二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

余は口を閉ぢて、眠らんとするに寐ねられず。

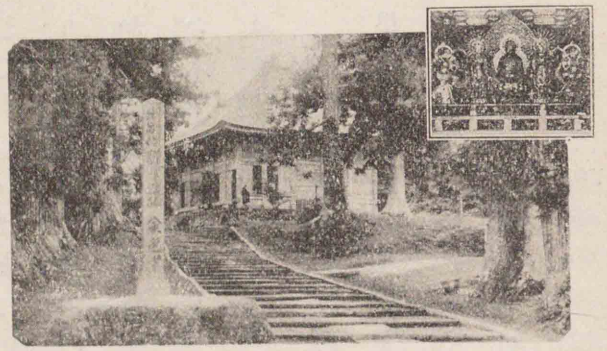
十一日、瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。その後、雲居禪師の德化に依りて、七堂甍改りて、金碧の莊



見佛聖　天仁の頃の高僧。

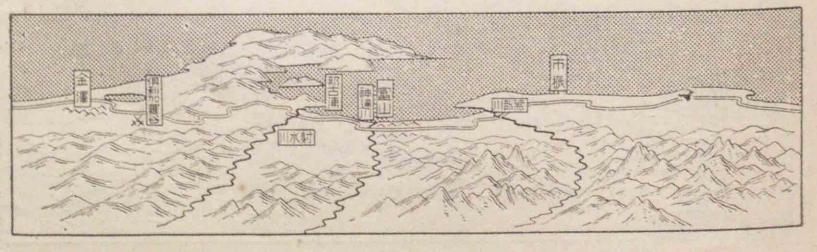
黃金花さく　すべらぎの御代榮えむと東なるみちのく山に黃金花さく。(大伴家持、萬葉集)

嚴光を耀かし、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。かの見佛聖の寺はいづくにかと慕はる。



中尊寺金色堂

十二日、平泉へと心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人迹稀に雉兎・蒭蕘の往きかふ道そこともわかず、遂に路踏みたがへて、石の卷といふ湊に出づ。黃金花咲く」と詠みて奉りし金人家地を爭ひて、竈の煙立續きたり。思ひかけず、華山、海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ、

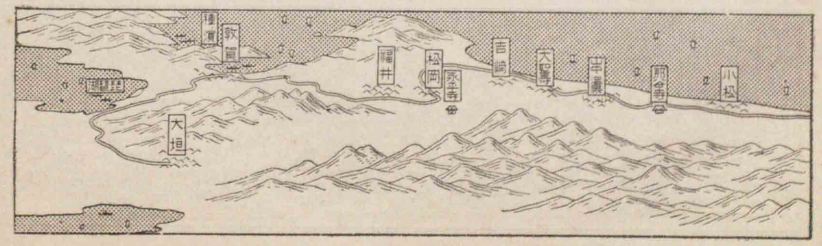


三代　藤原清衡―基衡―秀衡

高館　義經の居城。

かゝる所にも來れるかなと、宿儵らんとすれど、更に貸す人なし。漸くまどしき小家に一夜を明して、明くればまた知らぬ道迷ひ行く。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのの萱原など、よそ目に見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に到る。その間、二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀、一睡のうちにして、大門の址は一里こなたにあり。秀衡が館の墟は田野になりて、金鷄山のみ形を遺す。まづ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊蹟は衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を



國破れて云々　國破山河在、城春草木深。（杜甫の詩句）

兼房　義經の臣。

三將　藤原氏三代のこと。

三尊　中尊は阿彌陀、夾侍は觀音・勢至

七寶　普通には、金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・瑪瑙・眞珠。

防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと　　曾良

卯の花に兼房見ゆる白髮かな

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を遺し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の扉風に破れ、黃金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍み、甍を覆うて風雨を凌ぎ、暫時千歲の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

五、

南部道遙かに見やりて岩手の里に泊る。小黑崎・みつの小島を過ぎて、なるこの湯より尿前（しとまへ）の關に掛りて出羽の國に越えんと

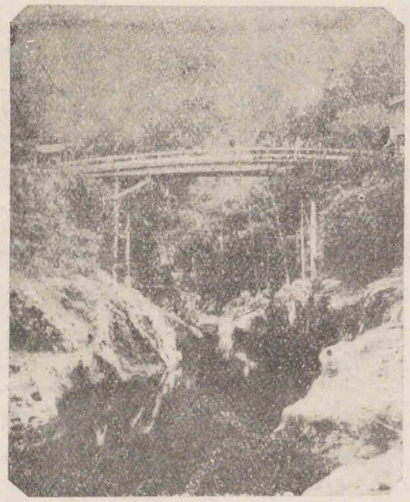
す。此の道旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸くにして關を越す。大山をのぼりて日既に暮れければ、封人の家を見かけて舍りをもとむ。三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿するまくらもと

あるじの云ふ、是より出羽の國に大山を隔てて道さだかならざれば、道しるべの人を賴みて越ゆべき由を申す。さらばと云ひて人を賴み侍れば、究竟の若者反脇差を横たへ、樫の杖を携へて我々が先に立つて行く。けふこそ必ず危き目にもあふべき日なれと、辛き思をなして後について行く。あるじの言ふに違はず、高山森々として一鳥聲きかず。木の下闇茂り合ひて夜行くがごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分け踏切り、水を渡り岩に躓いて、肌に冷たき汗を流して最上の庄に出づ。かの案内せしものこの云ふやう、此の道必ず不用の事あり、恙なう送り參らせて

仕合せしたりと喜びて別れぬ。後に聞きてさへ胸轟くのみなり。

六、



山中溫泉

卯の花山、くりからが谷を越えて、金澤は七月中の五日なり。爰に大阪よりかよふ商人何處といふ者あり、それが旅宿を俱にす。一笑と云ふものは、此の道にすける名のほのぐ聞えて世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

七、

山中の溫泉に行くほど、白根が嶽後に見なしてあゆむ。左の山

一笑　通稱は小松新七。芭蕉の門弟。

白根が嶽　加賀の白山。

際に觀音堂あり。花山法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて那谷と名付け給ふとかや。那智・谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ぶきの小堂、岩の上に造りかけて殊勝の土地なり。

那智・谷組　西國三十三ケ所の順禮は紀伊那智山に始り、美濃谷組に終る。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其の效有馬につぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするものは粂之助とて、いまだ小童なり。かれが父俳諧を好み、洛の貞室、若輩のむかし爰に來りし頃、風雅に辱められて、洛に歸りて貞德の門人となつて世に知らる。功名の後、此の一村判詞の料を請けずと云ふ。今更昔語とはなりぬ。

貞室　安原貞室。俳人。（一六一七—一六四四）

貞德　松永貞德。歌人。（一五三四—一六四五）

曾良は腹を痛みて、伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、

ゆき〳〵てたふれ伏すとも萩の原　曾良

とかき置きたり。行くものの悲、殘るものの恨、雙鳧のわかれて雲に迷ふが如し。予も亦、

けふよりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺にとまりて、

終宵秋風聞くやうらの山

と殘す。一夜の隔、千里に同じ。われも秋風を聞きつゝ衆寮に臥せば、曙の空近う讀經聲すむまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと心はや半ばにして堂下に下るを、若き僧ども紙・硯をかゝへ、階のもとまで追來たる。折ふし庭中の柳散れば、

庭掃いて出づるや寺に散る柳

とりあへぬさまして草鞋ながら書捨つ。（奥の細道）

近松門左衞門
本姓は杉森、名は信盛。巢林子と號す。長門萩の人。淨瑠璃作者。享保九年歿す。

一八　曾我會稽山

近松門左衞門

名に高き富士の裾野の御狩の御遊、鎌倉の騷動にて、急ぎ歸御あるべしとの時刻も雨に事延びて、假屋の騷もいつしかに、辻の篝も影薄く、晝の疲の手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける。

時節よしと曾我殿原、出立つ祐成が裝束は、母上より給はりし、秋の野に草盡くし縫うたる練貫の單衣、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黑鞘卷の太刀を佩き、竹子笠の紐强く、上に下部の青合羽、陣松明に道照らさせ、先に進めば、五郎時致、是も母より給はつたる、白綾に鶴の丸縫うたる袷、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰差、源氏重代友切丸、肩に打ちかけ紙合羽、しめたる笠の怯れじと、後に續いて出立つたり。

いかに時致、母の御恩を徒らに、今宵敵を討たずんば、不孝こい、ひ世の人口、生きたる甲斐もあるまじきに、天の惠か降る雨に、御寮の御立は延引す、狩場の用意も事靜まる、殊には蒲殿の貸し給はつたるこの割符、賴朝公の膝元へも、通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の內、雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む、討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎はいかばかり悲しさよと涙ぐむ。仰にや及ぶべき、祐經は籠中の鳥、網代の魚、やはか洩らし候べき、恐らくはこの時致、天魔破旬に出合ふとも、ちつとも怯まぬ魂、今宵の雨は身にかゝり、ぞつこん徹つてわぢ〳〵と、物悲しう罷りなる、敵に出合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず、最期の盃一つ飲うで給はれと、腰に付けたる懸烏帽子に、降來る雨を受溜めて、祐成が手に渡せば、なう七度結びて兄となり、六度契りて弟となると傳へ聞く、死に變り生き變り兄

弟の縁は切るまじと、さらりと乾して指しければ、時致とつて押戴き、兄は親にて候へば、母上の御盃も是に籠り、天の甘露、仙家の醤、この酒に勝らんやと、受けて飲みけるその中に、五月雨のいつか一頻りをだやみて、空さりげなく清々と、北斗の光鮮かに晴れ渡る。かゝる所に假屋俄かに騷ぎ立ち、お先手は發足の御觸あり、馬よ鞍よと犇けば、兄弟彌ゝ氣も急かれ、祐經が假屋とてもさぞあらん、これ迄忍びし甲斐もなく、此の雨の降止む事、神明にも見放され、よつく武運に盡きしかと、拳を握り齒を鳴らし、虛空を睨んで立つたる所に、秩父の執權本田の次郎近經、小具足に身を固め、本陣の夜廻してけるが、曾我殿原と見るよりも近々と歩み來る。

兄弟誰そと咎むれば、波に搖らるゝ沖津船、知る邊の磯は此方ぞと、囁く聲に祐成はつと嬉しく、重忠公の御情、又は御身の御懇情、この度に限らねども、御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思さ

れん、今宵年來の大望達せんと存ずる所、俄かに雨晴れ假屋々々は出足の用意、この騷には覺束なし、この儘歸つていつの時をか期すべき、無二無三に切込んで、兄弟屍を晒す所存、重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執成賴み入ると言ひければ、兄弟の耳に口を寄せ、氣遣ひばししし給ふな、祐經は明日君の御馬の御供、それ故假屋も寢靜まる、此方へ此方へ靜かにと、道の案内の杖柱、嬉しさ類はなかりけり。是こそ祐經が臥床なり、心靜かに本意を遂げ、曾稽の耻を雪がれよと、いと懇ろの詞に縋り、御案内の程五百生の體を燒くとも、いかでか報じ盡くすべき、隨つて通路のこの割符、蒲殿より密かに拜借せしかど、御切腹のあとなれば、返辨申さん樣もなし、我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に與し、反逆の族よと、死後の虛名に御骸を瀆さん事、御恩を却つて仇にて報ずる理、近經殿に預け置く、然るべく賴み存ずると、二

枚の小札を手に渡せば、尤も〳〵、近經に任されよ、主人重忠惡しくは計らひ申されまじ、老母の事もゆめ〳〵麁略候まじ、今暫くと存ずれども、役目なれば知らぬ顏、弓矢の禮儀これまでと、本田は假屋に入りにけり。

今は何をか期すべきと、兄弟合羽なぐり捨て、本田が教へし敵の假屋は是なりと、木戸、駒寄せを飛超え跳超え、兄弟莞爾と打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討つて入る。次に臥したる宿直の侍、足音に目を覺し、すは盜人よと呼ばはつて逃出づる。假屋々々に聞付けて、そりや盜人よ御立よと、騷の上に又混亂、相圖響かす大鼓、鉦、かん〳〵どん〳〵どんくさい、又雨が延びて來た、お立が降ると入るもあり、雨の足音さつ〳〵さ、人の足音どろどろ〳〵、右往左往にもてかへす。其の隙に兄弟は、敵工藤祐經を思ひのまゝに討ちおほせ、門外に走り出で、袂を絞つて喉を濕し、勢

猛に立つたりし、心のうちこそ嬉しけれ。

かくて二人等しく大音上げ、伊豆の國の住人伊東の次郎祐親の孫、河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致、親の敵工藤左衞門祐經を討留めたり、賴朝公の御内に弓取はなきか、折合ひて打留めよと呼ばはつて、邊を睨んで控へたり。

闇さは暗し雨は降る、假屋々々にすは夜討と、弓一挺太刀一振に、五人三人取附いて、我よ人よと奪ひあひ、繫ぎ馬に鞭打つて、遲しとあせる所も有り、鎧に辷り兜に躓き、小手を臑當、草鞋を笠、上を下へと犇けば、それ松明出せと呼ばはつて、二千軒の假屋より、箙、靫、簑、竹笠、傘、箒に至るまで、火を付けて投出す。裾野の暗は忽ちに、百千の朝日影、一度に照らす如くなり。騷の中より名乘掛け名乘掛け切つて出づれば、兄弟は小柴垣を小楯に取り、入れ替へ入れ替へ名乘替へ、火花を散らして雨まじり、揉立て揉立て戰ひけ

る。腕首切られてひくもあり、頬先・肩先・尻こぶた、弓手の太股、馬手の足首、矢場に切られて死するもあり。されども兄弟薄手も負はず、血氣に進む時致は、假屋の人種たやさんと、御所の間近く切つて入り、祐成は柴垣の影に息をぞ休めける。

假屋々々の松明も、降りくる雨に打消され、東西暗き木蔭より、緋縅の鎧着て、二尺餘の打刀、三尺五寸の大太刀横たへ、四十足らずの武者一人、のつさ〳〵と動ぎ出て、抑これは先年上意を蒙り、富士の人穴に入つて、地獄の底まで名を顯し、この度の狩倉には、虎より猛き猪を乘留め、日本無雙を一天に輝かす、仁田の四郎忠常とは我が事、物々し曾我殿原、思ふ敵は祐經一人、木の葉武者五十百切つたるとて何の益かある、仁田の四郎が手に懸り、御勘氣の者の末孫と、獄門の耻が受けたくば、いざ來いやつとぞ罵つたる。

おゝよい敵ござめり、仁田なればとて必ず勝つに極らず、人穴の地獄の鬼、猪なんど相手にしたとは違ふべし、十郎祐成手並を見よと打つて懸る。えゝ、無分別者是非なしと、閃く太刀影、雨夜の星、電火を飛ばして切結ぶ。更に勝負もなかりし所に、花やかに鎧うたる武者一人、坂東聲を打揚げ、あら穢らはし、我が名を盗む曲者、高名を貪るか、伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常とは我が事、見參せんと呼ばはつたり。祐成飛退り、六十餘州は廣けれども、賴朝の幕下に仁田ならで武士は無きか、あら仰々し、痩涙人、一人か二人討たんとて、彼も仁田此も仁田、にた〳〵しき表裏者、二人とも に餘さじものと打つて懸る。

やあ後から出て仁田とは人眞似か、祐成は討たせじと懸隔たれば搔い潜り、打付くれば懸隔て、祐成一人に仁田は二人、入亂れて揉合ひしが、陽に開いて打つ太刀を、後の仁田が陰に閉ぢ、受流

して裾を薙ぐ。祐成が馬手の高股膝口かけて切落され、弓手ばかりの片足立、二打ち三打ち打つかひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうと轉びしが、弟の時致はいづくにぞ、祐成こそ打たれたれ、死出の山にて待つべきぞ、言ふ事もこれまで、さあいづれなりとも首を打て、臆れたるかと聲懸くる。いや討手の實否紛らはしく、黄泉の障も悼はしし、誠の仁田が面を見せ、名字盗みを面縛させん、松明出せと呼ばはれば、忠常が下部ども、提灯取つて差上ぐる。

仁田と仁田が顔さし合はせ、やあ二の宮、以前仁田と名乗りつるは御邊よな、さて淺間しや、やい、兎死すれば狐是を悲むとは、同じ類に禍の來らんことを悼む故、元縁者の端くれ、御咎の飛ばしる掛らん事を痛み、祐成を討つて一味せぬ身の言分とは、はて能い思案、女房を離別せしは他人に成つて、兄弟が力とならん心底、尤も斯くあるべき事と感心せしに、さては立身の爲の離別か、御

分別御分別、由なき仁田呼ばはりが奇怪さ、思はず駈合はせ、あつたら若者を手に懸けし殘念さよと、大きに怒つて耻ぢしむる。

二の宮から〳〵と笑ひ、獼猴が帝釋天を嘲るとやら、己が足らざるを以て、人の大智を計らんとして、却つて愚痴が顯はるゝ、二の宮が曾我を討たんと思はば、けふまで何の待つべきぞ、慾か功ある男子と思ひ、名字を借つて追散らし、某他人になつたる德、天下晴れて匿ひ置き、時節を待つて世に出さんと、手を取つて引かぬばかりにあしらへども、祐成たじろかねば詮方なし、手柄はしたし怖くはあり、二の宮が聲を後楯に駈合はせ、溢れ幸、指し果報、あつたら若者を思はず討つて殘念などとは、義を知つた武士の言ふこと、猪に乘つて高名とする、獵師風情の言分には、過ぎた過ぎたと言はせも敢へず、やあ小舅をしこめんとする程の不仁もの、武士の情は存じも寄るまい、祐成が首は御邊急ぎ討つて手柄

にせい。いや人に貰うて手柄にする安清ならず、御邊討つて手柄にせい。いや二の宮討て、仁田討て、二の宮討てと責めかけられ、お小舅の曾我を討つ刀、二の宮は持合はせず、これで討てれば御邊討てと、祐成と切合はせし、太刀をからりと投出す。

忠常おつ取り、提灯に透して見ればこは如何に、物打より切先まで及を石にてたゝき潰し、打ちみしやいだる槌同前、むゝ最前よりこの太刀にて打つ眞似したるか、あッあ賴もしとも優しとも、弓矢取る身の手本ぞや、雜言御免二の宮殿、それこそ互、惡口御免、仁田殿、和殿の如く情ある友を持つたる五郎・十郎、御分の如く誠ある緣者を持つたる曾我殿原、一生花實も咲かざりし、天運の拙さよと、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞ絞りける。

今を限の祐成起直り、緣者と申すも元は他人の二の宮殿、よしみなき仁田殿御芳志は、五百生生き變り死に變るとも忘るまじ、

御手に懸り討たるゝこと、祐成はなんぼう果報の者、首討つてたべ疾く〳〵と、いへども二人涙に暮れ、さし俯いて居るところに、御所の方より聲々に、曾我の五郎時致、御前近く亂れ入り、御所の五郎丸が組みとめ、御假屋安穩なりと呼ばはる聲に、祐成、あれ聞き給へ、時致は召捕られしとや、祐成が最期いかにと案ずべし、疾く首討つて、兄が最期淸かりしと、悅ばせてたべ仁田殿賴み入る、南無阿彌陀佛、彌陀佛と、首さし伸べて目を閉づる。

名ざしの上は承る、御心易かれと、太刀拔持つて後に廻り、振上ぐれば、祐成が首は前にぞをちかたに、はや曉の八つの鐘、鳥も啼く啼く人も泣く、ねをなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩れて名高き富士の嶽、曾我兄弟が會稽山、骸は裾野に埋めども、譽は三穗の松の風、他の國まで吹き傳へ、昔語を今の世の、人のねぶりを覺しける。（曾我會稽山）

坪内逍遙
名は雄藏。文學博士。早稲田大學名譽教授。

一九　シーザーの館

坪内逍遙

雷鳴電光。

シーザー夜間服を着して出る。

シーザー「今宵は天地ともに穩かでなかつた。三度までもカルパァニヤが夢を見て、大きな聲で『助けてくれ、シーザーが殺さるゝ！』と叫んだ。だれかゐるか？

一從者出る。

從者「御前！

シーザー「神官に吩咐けて犧牲をさせて、それが神慮に合つたか、如何か、結果を聞いて來い。

從者「かしこまりました。

從者入る。

カルパァニヤ出る。

カルパ「如何なさいました。シーザー？ お出掛けなさらうといふのですか？ 今日はお出掛けなされてはなりません。

シーザ「いゝや出掛けます。シーザーを嚇さうとした者もあつたが、曾て正面に向かひ得た者はない。シーザーの面を見れば、彼等は忽ち消えてしまふ。

カルパ「シーザー、わたくしは從來は厭勝（まじなひ）や前兆を信じませなんだが、今日は怖ろしう思ひます。わたくしごもが見たこと、聞いたことの外に、それは〳〵恐ろしい物を夜廻の男が見ましたさうにございます。牝獅子が街中で仔を產みましたげな。墓穴が、くわと開いて死骸が吐出されましたげな。狂暴な猛烈な武人が雲の中で戰ひましたげな。列を作り隊伍を整へ、正式の軍の通りに。其の血がだら〳〵と議事堂の上へ灑ぎ降つて、空中で

打合ひ犇く物音がして、馬が嘶くやら、手負がうめくやら、剩へ幽靈がをめき叫んで、街の中を驅廻りましたげな。こりや全く只事ではありません。わたくしは怖ろしう思ひます。

シーザ「强大な神々が斯うと思ひ立つてなさるゝことなら、避けることは出來ん。やつぱりシーザーは出掛けます。何故なれば、これは凶の兆かも知れんが、シーザー一人に對してではなく、世界一般に對しての凶兆ぢや。

カルバ「乞食が死ねばとて彗星は現れませんが、王侯の最期には種種な天變が起つて、それを知らせます。

シーザ「臆病者は眞の死に出逢ふまでに幾たびも死ぬ。勇者は只一度の外死の味を知らん。世の中のあらゆる不思議の中で、予の最も奇怪に思ふことは、人が死を恐れるといふことぢや。死がまぬかれ難いものである以上は、來る時には來る……。

シーザーの館

從者出る。

シーザ「神官は何と言つたか？

從者「今日の御外出は御無用と申します。御犧牲の臟腑を引出して見ました所、その獸に心の臟がなかつたと申します。

シーザ「神が臆病者を恥ぢしめようとなさるのぢや。予が若し今日恐れて家に留るやうであると、シーザーは心の臟の無い獸とならざるを得ない。いや、シーザーは留らん。危險はシーザーの方が彼よりも危險なことを知つてゐる。予と彼は同日に生れた二頭の獅子ぢやが、予の方が兄で、一層怖

ろしいのぢや。……シーザーは出掛ける。

カルパ「あゝ悲しや！貴下は御自分を信じ過ぎて、お智慧が昏りました。今日はお出掛けなされては可けません。貴下ではなくわたくしが心配して引留めたと仰しやいまし。元老院へは、マーク、アントニーを遣しまして、今日は貴下が御不快ぢやと申させませう。膝を突いて願ひますから御聽屆け下さいまし。

シーザー「お前の氣休めの爲に、マーク、アントニーに予は不快ぢやと傳へさせて、宅に留ることにしよう……。

デシヤス、ブルータス出る。

シーザー「デシヤス、ブルータスが來た。彼にさう言はせよう。

デシヤス「シーザー、萬歲！お早うございます、シーザー閣下。元老院へお迎の爲に參りました。

シーザー「ちやうど好い時に來て下すつた。元老達へ予は今日往かん

と傳へて下さい。往かれんと言つては虛僞ぢやが、往き得ないと言つては尙虛僞ぢや。今日は往くことを欲しない。さう言つて下さい。

カルパ「シーザーは御不快ぢやと言つて下さい。

シーザー「シーザーが何の爲に虛僞を傳へさせるか？遙かな外國までも悉く伐ちしたがへたシーザーが、何の爲に白髮の老人どもに事實を傳へることを恐れるか？デシヤス、シーザーは往くを欲しないと言つて下さい。

デシヤス「シーザー閣下、何か理由をお聞かせ下さい。只さう申したばかりでは、わたくしが嘲弄されまする。

シーザー「理由は予の意志にある。往くを欲しない。元老へ對しては、それで十分ぢや。が、予は君を愛してゐるから、君を滿足させるために言ふが、此の妻のカルパァニヤが止めるのぢや。其の理由

は、昨夜妻が夢に、予の像が夥しい噴水口を有してゐる噴水盤のやうに、盛んに鮮血を迸らすのを見たぞると其處へ多勢の強健げな羅馬人がにこ〳〵笑ひつゝやつて來て、頻りにそれへ手を浸すのを見た。で、それを妻は、何か災厄の來る知らせであり前兆であると考へて、今日は決して外出してくれるなと膝まづいて予に乞うたのぢや。

デシヤ「其のお夢の御解釋は全く間違つてゐます。それは結構なめでたいお夢です。閣下の像が血を噴出してゐる處へ、多勢の羅馬人がにこ〳〵笑ひつゝやつて來て、それへ手を浸すといふのは、大羅馬は畢竟閣下の血を啜つて復活するのでありますから、そこで歴々のともがらが群り來つて、閣下の血で紋章を染めたり、印跡を捺したり、記念品を作つたり、目標を製したり致すといふ意味なのでありまする。それが奥方のお夢にようなり

現れてありまする。

シーザ「さう解釋した方が當然のやうぢや。

デシヤ「只今申し上げることをお聽きになれば、それが愈〻當然なことがお分りになりませう。お聽き下さいまし。元老會は本日大シーザー閣下へ王冠を獻ずることに決してをります。然るに御出席なさらんと申し遣された時分には、其の決心は變るかも知れません。のみならず、恐らく之を好い嘲弄の料にして、元老會は『シーザーの奥方がもつと吉い夢を見られるまで解散したがよからう。』なぞと申す者もございませう。シーザーが引込んでお出掛けなさらんとなると、『あれ見よ！シーザ〻は怖がつてゐる。』なぞと耳語をしかねますまい。御免下さい、シーザー。閣下の御行動に對し深い愛敬を持して居りますあまりに、つい有りのまゝを申し上げてしまひました。自分の分別力は

兎角情に負けまするので。

シーザ「カルパァニヤ、して見るとお前さんの心配は、愚にもつかぬことであつたのぢや！それを取上げたのを予は恥づかしく思ふ。禮服を持つて來て下さい。出掛けるから……。

バブリヤス・ブルータス・リゲーリヤス・メテラス・カスカ・トレボニヤス及びシンナ出る。

シーザ「あゝ、あそこへパブリヤスが予を迎に來た。

バブリ「お早うござります、シーザー。

シーザ「ようこそ。パブリヤス、やあ！ブルータス。君もこんなに早く起きたのか？お早う、カスカ。……ケーヤス、リゲーリヤス、大層痩せましたね。シーザーは君に對して君を惱ました瘧ほどの敵意は有つてゐませんぞ。……何時だね？

ブルー「シーザー、八時を打ちました。

シーザ「わざ〳〵御出迎へ下すつた諸君の勞を謝します。

アントニー出る。

シーザ「御覽じろ。夜通し飲みあかすアントニーまでが起きて來ました。……アントニー機嫌よう。

アント「シーザー、閣下にも御機嫌よう。

シーザ「侶の者に準備させい。斯う諸君を待たせては濟まん。……や、シンナ。……やあ、……メテラス。……やあ、これはトレボニヤス！君には一時間たつぷり話すことがある。必ず今日訪ねて下さい。忘れないでな。君に忘れさせないやうにしたいから、予の傍にゐて下さい。

トレボ「承知しました。始終お側に居りませう。貴下の最上の御親友がたは、爲に目を欹てられますほどにな。

シーザ「諸君、奥へ來て予と一しよに一杯飲んで下さい。それから直

ぐに連立つて出掛けませう。無二の親友らしく。」

ブルー（傍白）親友らしい者必ずしも親友ではない。おゝ、シーザー！

それを思ふと、たまらないわい。

一同入る。

（ジュリヤス、シーザー）

○

演劇は二人以上の對話若しくは科介と行爲とによつて、自然に解るやうに、且小說を讀むと同樣な感興を起させるやうに脚色された或事件を、人間なり人形なりが該人物らしく假裝し且言動することによつて實現するものである。

（「劇曲の本質」に引用せる坪內逍遙の言）

吉川兼好卜部氏。洛外吉田に居りしにより吉田と稱す。文才あり、和歌を能くす。觀應元年歿、年六十九。

花橘は云々
さ月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。（讀人しらず、古今集）

灌佛

二〇 四季

吉田兼好

折ふしの移りかはるこそものごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣ねの草萌出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ、古のことも立ちかへりこひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさまなどもたる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、世のあ

灌佛會、又佛生會ともいふ。四月八日に行ふ佛事。

祭

賀茂祭。四月の第二の酉の日に行ふ神事。

六月祓

六月晦日に行ふ。

はれも、人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく頃、早苗とる頃、水鷄のたゝくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊やり火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、鴈鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語・枕草紙などにことふりにたれど、同じことまた今更にいはじとにもあらず、おぼしき事いはぬは腹ふくるるわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の

御佛名

十二月十九日より三日間清涼殿にて行ふ佛事。

荷前

年の終に十陵八墓へ幣帛を奉る神事。

六月祓

立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄めるに二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。

つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゝきはしりありきて、何事にかあらむ、ことぐしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりさす

がに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松たてわたして、花やかにうれしげなるこそまたあはれなれ。（徒然草）

○

正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕つかたは晴れたる空に、月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる。つとめては止みにたれど、なほ曇りて、やゝもすればふり落ちぬべく見えたるもをかし。（枕草紙）

二一　景清

シテ　惡七兵衛景清
ツレ　息女人丸
トモ　從者
ワキ　里人

ツレ（トモ）次第「消えぬ便りも風なれば、露の身いかになりぬらん。

ツレ「是は鎌倉亀が江が谷に、人丸と申す女にて候。さても我が父惡七兵衛景清は、平家の味方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる。いまだ習はぬ道すがら、物うき事も旅のならひ、また父ゆゑと心づよく、（ツレ二人トモ）「思ひ寢の涙かたしく草の枕露をそへて、いと滋き袂かな。

（道行）「相模の國を立ちいでて、誰にゆくへを遠江、げに遠き江に旅舟の、三河にわたす八橋の、雲居の都いつかさて、假寢の夢に馴れ

て見ん。

トモ「やう〳〵御急ぎ候ほどに、是ははや日向の國宮崎とかやに御着きにて候。こゝにて父御の御行方を御尋あらうずるにて候。

シテ「松門ひとり閉ぢて年月を送り、みづから清光を見ざれば、時の移るをも辨へず。暗々たる庵室に徒らに眠り、衣寒暖に與へざれば、膚は髏骨と衰へたり。地「とても世を、背くとならば墨にこそ、染むべき袖のあさましや。やつれ果てたる有樣を、我だに憂しと思ふ身を、誰こそありて憐みの、憂きをとぶらふよしもなし。

ツレ「ふしぎやな、是なる草の庵古りて、誰住むべくも見えざるに、聲めづらかに聞ゆるは。もし乞食のありかかと、軒端も遠く見えたるぞや。

シテ「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音信いづちとも、

ツレ「知らぬ迷のはかなさを、しばし休らふ宿もなし。

秋來ぬと云々　秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。（藤原敏行、古今集）

シテ「げに三界は所なし、ただゝ一空のみ。誰とかさして言問はん。又いづちとか答ふべき。

トモ「いかに此の藁屋の内へ物問はう。

シテ「そも如何なるものぞ。

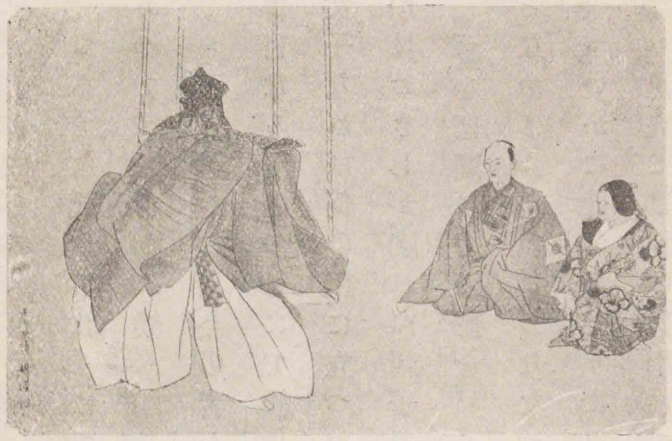
トモ「流され人の行方や知りてある。

シテ「流され人にとりても、名字をば何と申し候ぞ。

トモ「平家の侍惡七兵衞景清と申し候。

シテ「げにや、さやうの人をば承り及びては候へども、本より盲目なれば見る事なし。さもあさまし

景清



き御有様うけたまはり、そゞろにあはれを催すなり。くはしき事をばよそにて御尋ね候へ。

トモ「さては此のあたりにては御座なげに候。是より奥へ御出であつて尋ね申され候へ。

シテ「不思議やな、只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば、この盲目なるものの子にて候はいかに。われ一年一人の子をまうく。女子なれば何の用に立つべきぞと思ひ、鎌倉亀が江が谷の長に預けおきしが、馴れぬ親子の悲しさ、父に向かつて言葉をかはす、

地「聲をば聞けど面影を、見ぬ盲目ぞ悲しき。名のらで過ぎし心こそ、なか〳〵親のきづななれ。

トモ「いかに此のあたりに里人のわたり候か。

ワキ「里人とは何の御用にて候ぞ。

トモ「流され人の行方や御存じ候。

ワキ「流され人にとりても、いかやうなる人を御尋ね候ぞ。

トモ「平家の侍悪七兵衛景清を尋ね申し候。

ワキ「只今こなたへ御出で候山陰に、藁屋の候に人は候はざりけるか。

トモ「其の藁屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ。

ワキ「なう、その盲目なる乞食こそ、御尋ね候景清よ。あら不思議や。景清のことを申して候へば、あれにまします御事の、御愁傷のけしき見え給ひて候は、何と申したる御事にて候ぞ。

トモ「御不審尤もにて候。何をか包み申し候べき。是は景清の息女にてわたり候が、今一度父御に御對面ありたきよし仰せられ候ひて、是まではるゞ〳〵御下向にて候。こてもの事に然るべきやうに仰せられて、景清に引合はせ申されて給はり候へ。

ワキ「言語道斷、さては景清の御息女にて御座候か。まづ御心を靜

千行の悲涙云々
離レ家三四月、落涙百千行、萬事皆如レ夢、時々仰ミ彼蒼。（菅家後集）

めて聞しめされて候へ。景清は兩眼しひまし〳〵て、せん方なさに髪をおろし、日向の勾當と名を附き給ひ、命をば旅人をたのみ、我ら如き者の憐みをもつて身命を御つぎ候が、昔に引きかへたる御有樣を恥ぢ申されて、御名のりなきと推量申して候。某只今御供申し、景清と呼び申すべし。我が名ならば答ふべし。其の時御對面あつて、昔今の御物語候へ。こなたへわたり候へ。

ワキ詞「なう〳〵景清の渡り候か。惡七兵衞景清のわたり候か。

シテ「かしまし〳〵。さなきだに、故郷の者とて尋ねしを、此の仕儀なれば身を恥ぢて、名のらで歸す悲しさ。千行の悲涙袂を朽たし、萬事は皆夢の内のあだし身なりと打覺めて、今は此の世になき物と思ひ切つたる乞食を、惡七兵衞景清なんどと、呼ばば此方が答ふべきか。謠其の上我が名は此の國の、地「日向とは日に向かふ、向かひたる名をば呼び給はで、力なく捨てし梓弓、昔に歸るおの

が名の、惡心は起さじと、思へども又腹立や。

シテ「所に住みながら、地「御扶持ある方々に憎まれ申す者ならば、ひとへに盲目の、杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として、腹惡しくよしなき言ひごと、唯ゆるしおはしませ。

シテ「目こそ闇けれど、地「人の思はく、一言の内に知るものを。山は松風、すは雪よ。見ぬ花の、さむる夢の惜しさよ。さて又浦は荒磯に、寄する波も聞ゆるは、夕汐もさすやらん。さすがに我も平家なり。物語はじめて御慰みを申さん。

シテ「いかに申し候。只今はちと心にかゝる事の候ひて、短慮を申して候。御免あらうずるにて候。

ワキ「いや〳〵、いつもの事にて候ほどに、苦しからず候。又我等より以前に、景清を尋ね申したる人はなく候か。

シテ「いや〳〵御尋より外に尋ねたる人はなく候。

ワキ「あら僞を仰せ候や。まさしう景清の御息女と仰せられ候ひて御尋ね候ひしものを、何とて御つゝみ候ぞ。あまりに御痛はしさに、是まで御供申して候。急いで父御に御對面候へ。

ツレ「なう、みづからこそ是まで參りて候へ。

謠「恨めしや、はる〴〵の道すがら、雨風露霜を凌ぎて參りたる心ざしも、いたづらになる恨めしや。さては親の御慈悲も、子によりけるかや、情なや。

シテ「今までは包みかくすと思ひしに、あらはれけるか、露の身の置きどころなや、恥づかしや。御身は花の姿にて、親子と名のり給ふならば、殊に我が名もあらはるべしと、思ひ切りつゝ過すなり。我を恨と思ふなよ。地「あはれ、げに古は、疎き人をも訪へかしとて、恨み譏る其のむくいに、正しき子にだにも、訪はれじと思ふ悲しさよ。

地「一門の船の内に、肩を並べ、膝を組みて、所せく澄む月の、景清は誰よりも、御座船になくてかなふまじ。一類その以下、武略さまざまに多けれど、名を取楫の船に乘せ、主從隔てなかりしは、さも羨まれたりし身の、麒麟も老いぬれば駑馬に劣るが如くなり。

ワキ「あら痛はしや、先づかう渡り候へ。

ワキ「いかに景清に申し候。御娘御の御所望の候。

シテ「何事にて候ぞ。

ワキ「八島にて景清の御高名の樣が聞しめされたきよし仰せられ候。そと御物語あつて聞かせ申させ候へ。

シテ「是は何とやらん似合はぬ所望にて候へども、これまではるばる來りたる心ざし、あまりに不便に候ほどに、語つて聞かせ申し候べし。此の物語過ぎ候はば、かの者をやがて故鄕へ歸して給はり候へ。

ワキ「心得申し候。御物語すぎ候はば、やがて歸し申さうずるにて候。」

シテカタリ「いで其の頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船、源氏は陸、兩陣を海岸に張つて、たがひに勝負を決せんと欲す。能登守教經のたまふやう、去年播磨の室山備中の水島、鵜越に至るまで、一度も味方の利なかりし事、ひとへに義經が謀いみじきに依つてなり。いかにもして九郎を討たん謀こそ有らまほしけれと宣へば、景清心に思ふやう、判官なればとて、鬼神にてもあらばこそ、命を捨てば安かりなんと思ひ、教經に最後の暇乞ひ、陸にあがれば源氏の兵、餘すまじとて駈向かふ。地「景清是を見て、物々しやと夕月影に、打物ひらめかいて切つてかゝれば、こらへずして、及向かひたる兵は、四方へばつとぞ逃げにける。遁さじと、シテ「さもうしや方々よ。地「源平たがひに見る目も恥づかし。一人を留

めん事は案の打物、小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍、惡七兵衞景清と、名のりかけ名のりかけ、手取にせんとて追うて行く。三保の谷が着たりける、冑の鍬を取りはづし取りはづし、二三度逃げのびたれども、思ふ敵なれば遁さじと、飛びかゝり冑をおつとり、えいやと引くほどに、鍬は切れて此方に留れば、主は先へ逃げのびぬ。遙かに隔てて立歸り、さるにても汝おそろしや、腕の强さと言ひければ、景清は三保の谷が頸の骨こそ强けれと、笑ひて左右へ退きにける。

キリ地「昔忘れぬ物がたり、衰へはてて心さへ、亂れけるぞや恥づかしや。此の世はとても幾ほどの、命のつらさ末近し。はや立歸り亡き跡を弔ひ給へ。盲目の暗き所の燈、あしき道橋と賴むべし。さらばよ、留る行くぞとの、唯一聲を聞きのこす、これぞ親子の形見なる。（謠曲）

小宮豐隆
慶應義塾大學講師。

二二　能樂の面

小宮豐隆

能樂の面には表情が無いと、誰か云つてゐた樣に記憶する。それが色々な角度で光線を受ける事から、始めて色々な表情が生れて來るのだとも云つてあつた樣である。色々な角度で光線を受ける事から能面の表情が色々に變化する事は、私も認めてゐる。併し能面の本來に表情が無いといふ說は、遽かに首肯する事が出來ない。

表情といふ事を、箇々の現實的の、瞬間的の、變化的の感情の現れと解釋する時は、多くの能面はそれを缺いてゐるかも知れない。併し、一つの性格の根本相の現れとしての表情なら、能面は確かに表情を持つてゐる。換言すれば、人間の持つてゐる表情の內から一切の箇々的なもの、現實的なもの、瞬間的なもの、變化的な

ものを出來るだけ捨象して、不變的な人間全體の特徵を一口で擧示する事の出來る樣なものだけを殘してあるのが、能面本來の表情である。此の不變的な、根本的なものが捕まへられてゐなかつたら、いくら色々な角度で光線を受けても、あの樣に稻妻の閃く樣な鋭い活々した表情は現れては來ない筈である。人間の顏には箇々的なもの、現實的なもの、其の他さういふものが餘りに多過ぎる。併し人間の顏に厚化粧を施すと、今度は其の不變的なもの迄が蔽はれさうな結果になる。能面の長所は二つのものの取捨が其の宜しきを得た點に存するのだと思ふ。さうして此の能面の特徵は、能樂の特徵と機微に繫がる所がある樣な氣がする。此の方面を掘りつゞけて能樂の根本義に掘當てようとする事も、屹度意義のある事に相違ない。

併し、懷疑者の立場に立てば、能樂師若しくは能樂の型の創造

者、若しくは面師が、能面の此の驚くべき機能を、我々が翫賞する様に、藝術的に細緻に翫賞して、能面の上に落ちる光線の角度を色々に研究して見た結果、今ある様な型を作り上げたものであるかどうか、是は遽かに定めがたい問題である。昔の人で能面をかういふ方面から研究してゐた人があるかも知れない。かういふ方面から研究してゐない迄も、能面一般に就いて書いたものがあるとしたら、それを讀んで見ても、多少は其の邊の消息を明かにする事が出來るだらう。併し、一方から云へば、そんな事はどうでもよいのである。既に我々に能面が不可思議な藝術的機能を示してゐる以上、能樂師若しくは面師が、當時それを意圖した、しないに論なく、我々は我

清景（作白洞）

我の心の上に投げられた印象を探つて、其の不可思議な働の源を討ね上げさへすれば、それでよいのである。

角度といふ事を考へる時、私はいつでもさう思ふ。一體面師は何の角度からの光線を基礎として面を作つたものであるかと。是は彫刻に對しても始終私の考へる事である。彫刻家は或角度から來る光線で、換言すれば、其の彫刻を特に或角度から見て貰ひたいに違ない。尤も彫刻の場合には、大抵我々は其の周圍を一周する事が出來る。即ち我我は、あらゆる角度から其の彫刻を眺める事が出來る。隨つて我我には彫刻家が基礎とした角度から、其の彫刻が最も完全な美しさを發揮する角度から、それを眺める事が可能である。併し能

節木增（作彌阿增）

金春
謡曲の一派。金春氏信の創始。

面の場合は、一つの能樂と一人の能樂師とが許す範圍の角度に於てしか、それを眺める事が出來ない。而も我々が占めた見所の位置によつても、我々の眺め方に甚だしい制限を受ける。面師の基礎角度の定め方によつては、或人に訴へる表情と他の或人に訴へる表情との間には、著しい相違が生ずる。此の相違は或場合には其の能全體の感じに大きな影響を及さないでは措かない。

何故私はこんな事を云ひ出すのか。それはいつだつたか、金春の能で見た熊野の面が、私の心に矛盾した表情を印したからである。あの面は何といふ面なのか、私は知らない。あれは熊野だけに限つて用ひられる面であるかどうか、それも私は知らない。唯私は、熊野が少し俯向き加減にして老母の文を讀上げてゐる所を見て、何となく淋しい、併し非常に艶な趣もあつて、如何にも熊野らしい、熊野に獨得らしい面だと思つたのである。暫くして熊

野は立上り、前へ進んで、眞面（まとも）に此方に顏を向けた。見ると少し口をあいてゐる。さうして唇の兩端に妙な陰が翳してゐる。同じく艶ではあつても、其處には何處やらに皮肉な彩りが浮かんでゐる。面の地の淡蒼いのが淋しいばかりでなくて、妙に凄味をさへ帶びてゐるのである。私には此の發見が頗る意外であつた。

艶と淋しさとは、其のまゝで熊野獨得の表情であり得る。併し皮肉や凄味は、あの能を現代的に、又自然主義的に飜譯しないかぎり、熊野の面としてはどうしても相應しない。卽ち此處では矛盾する二つの表情が、何の必然もなしに、時を隔てて屢〻交替するのである。是は、或は例へば「道成寺」の樣なものにのみ用ひられる筈の面なのかも知れない。又是が「熊野」にのみ限られた面であると假定すれば、其の氣で作つた面師の基礎とした角度は、老母の文を讀上げる時の樣な、少し俯向き加減の角度であつたと想像

されない事もない。さういふ基礎角度の下に作られたものとして見る時は、此の面は熊野の面として確かに傑作である。

併し、かういふ風に考へる事は、或は無理であるかも知れない。又想像に過ぎた事かも知れない。多くの彫刻家が題名を貼りつける正面からの角度を、漠然と基礎角度として彫刻する様に、それよりももつと漠然と、昔の面師は大抵正面を眞面に見込んだ時の顔を自分の頭の中に置いて、それを考へながら製作して行つたものかも知れない。さう考へるのが一番自然な様でもある。

併し、此の見地から云へば、此の熊野の面は選擇が悪かつたか、或は製作が拙かつたかといふ事になる。

名人は知らなくても感ずる。角度といふ言葉は知らなくても、感じで自然に此の問題を解決してゐないとは斷言出來ない。

（傳統藝術）

二三　新古今集抄

題しらず　　俊惠法師

春といへば霞みにけりなきのふまで浪間に見えし淡路しま山

晩霞といふことを　　後德大寺左大臣

なごの海の霞の間よりながむれば入日をあらふ沖つしら浪

攝政太政大臣家百首歌會に春曙といふ心をよみ侍りける　　藤原家隆朝臣

かすみ立つすゑの松山はる〳〵と浪にはなるゝよこ雲のそら

花の歌とてよみ侍りける　　西行法師

吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ

五月雨のこゝろを　藤原定家朝臣

玉ぼこの道ゆく人のことづても絶えてほどふる五月雨のそら

夏月をよめる　従三位頼政

庭の面はまだかわかぬにゆふ立の空さりげなく澄める月かな

水無瀬にて十首歌奉りし時　左衛門督通光

むさし野やゆけども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ

五十首歌奉りし時　摂政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見る

かな

擣衣の心を　藤原雅經

みよし野の山のあき風さよふけてふる里さむく衣うつなり

春日社歌會に曉月といふ事を　右衛門督通具

霜こほる袖にも影はのこりけり露よりなれしありあけの月

守覺法親王の家に五十首歌詠ませ侍りけるに、旅の歌　皇太后宮大夫俊成

夏かりの蘆のかりねもあはれなり玉江の月のあけがたの空

旅の心を　有家朝臣

ふしわびぬ篠の小ささのかり枕はかなの露やひと夜ば

かりに

五十首歌召しし時　慈圓

秋をへて月をながむる身となれり五十路の闇もなに歎くらむ

眺望の心を　寂蓮法師

和歌の浦を松の葉ごしにながむれば梢によする蜑のつりぶね

崇德院に百首歌奉りし時　藤原清輔

うす霧のまがきの花の朝じめり秋はゆふべとたれかいひけむ

千五百番歌合に　正三位季能

さ夜ちどり聲こそ近くなるみがたかたむく月に汐やみつらむ

帝　順德天皇。
春宮　仲恭天皇。
御兄の院　土御門天皇。
父みかど　後鳥羽天皇。
家實　近衛基通の子。
道家　藤原良經の子。あづまの若君　藤原賴經。當時將軍として鎌倉に在り。
院　後鳥羽天皇。

二四　新島守

承久三年四月二十日、帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號のさだめありて、今下りさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院をば中院と申し、父みかどをば本院とぞきこえさする。このほどは、家實のおとゞ、關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家のおとゞ、攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても院のおぼしかまふること、忍ぶとすれど、やう〳〵漏れきこえて、東ざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふものあり。かつ〴〵彼を御かうじのよし仰せられければ、身方にまゐるつは者どもおし寄せたるに、遁

るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ、院はおぼし召しける。

あづまにも、いみじうあわてさわぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりなむ時には、かなきさまにて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都にまゐらすることは、思ふ所多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろを見えなむには、親の顔また見るべからず。今を限と思へ。賤しけれども義時、君の御ためにうしろめたき心やはある。されば横ざまの死にをせむことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄・箱根山

は越ゆべし。」など、泣く〳〵いひきかす。まことにしかなり、また親の顔拝まむこともいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今やかぎりと、あはれに心細げなり。

かくてうち出でぬる又の日、思ひかけぬほどに、泰時たゞひとり、鞭をあげて馳せきたり。父、胸うち騒ぎて、「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう、大かたの掟などは、仰のごとくその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の厳重なることも侍らむに参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一事をたづね申さむとて、ひとり馳歸り侍りき。」といふ。義時、ことばかりうち案じて、「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向かひて弓をひくことはいかゞあらむ。さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。さ

公經　藤原氏。西園寺家の祖。

故大將　頼朝をいふ。

義朝┬頼朝
　　└女（能保室）─女（公經室）

はあらで、君は都におはしましながら軍兵を給はせば、命を捨て
て千人が一人になるまでも戰ふべし」といひも果てぬに、急ぎ立
ちにけり。

都にもおぼしまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、
宇治・勢多の橋も引かせて、敵を防ぐべき用意心ことなり。公經の
大將ひとりのみ、御うまごのこともさる事にて、北の方一條中納
言能保といふ人の娘なり。その母北の方は、故大將のはらからな
れば、一方ならず、あづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の
御心の輕き事とあぶながり給ふ。中院は、あかで位をすべり給ひ
しより、言に出でてこそ物し給はねど、世のいと心やましきまゝ
に、かやうの御騒にも、殊にまじらひ給はざめり。新院は同じ御心
にて、よろづ軍の事なども捉て仰せられけり。

いつの年よりも、五月雨はれ間なくて、富士川・天龍など、えもい

はず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻めのぼ
る武士どもも、あやしくなやめり。かゝれども、遂に都に近づくよ
しきこゆれば、君の御武夫も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇
治・勢多へ分ちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉もお
よばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ち
くだり、すべて安げなく騒ぎ滿ちたり。いかゞあらむと、君も御心
亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、誠のきはになり
ぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまどもたのもしげ
なし。六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂にみかた
のいくさ敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時
房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞ當
り惑ふ。

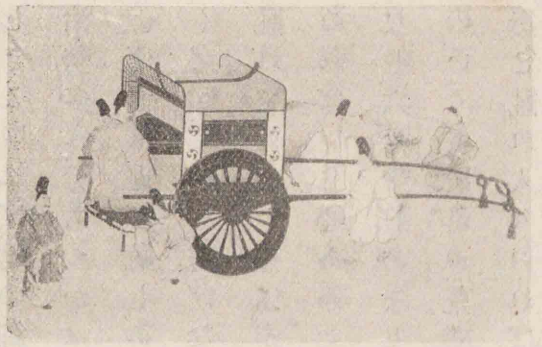
あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひ

鳥羽殿
山城國紀伊郡鳥羽の城南の離宮。

ものにもがなや
とりかへす物にもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ。（源氏物語、河海抄）

信實
藤原氏。似繪の名手。

おきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしときこゆれば、女院・宮々、所々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」とおぼさるゝもかひなし。その日、やがて御ぐしおろす。御年、四そぢに一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫しかゝせらる。七條院に奉らせ給はむとなり。かくて、同じき十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじういかなりけ



網代車

津の國の云々
津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重葺。（和泉式部後拾遺集）

る代々の報にかと恨めし。

六つにて位に卽き給ひて、十三年おはしましき、おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして、萬機のまつりごとを御心一つにをさめ、百の官をしたがへ給へりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりもまされる御ありさまにて、遠きをあはれみ、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなきまつりごとをきこしめすにも、難波のあしの亂れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松も、やうゝ枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞のほらの御すまひ、幾春を經ても、そらゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ちわかれ、おのがちりゝにさすらへ、磯の苫屋に軒を

ならべて、おのづからこと問ふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽燒く烟のなびくかたをも、わがふる里のしるべかとばかり、ながめ過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まして何時をはてとか、廻り逢ふべき限だになく、雲の涙、烟の涙の、幾重とも知らぬ境に、世を過し給ふべき御さまども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里遠き島の中なり。海づらより、は少し引入りて、山かげに片添へて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に、あし葺ける廊などけしきばかりこそぎたり。まことに柴のいほりの只しばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも、夢のやうになむ。遙々と見やら

柴の庵の云々
いづくにも住まれずばたゞすまであらむ柴の庵のしばしなる世に。（西行法師、新古今集）

る、海の眺望、二千里の外ものこりなき心ちする、今更めきたり。

汐風のいとこちたく吹きくるをきこしめして、

われこそは新島守よおきの海のあらきなみ風こゝろして吹け

同じ世にまたすみの江の月や見むけふこそよそにおきの島守

（增鏡）

水無瀬殿
本院の造られし殿にて、攝津國三島郡島本村廣瀬にあり。
二千里の外云々
三五夜中新月色、二千里外故人心。（白氏文集）

○

おはすべきところは、行平の中納言の、もしほたれつゝ侘びける家居近き邊なりけり。海面はやゝ入りて、あはれに心すごげなる山中なり。垣の樣より初めて珍らかに見給ふ。茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり。所につけたる御住居、樣變りて、かゝる折ならずば、をかしうもありなましと、昔の御心のすさび思し出づ。

（源氏物語、須磨の卷）

七月
文治元年。
綠衣監使云々
紅顏暗老白髮新、綠衣監使守宮門。（白氏文集）

女院
建禮門院。高倉天皇の中宮。

二五　大原御幸

去んぬる七月九日の大地震に、築地もくづれ、荒れたる御所も傾き破れて、いとゞ住ませ給ふべき御たよりもなし。綠衣の監使宮門を守るだにもなし。心のまゝに荒れたる籬は繁き野べよりも露けく、折知り顏に、いつしか蟲の聲々恨むるもあはれなり。さるまゝには、夜もやう〳〵長くなれば、いとゞ御寢覺がちにてあかしかねさせ給ひけり。盡きせぬ御物思に、秋のあはれさへうち添ひて、いとゞ忍びがたうぞ思召されける。何事もみな變りはてぬる憂き世なれば、おのづから情をかけ奉るべき昔の草のゆかりも、みな枯れはてて、誰ばぐくみ奉るべしとも覺えず。冷泉大納言隆房卿の北の方、七條修理大夫信隆卿の北の方より、忍びつゝ、常はこと問ひ申されけり。女院「そのむかし、あの人どものはぐく

うきこと聞かぬ云々
しをりせでなほ山深くわけ入らむ憂き事きかぬ所ありやと。（西行法師、新古今集）

寂光院
山城國愛宕郡大原村大字草生にあり。天台宗延曆寺の別所。

山里は云々
山里は物の淋しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり。（讀人不知、古今集）

みにてあるべしとは、露も思召しよらざりしものを。」とて、御涙を流させ給ひければ、附きまゐらせたる女房達も、皆袖をぞ濡らされける。

この御住居もなほ都近くて、玉鉾の道行き人の人目も繁ければ、露の御命の風を待たむほどゞ、うきこと聞かぬ深き山の奥の奥へも入りなばやとは思召されけれども、さるべき便りもましまさず。或女房の吉田に參りて申しけるは、「これより北、大原山の奥寂光院と申す所こそ靜かに候へ。」とぞ申しける。女院、山里はもののさびしき事こそあんなれども、世の憂きよりは住みよかんなるものをとて、思召し立たせ給ひけり。御輿などをば信隆・隆房の北の方より御沙汰ありけるとかや。

文治元年長月の末に、かの寂光院へ入らせおはします。道すがらも、四方の梢の色々なるを御覽じ過ぎさせ給ふほどに、山かげ

先帝 安德天皇。

なればにや、日もやう〳〵暮れかゝりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、わくる草葉の露茂み、いとゞ御袖濡れまさり、嵐烈しく、木の葉亂りがはし。空かき曇り、いつしかうちしぐれつゝ、鹿の音かすかにおとづれて、蟲のうらみもたえ〴〵なり。とにかくに取りあつめたる御心細さ、たとへやるべき方もなし。浦づたひ、島づたひせしかども、さすがかくはなかりしものをと思召すこそ悲しけれ。岩に苔蒸して寂びたる處なれば、住まほしくぞ思召す。露結ぶ庭の荻原霜枯れて、籬の菊の枯れ〴〵にうつろふ色を御覽じても、御身の上とや思しけむ、佛の御前にまゐらせ給ひて、「天子聖靈、成等正覺、一門亡魂、頓證菩提。」と祈り申させ給ひけり。いつの世にも忘れがたきは、先帝の御面影、ひしと御身に添ひて、いかならむ世にも、忘るべしとも思召さず。

さて寂光院の傍に、方丈なる御庵室を結びて、一間をば佛所に

大納言の佐の局 平重衡の室。

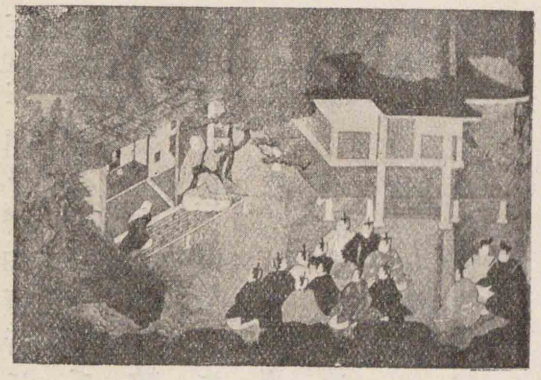
定め、一間をば御寢所にしつらひ、晝夜朝夕の御勤、長時不斷の御念佛懈ることなくして、月日を送らせ給ひけり。かくて神無月、中の五日の暮方に、庭に散りしく楢の葉を、物踏みならして聞えければ、女院「世を厭ふ所に、何者の訪ひ來るやらむ。あれ見よや。忍ぶべきものならば、急ぎ忍ばむ。」とて見せらるゝに、小鹿の通るにてぞありける。女院「さて、いかにやいかに。」と仰せければ、大納言の佐の局涙をおさへて、

岩根ふみたれかは訪はむ楢の葉のそよぐは鹿のわたるなりけり

女院、この歌あまりにあはれに思召して、窓の小障子に遊ばしこがめさせおはします。かゝる御つれ〴〵の中にも、思召しなぞらふ事どもは、つらき中にもあまたあり。軒にならべる植木をば、七重寶樹とかたどり、岩間につもる水をば、八功德水と思召す。無

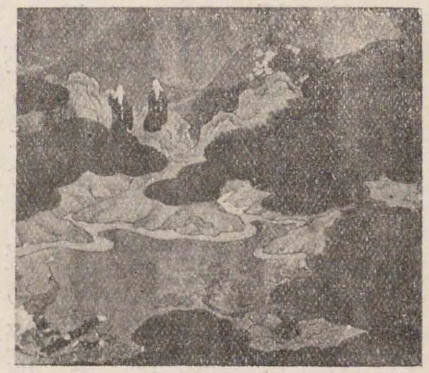
法皇
後白河法皇。

常は春の花、風に隨つて散り易く、有涯は秋の月、雲に伴つてかくれ易し。承陽殿に花を忍びし朝には、風來つて薫を散じ、長秋宮に月を詠ぜし夕には、雲蔽ひて光を隱す。昔は玉樓金殿に錦のしとねを敷き、妙なりし御住居なりしかども、今は柴ひき結ぶ草の庵、よその袂もしをれけり。



大原御行繪卷

かゝりしほどに、法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居、御覽ぜまほしう思召されけれども、二月・彌生のほどは、嵐烈しう、餘寒もいまだ盡きず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ、夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇、夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。しのびの御



（寂光院什物）

幸なりけれども、供奉の人々には、德大寺・花山院・土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるゝ。頃は卯月二十日あまりのことなれば、夏草の茂みが末をわけ入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたるほども思召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一宇の御堂あり。卽ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水・木立よしあるさまの所なり。甍破れては霧不斷の香をたき、扉落ちては月常住の燈をかゝぐ。こは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、

錦を晒すかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遅櫻、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽あつて、かうぞ遊ばされける。

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

舊りにける巖の絶間より、落來る水の音さへゆゑびよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも、筆も及び難し。さて、女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、朝顔這ひかゝり、しのぶまじりの忘草、「瓢簞しば〳〵空し、草顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。杉のふきめもまばらにて、時雨も、霜も、おく露も、洩る月影にあらそひて、溜るべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世にたえぬ身のな

瓢簞しば〳〵云云

瓢簞屢〻空シ、草滋ク顔淵之巷ニ。藜藿深鎖セリ、雨濕ス原憲之樞ヲ。（橘直幹、和漢朗詠集）

らひとて、憂き節しげき竹柱、都の方のことづては、間遠に結へるませ垣や、わづかに言問ふものとては、峰に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらがおとづれならでは、まさきのかづら、青つゞら、くる人まれなる處なり。

法皇、「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。やゝあつて、老い衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ、花つみにいらせ給ひて候。」と申す。「さこそ世をいとふ御ならひとはいひながら、さやうの事に仕へ奉る人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませ給ひ候べき。」とぞ申しける。この尼のありさまを御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ着たりけ

五戒
殺生・偸盜・邪淫・妄語・飲酒。

十善
不殺生・不偸盜・不貪欲・不愚痴・不邪淫・不妄語・不綺語・不惡口・不兩舌・不嗔恚。

る。あのありさまにても、かやうのことを申す不思議さよとおぼしめして、「そも〳〵汝はいかなるものぞ。」と仰せければ、この尼、さめ〴〵と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝあつて、涙をおさへて、「申すにつけて、憚おぼえ候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。」とて、袖を顏に押しあてて、忍びあへぬさま、目もあてられず。法皇、「げにも、汝は阿波の内侍にてあるござんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、おの〳〵感じあはれける。

三尊
彌陀・觀音・勢至。
善導和尚
支那の隋代の名僧。
八軸の妙文
法華經をいふ。
九帖の御書
善導和尚の觀無量壽經の疏。
定基法師
法名寂昭。長保六年入唐す。

さて、かなたこなたを叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかかりつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見え分かず。さて、女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、ならびに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝のにほひに引きかへて、香の煙ぞたち上る。障子には諸經の要文ども、色紙に書いてところ〴〵におされたり。その中に、大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけむ、「笙歌はるかに聞ゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前。」とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌とおぼしくて、

思ひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよそに見むとは

さて、傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙のふすまなど懸けられたり。さしも本朝・漢土の妙なるたぐひ數をつくし、綾羅錦繡のよそほひも、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りしことども、今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。

やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、「あれはいかなるものぞ。」と仰せければ、老尼涙をおさへて、「花筐臂にかけ、岩つつじ取具して持たせ給ひて候は、女院にてわたらせ給ひ候。爪木に薇折りそへて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局。」と申しもあへず泣きにけり。法皇、御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、皆袖をぞ濡らされける。

女院は世をいとふ御ならひといひながら、今かゝる有樣を見え參らせむずらむ恥づかしさよ。消えも失せばやと思召せども、かひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起の袖の上、山路の露もしげくして、絞りやかねさせ給ひけむ。山へも歸らせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし〳〵たるところに、內侍の局參りつゝ、花筐をば賜はりけり。

「世をいとふ御ならひ、何か苦しう候べき。はや〳〵御見參あつて還御なしまゐらせ候へ。」と申されければ、女院御涙をおさへて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には、攝取の光明を期し、十念の柴のとぼそには、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、おもひのほかの御幸かなとて、御見參ありけり。（平家物語）

二六　古今集抄

春立ちける日よめる　紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　大江千里

鶯のたにより出づる聲なくば春くることをたれかしらまし

題しらず　讀人知らず

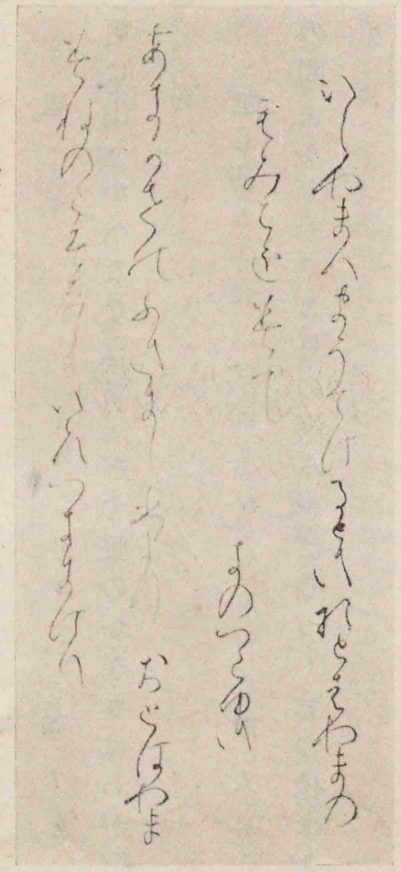
春日野のとぶひの野守出でて見よ今いくかありて若菜つみてむ

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどり絲よりかけてしら露をたまにもぬける春の柳か

櫻の花の散るをよめる　紀友則

久方のひかりのどけき春の日にしづごころなく花のちるらむ



紀貫之筆蹟

春の歌とてよめる　素性

思ふどち春の山べに打群れてそこともいはぬ旅寢してしが

題しらず　　讀人知らず

我がやどのいけの藤なみさきにけり山郭公いつか來なかむ

題しらず　　讀人知らず

今更に山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりはわが宿になけ

題しらず　　讀人知らず

木の間よりもりくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり

是貞のみこの家の歌合の歌　　壬生忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなく音にめをさましつゝ

題しらず　　讀人知らず

龍田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦中やたえなむ

年のはてによめる　　春道列樹

きのふこいひけふとくらして飛鳥川流れてはやき月日なりけり

病してよわくなりけるとき詠める　　在原業平朝臣

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

越の國にまかりける人によみてつかはしける　　凡河内躬恒

よそにのみこひやわたらむ白山のゆきみるべくもあらぬわが身は

和辻哲郎
京都帝國大學
助教授。

二七　古代の信仰

和辻哲郎

未開人といふ言葉には侮蔑の意味が含まれてゐる。隨つてその信仰をも一段低いものとして輕視する傾向がある。併し未開人は、その「未だ開けざる」幼稚な文化なるに拘らず、少くとも神祕に對する感覺に於て、我々よりも遙かに勝れた、我々の羨むべき一つの能力を持つてゐはしないか。

それは彼等の新鮮な驚歎の感情である。我々は厚い知識の殼に煩はされて、既に少年の頃からこの心を鈍らした。我々を取捲く無限に深い生の神祕も、日常の我々にとつては何等の力をも持たない。併し彼等は、結婚・出産・播種・收穫・狩獵・爭鬪・旅行・葬儀といふ如き彼等の全生活を通じて、その小兒の如き驚歎の感情を失はなかつた。その知識の幼稚は彼等をさま〴〵の誤謬に陷れた

が、併し知識によつて神祕感を鈍らせる危險からは救はれた。かくて彼等は科學の進歩した今日に於ても、依然として不可知であるところの神祕の世界に對して、極めて潑剌たる心の戰きを持續けてゐるのである。その經驗の內容は我々にとつて珍らしいものではないであらう。併しそれを經驗する心の態度、情熱の强さに於ては、未開人は遙かに我々よりも正しく、我々よりも優れてゐると云はなくてはならぬ。

驚歎の心を鈍らせたものは宗教から遠ざかる。我々の時代は宗教なき時代である。科學の勝利が齎した迷信の打破は、同時に驚歎の撲滅を意味し、隨つてまた宗教の撲滅をも意味した。迷信の打破によつて信仰を精練し、驚歎を高め、宗教を深めるといふことは、科學の爲すべくして爲し得ざるところであつた。この時代に比べると、未開の時代は、その新鮮な驚歎の感情に富めるが

故に、遙かに強く宗教的である。—迷信的であると云つてもよい。—未開人は不可知なる力が彼等に働きかけることを切實に感ずる。彼等はその力が何であるかを知らない。その力についての概念をも造らない。併しその力は彼等にとつて現實である。彼等の日常生活はその力に取捲かれてゐる。隨つてその力に逆はず、その力に守られんがために、さま〴〵の儀式、卽ち最も原始的な宗教の形式は、彼等の生活のあらゆる場合に附纏ふのである。

我が上代人も、亦此の如く宗教的であつた。彼等は石や木や水にさへも生きた力を感ずる程に、あらゆる物に於て不可知なる力をば感じた。が、我々の考察する時代に於ては、彼等は既にそれをたゞ魔物としてのみならず、また人間の運命を支配する神祕的な力として、或は意志・感情を有する超人的な存在として感じ得る程度に達してゐた。

不可知なる力に對する驚歎が魔物に對する怖ぢとなつて現れるのは、未開人の信仰として最も古い。彼等は魔物の力を防ぐために人類學者の所謂タブー・マジック等の儀式を發明する。タブーとは物忌である。死者及びその一族に近よらない。喪屋を立てる。產婦に近よらない。產屋を立てる。これらの上代の風俗は、それが破られた時に、そこに悲劇が起らなければならない程の重大な意義を持つた。伊弉諾尊が妻の屍に對して「近づくな」の禁を破つたために、人間の死が始つたといふ話、或は火照命が妻の產時に「見るな」の禁を破つたために、海陸の交通の絕えた話の如きがそれを證する。この風習も、もとは死や出產に於て感ぜられる生の神祕が、驚歎し易い心に宗教的な昂奮を起させたのに基づくのである。死は我々にとつて不思議であるよりも、更に深く彼等にとつて不思議であつた。その不思議な死者に近づくことによ

つて、若しその病菌に傳染することがあれば、それは彼等にとつて不思議な魔物の作用であつた。出産もまた新しい生を産み出すといふ不思議さに於て、死の不思議に劣らなかつた。殊に産時に於ける産婦の異常な生理的及び心理的狀態、新生兒の注意深く扱はるべき弱さなどは、自然人の心に強い恐怖を喚起した。この際起り得べきあらゆる災厄は、すべて魔物の作用である。産室は魔物に取捲かれてゐる。産室の靜穩は極度に保たれなくてはならない。かくして神祕に對する驚歎の感情は生理的必要をも總べて神祕化した。さうしてそこに神聖なる儀式を作つた。

マジックとは魔物を追祓ふ儀式である。止むを得ずして死者に近づいたものは、葬送の後に水に入つて「みそぎ」をする。或は「ぬさ」をとつて諸の罪を祓ふ。また死者がなほ葬られない時には、親族以外のものが集つて飲酒し、歌舞する。これらもまた明かに伊

弉諾尊の禊、息長帶姫の大祓、天の岩戸の神樂などに於て神話化されてゐる。卽ちそれは神話化されるほどの重大な風習である。この儀式もその起源は神祕に對する驚歎の感情に基づいてゐる。彼等は神祕なる出來事の無限の深さを恐れ、そこに人間の隙を窺ふさまざまの魔物を感じた。さうしてそれを逐ひはらふために、本能的な確かさを以て、最も合理的な方法を擇んだ。死者に近づいたものが水を以て全身を洗ふのは、病毒に對する正しい防禦である。また穢れのために心理的な弱味を持つたものが、大祓によつて心理的健康を回復することも、同じく正しい病毒の防禦である。更に死者を前にして歌舞することは、歌舞に伴ふ生理的及び心理的の興奮によつて、恐怖を拂ひ、心的强健を維持し、病毒に對する抵抗力を失はせないといふ結果を生む。これは極めて自然的な衞生法である。併し彼等はそれを宗教的な意識に

魏志　魏書百四十四卷の中。

よつて、神聖な儀式として行つた。若し此のために災厄を避け得たとすれば、それは彼等にとつてマジックが魔物を鎭めたことを意味するのである。

タブーやマジックは魔物に對して人間を保護する。併し人間の運命には、此の種の儀式が如何ともすることの出來ない深潭がある。こゝに於て彼等は極めて漠然と運命を支配する神祕な力を感じた。さうしてその力への服從を太占（ふとまに）といふ形式で現した。魏志の記すところによると、何らかの事を起す場合に迷があれば、骨を灼いて卜し、吉凶を占ふのである。こゝに運命の力に對する人間の無力の自覺がある。隨つて太占に現れたところの決斷は、神祕な力の顯現として、絶對に神聖な權威を持つた。この太占は神話の初に明かに現れてゐる。また神の祭祀に關する歷史的諸傳說に於て、特に著しく現れてゐる。併し伊弉諾尊の太占が

單純な占卜であるのに反して、歷史的諸傳說のそれは屢〻夢の告、或は神憑りと結びついてゐる。卽ち或特定の神の意志が太占に現れるに至つたのである。この太占の變化は、運命を支配する力が漠然たる神祕力から意志感情を有する超人的存在へと進步したことを語るものであらう。（日本古代文化）

○

土居光知

記紀には絶對に自由な唯一の意志があつて、それは天照大神の神勅に表現されてゐるのである。國土と神々とを生んだ伊邪那岐・伊邪那美命も、國土を經營した須佐之男・大國主命も皆この唯一なる意志實現の準備者にすぎぬ。代々の天皇はこの意志實現の後繼者であらせられる。この犯すべからざる意志に反抗するものは、神でも人でも、太陽の前の霜の如くに消えてゆかねばならなかつた。（日本文學の展開）

金子筑水
名は馬治。文學博士。早稲田大學教授。

オリムピヤ
ギリシヤのモレア半島にあり。ギリシヤの諸神を祀れる聖地。Olympia

二八　希臘思潮

金子筑水

ギリシヤ人が如何に自然の生活を尊重し享樂したかは、彼のオリムピヤの祭禮を始として、人類生活の善美を祝福する祭典をば、彼等の最も重要な年中行事の一とした事實でも明白である。無數の祭典そのものが、人類生活の幸福を祈つたものであるばかりでなく、祭典に伴ふ各種の儀式や會合や競技や遊戯は、悉く人類の自然生活を肯定し、祝福するものに外ならなかつた。殊にギリシヤ人が如何に自然を尊んだかは、精神的方面の發達と併せて、最も深く肉體そのものの美を尊重したことによつても明白である。すべてに於て若々しかつたギリシヤ人に取つては、靈肉は其の儘一體であつて、今日の如く其の間に分離や矛盾は感ぜられなかつた。隨つて感性的歡樂は彼等に取つて何等賤し

ソクラテス
ギリシヤの哲學者。Socrates

プラトーン
ギリシヤの哲學者。Platon

ペリクレス
ギリシヤの政治家。Peric'es

いもの、不德なものでなく、寧ろ之を享樂することが本然の生活と考へられたのである。勿論ソクラテスは節制主義の元祖であり、其の學派には有名な禁欲主義者が續出し、又プラトーンの如きも明かに一種の悲觀的傾向を示したことは拒まれない。併し此等はギリシヤ全盛期に起つた現象ではなく、孰れかといへば全盛期以後のギリシヤ末期に屬した現象と見られる。西紀前約第五世紀、著名な政治家ペリクレス時代――普通に所謂ギリシヤの全盛時代――までの傾向に就いて言へば、ギリシヤ生活はどこまでも荒々しく華々しい樂天的生活であつた。節制主義は單に過度な耽溺を戒める教訓であつて、決して現實生活否定の意味は持たなかつた。ギリシヤ人が如何に自然生活を尊重したかは、彼等の人生觀が大體に於て如何に現實的であり、又如何に樂天的であつたかによつて見ても明白である。ギリシヤ人は神々が

直接現世を支配して、人生全體の上に、善は愈〻榮え、惡は愈〻衰へるといふ正義が行はれてゐると深く確信した。卽ち現世は飽くまで神々に支配されてゐる美しい貴い正義の行はれる王國と考へられた。未來世とか罪惡とかいふやうなことは、ギリシヤ人には最も緣遠い思想であつた。現實の美しい生活を樂むといふ事が、どこまでも彼等の目的であつた。

ギリシヤ思想が自然的現實であつた事と聯關して、特に玆に注意さるべきは、彼等の生活及び思想全體が極めて自由であつて、何等不自然な束縛を受けなかつたことである。古代文明國、例へばインド又はエジプト等には、嚴格な階級制度が存して、生活も全然制限され束縛されたものであつたに反して、ギリシヤには最初からかゝる制度がなかつた。それはギリシヤ人の根本傾向が他から束縛を受けるには餘りに强烈であり、自主的であり、

獨立的であつたが爲であると言はれる。ギリシヤといふ小さな國に、多數獨立の自由な部分が發達した事でも、此の根本傾向は明白に證明されてゐる。卽ち思想上何等不自然な束縛がなく、飽くまで自由獨立の精神に富んだのがギリシヤ人の眞面目であつた。すべて自由がある所には進步があり、創造がある。否進步や創造はひとり自由が存する所にのみ存する。歷史上新制度や新思想を產出した民族は必ずしも少くないが、ギリシヤ人ほど限ない新見と創意とに富んだ民族は他に類例を求め難い。ギリシヤ文明史は、眞に新生活・新制度・新思想創造の歷史であつたとも見られる。極言すれば、近代生活に於て見出されるあらゆる制度・文物・思想・感情は、悉く之をギリシヤ文明史中に發見することが出來る。快活な自由な不羈獨立の傾向はどこまでもギリシヤ人の特徵であつた。

ホーマー Homer ギリシヤの詩聖。

イリヤッド・オヂッセー Iliad, Odyssey ギリシヤ文學最古の記念として珍重せらるゝ二大叙事詩。

ヘシオッド Hesiod ホーマーに次ぎて最も古きギリシヤの詩人。

併しながらギリシヤ思想の根本特徴はと云へば、それは藝術的であるといふのが、從來殆どすべての批評家によつて異口同音に主張された解釋である。實際ギリシヤ民族が最も卓越した意味に於て藝術的であつた事は、到底否定されない事實である。畢竟ギリシヤ民族は其の有史時代の最初から、既に卓越した藝術的才幹を備へた稀有な民族であつて、其の燦爛たる歴史は、主として藝術的才幹發展の歴史であつたとも觀察される。ホーマーの「イリヤッド」や「オヂッセー」は單にホーマーといふ一詩人の作ではなく、實はホーマー時代に至るまでの全ギリシヤ民族の藝術的發展の結果に外ならない。ギリシヤ人が如何に卓越した意味に於て藝術的であつたかは、ホーマー・ヘシオッド・エスキロス・ソフォクレス等の大詩人の輩出を始め、建築・彫刻・繪畫等あらゆる方面に亙つて、藝術上の世界的典型を後世に殘した事によ

エスキロス Aeschylus ギリシヤの詩人。

ソフォクレス Sophocles ギリシヤの詩人。

ゼウス Zeus ギリシヤの主宰神。

ガウン Gown 長上衣。

つて明白であるが、而も古代ギリシヤ民族の日常生活そのものが最も顯著な意味に於て藝術的であつたことを忘れてはならぬ。彼等の生活そのものが徹頭徹尾藝術的であつたことは、古代ギリシヤ歴史の華と見られるオリムピヤの祭禮などを想像すれば、極めておぼろげではあるが、其の一斑を推知することが出來る。例へばオリムピヤの神殿を想像すると、橄欖の木の繁つた青々した小高い森の彼方に、神々しいゼウスの神の彫像を始として、無數のオリムピヤの神々の尊い姿が見られる。神殿へ進む兩側には、綠の並木の間にさま〴〵の純白な美しい彫像が立つてゐる。ギリシヤ全國の津々浦々から集つた無數の老若男女の群は、夥しい人波を打つてオリムピヤの神殿へと進んで行く。美しい髪の毛を振亂し、白く長いガウンを着た若い少女の群は、月桂樹や橄欖の木の枝を手に手に高く捧げ、美しい花輪に飾られ

た車を引きながら、神々を讃美し、生活の美を祝福する歌を謠ひ續けて、前へ前へと進んで行く。海濱の大遊戯場には、美しい肉體美を誇るあらゆる種類の競技や遊戯が行はれて、勝利を爭ふ喊聲は實に賑々しく聞える。森の彼方の靜かな場所には、全國から集つた無數の抒情詩人や劇詩人の詩歌の競爭が行はれて、審判官や民衆は熱心に其の朗讀される詩歌に耳傾けてゐる。競技に勝つた勝利者を祝福する凱歌の聲や、各所の廣間に張られた大宴會場から聞える歡聲は、徹宵賑々しくどよめき渡つて、いつまでも歡樂の盡きるのを知らない有樣である。

此等の藝術的傾向は抑、如何なる精神的特徴から發生したか。便宜のため最も簡單に之を說明すれば、そは最も精緻微妙を極めた象徴的傾向であつたと言へよう。象徴的傾向とは、こゝでは最も廣い意味で、すべて不定なもの茫漠たるものに一定の形象

シムメトリカル Symmetrical 均齊的。
ジエオメトリカル Geometrical 幾何學的。

を與へる精神作用を意味する。換言すれば、すべて鮮明な形を造り出す所謂造形的才能である。すべての物に形を與へ、すべての物を具體化して、それをあり〳〵と鮮明に、靈活に、眼前に眺める事は一切の藝術的活動の根本で、かやうな才幹を備へた者のみが藝術的であり、藝術家たることが出來る。ギリシヤ人がすべて不定なもの、茫漠たるもの、無制限なものを嫌つた事は顯著な事實で、必ず漠然たるものにはつきりした定形を附し、無制限なものに一定の制限を與へなければ已まなかつたのが、彼等の特徴であつた。而も彼等はエジプト若しくはインドの國俗のやうに、極めて空想的な、荒唐奇怪な形を事物に與へず、寧ろ其の正反對に、最も釣合の取れた、シムメトリカルな、規律整然としたジエオメトリカルな形を與へた事も著名な事實である。後代の歐洲美術がすべて規律整然たる形を取るに至つたのは、古代ギリシヤ

藝術の精神に立脚したものであると言はなければならぬ。

又啻に規律整然たるばかりでなく、ギリシヤ人の象徴的傾向は最も精微を極めたものであつた。例へば彫像の衣服の襞の一線一點までも苟もしないといふ精緻さが其の特徴であつた。エスキロスやソフォクレス等の劇詩を見れば、後代の詩人をも瞠若たらしめるやうな、最も綿密な記述や、描寫や、觀察が全編に溢れてゐる。後代歐洲の藝術が極めて精緻な情味を備へるに至つたのは、これまたギリシヤ傳來の賜物であつたと言はなければならぬ。

ギリシヤ人は特殊の象徴的傾向を備へて、著しく藝術的であつたが、此の根本特徴は更にギリシヤ精神の別種な特質と極めて密接な關係を有つてゐる。別種の傾向とはギリシヤ精神が最も知識的であり、理論的であり、科學的であつたといふことであ

る。古來ギリシヤ人ほど知識又は智慧を尊重した民族は他になく、智慧の尊重はギリシヤ人本來の性癖であつたとも考へられる。ギリシヤ民族の特殊な主智的傾向を明かにする爲には、吾人は先づ廣く東洋の知識的傾向と全く趣を異にしてゐる西洋式知的傾向に注意しなければならない。支那・印度に於ても、古來知識は尊重されたのであるが、その所謂知識は、西洋風の精確な、組織的な、論理的な科學的知識ではなく、主として直覺的な、印象的な、詩的な知識であつた。ギリシヤ人が尊重した知識は、勿論直覺的なものを含んだに相違ないが、孰れかといへば、精緻な、確實な、系統的な科學的知識であつて、後代歐洲の科學的知識は、實にギリシヤ人の天才によつて創造されたものと言はなければならぬ。精確にして緻密な自然科學はギリシヤ人の天才によつて、始めて確實にその基礎を据ゑたのである。（歐洲思想大觀）

芳賀矢一
文學博士。國學院大學長。東京帝國大學名譽教授。

二九　上古の文學

芳賀矢一

歴代の國文學は祖先國民の思想、感情の流露せるものにして、吾人は之によりて現に祖先の言語に接し、直ちに古人の肺腑に入るを得べし。各時代には皆其の特徴を備へ、合しては日本國民の特性を印象す。國民として國文學の大要に通ぜざるべからざるは、猶國民として國史の一斑を知らざるべからざるが如し。

上古の祭祀は卽ち政治なり。故に政を訓じて「まつりごと」といふ。敬神崇祖の民族が、皇室を中心として祭祀の庭に集り、祖先の歴史を語り、祖先の勳業をしぬび、よりて以て團結せるは卽ち我が建國の體裁なり。此の時未だ文字なし。必ず口々に傳誦せられたる詩的美辭ありて、この祭祀に伴ひしならん。天照大神が天窟戸に隱れ給ひし時、天太玉命の奏せし廣く厚き稱辭（たゝへごと）は、「未だかく

の如く麗しきものあらず。」と大神の宣へりといふ。語部は卽ち之を掌れるものたり。太安麻呂が古事記を編せし時は、稗田阿禮の口誦を聽取れるなり。壽詞といひ、祝詞といふ、皆傳唱的舊辭の謂なるべし。

蓋し祝詞は天皇卽ち現神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に國家の安穩、國民の幸福を求むるを以て主眼とす。祈年祭は農作の種子を下す時、豫め今年の豐作を祈り、神嘗祭は今年の新穀を神に奉りて豐稔を謝す。又廣瀨大忌祭の祝詞には水害無からんことを祈り、龍田風神祭の祝詞には風災無からんことを祈る等、神話の農業を以てその骨髓となせるが如く、祭祀に於ても農業に留意せること最も深し。大殿祭・御門祭・道饗祭・鎭火祭・遷却祟神詞等は天皇の宮殿・玉體に異變なく、安穩長久に榮えおはせんと祈るものなり。啻に朝廷のみならず、その朝廷に仕へ奉る

百官人も亦恙なく繁榮して永く奉公し奉れと祈るものなり。これ卽ち千百の神は目にこそ見えね常に吾人の周圍にあり、禍福は一々善惡神の所行なりと信ぜし國民思想にして、後世の「福は內、鬼は外。」の思想に外ならず。大祓詞は上下の人の一切の罪惡を祓ひ淸むる祭にして、かくして年々に心を淸淨にし、その身を洗滌して公に仕へ、私を愼む。國民が現世の福祉を求め、淸淨を愛するの風は、皆祝詞の中に之を認むべく、支那・印度の文明の感化未だあらはれざる上代の國民思想は、明かに我が祝詞式の祝詞に表彰せられたりといふべし。

文辭上より祝詞を見んか。その語彙の數は甚だ多からず。「天翔(あまかけり)國翔(くにかけり)」「甘菜辛菜(あまなからな)」「常磐(ときは)に堅磐(かきは)に」「汁にも顆(かひ)にも」「聞直し見直して」「平らけく安らけく」「祓ひ給へ淸め給へ」の如く、名詞といはず、動詞といはず、對語を連用すること多し。しかも純粹の對句に非ずして、半

ばは同語若しくは同音を繰返す半對語といふべきものなり。これは單語のみならず、句に於ても亦然り。「朝には御門開き奉り、夕には御門立て奉り」「みかのへみてならべ、みかのはらみてならべ」の類是なり。對句の未だ發達せざる程度にありといはんよりも、同一音・同一語を反復するは、一方に於て單調に陷るを防ぐと同時に、又自ら莊重の風を添ふる所以なりといふべし。若し巧妙なる對句を用ひば、純朴簡古なる風は卽ち失はるべければなり。

上代の抒情詩は古事記・日本書紀に保存せられたるもの通計百八十餘首あり。多くは天皇・皇子等の作にして、歷史上に特殊なる事件と共に傳へられたるものなり。其の外風土記等に多少殘れりと雖も、一般の民謠は遂に之を知り得べからず。萬葉集に詠者の知られざる和歌、奈良朝以前の民謠に屬すべきもの多きを信ずと雖も、太古の歌にはあらず。古事記・日本書紀の編者が、殊更

に萬葉假名を用ひて此の歌を筆述せしも、思ふに記紀中の歌は蓋し上古より傳來の歌たる事を疑ふべからず。この百八十餘首の歌を種類によりて分てば、軍歌・飲宴の歌・戀歌・童謠の四種に分ち得べきが如し。但しこれらは性質によりての區分のみ。形式上何等の相違あるにあらず。いづれも內容は極めて單簡にして、僅かに直覺的情緒を述べたるものに過ぎず。

然れども此の上代の歌に於て、早くも已に後世和歌の性質の全く暴露せられたるを認むべし。一には歌の作らるゝ場合の咄嗟の際になれるもの多きことにて、後世の頓智機智を貴ぶ風は早くも見らるべきが如し。二にはその自然に對する憧憬にして、自然と人事とを結合すること早く已にこゝにあらはる。敵軍の來襲するを雁の田に下るといひ、戰亂の治れるを雨の停むに喩ふる類、皆人事を以て自然に喩へたるものにして、自然の推移を

見ては直ちに人事に聯想し、人事の消長を見ては直ちに自然を想起し、人事と自然と全く相融合せるは後世の和歌通有の性質にして、この事の上代の歌謠に於て已に認むべきは、風光秀麗なる山河に影響せられたる國民の一性質を反映せるものに外ならずといふべし。

三十一字の形式が後世に於て流行すべき傾向も亦この時代に於て之を認むべし。當時の歌體はもとより一定せず。之を後世のに當てて云はんか。長歌あり、旋頭歌あり、短歌あるが中に、短歌と認むべきものは百八十餘首の中殆ど其の半ばに垂んとす。

上代の歌謠は祝詞と共に、一は個人的抒情詩として、一は民族的祭神の詞、寧ろ敍事詩として、最古國民の詩的產物たり。支那文化の影響の未だ及ばざりし太古國民の文學として興味の最も深きを覺ゆ。

萬葉集は短歌四千四百餘首、長歌二百六十餘首、旋頭歌二十八首の大歌集にして、時代よりいへば仁德天皇の后の歌を採錄するを以て、已に上代の歌と稱すべきものをも含有し、中にも讀人不知の歌の如きは、卽ち國民の詩として前代以來人口に噚炙せしものを集めたるものなるべければ、直ちに我が國最舊の好記念物と稱すべし。柿本人麿・山部赤人の起るは時代の影響によるといへども、決して突如たるものに非ず。所謂讀人不知の歌の次第に發達せしものたる事を知らざるべからず。但し萬葉集時代、委しくいへば藤原朝、卽ち持統・文武の朝以後初めて和歌の形式の非常に擴大し、長歌の發達せしは著名なる事實とす。人麿等は民衆共同の祝詞の形式を以て之を個人抒情歌に應用せり。詩賦述作の業已に盛んなりし當時、已に歌はざる歌となりし和歌は、その形式に於て大いに擴大する事を得たりしなり。然れども人

麿が功績は單にその形式を擴大せしのみにはあらず、實は祝詞中に含有せし敬神崇祖の精神を抒情詩として歌ひ出せるに存す。赤人は人麿に比ぶれば概して詩形の簡單を喜び、歌中の句法も亦短き文に分割し得べく、人麿の如く一瀉千里の勢なし。其の長は瀟洒に在り、簡潔に在り。富士山の歌の如き、雲・雪・山・河等の語を用ひたるのみにして高潔崇高の風韻を備ふること、富士山そのものに最もよく髣髴たり。これ亦祝詞の精神を傳へたるもの。山上憶良は支那に遊べる事あり、漢學に通じ、佛說を喜ぶ。支那思想・印度思想を詠出したるもの多く、歌の序としては漢文の四六文を用ひ、儒・佛の影響最も顯著なり。人麿・赤人の長所はその支那の感化を受くること尠く、純粹の國風を傳へたる點に於て當時の喝采を得たりしならんと信ず。余は萬葉集を見て、人麿・赤人・家持等の技術詩を愛讀するよりも、寧ろ九卷・十一卷・十二卷等の讀

人不知の歌、及び十四卷の東歌を愛讀す。これらは感情を直截に述べて、後世の彫琢の歌に似ず。これ等は蓋し支那文化の影響の外にあらん。

凡そ奈良朝の世、社會萬般の發達は大いに見るべきものありしに拘らず、文字は尙漢字を用ひて、之を音韻的に使用せしのみ。いはゆる萬葉假名の時代にして、太古以來奈良朝を通じて遂に我が國字なき時代なり。其の間の年代頗る長く、一般文化の發達、之を祖先建國の昔に比ぶれば、また實に霄壤の差ありしなるべし。然れども國字なき時代として、今一括して之を上古と稱す。概しては韻文の世なり。（國文學歷代選）

萬葉集抄

○幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麻呂作歌

やすみしし　わがおほきみ　かむながら　神さびせすと　芳野

川　たぎつ河内に　高殿を　高知りまして　のぼりたち　國見をすれば　たゝなはる　青垣山の　山つみの　まつる御調と春べは　花かざしもち　秋立てば　黃葉かざせり　ゆふかはの神も　大御食に　仕へまつると　上つ瀨に　鵜川を立て　下つ瀨に　さでさしわたし　山川も　よりてつかふる　神の御代かも

反歌

山川もよりてつかふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも

○山部宿禰赤人望二不盡山一歌

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高くたふとき　駿河なる　ふじの高嶺を　天の原　ふりさけみれば　わたる日の　かげもかくろひ　照る月の　光も見えず　しら雲も　いゆき憚り　時じくぞ　雪はふりける　語り告ぎ　言繼ぎ往かむ　ふじの高嶺は

反歌

たごの浦ゆ打出でて見れば眞白にぞふじの高嶺に雪はふりける

今奉部與曾布　常陸出身の防人。

○山上憶良在大唐時憶本郷歌

いざ子ども早も日本へ大伴のみつの濱松待ちこひぬらむ

○海犬養宿禰岡麻呂應詔歌

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば

○太宰少貳小野老朝臣歌

青丹よし寧樂の都は咲く花のにほふが如く今さかりなり

○大伴宿禰家持應詔歌

大宮の内にも外にも光るまで降れる白雪見れどあかぬかも

○山上臣憶良詠秋野花二首

秋の野に咲きたる花をおよび折りかきかぞふれば七くさの花

はぎがはな尾花葛花なでしこの花をみなべし又藤袴朝貌の花

○火長今奉部與曾布作歌

けふよりはかへりみなくて大君のしこのみ盾といでたつ吾は

藤岡作太郎　文學博士。東圃と號す。明治四十三年歿、年四十一。

三〇　中古の文學

藤岡作太郎

平安朝凡そ四百年は上代文化の最も光彩ある時代にして、江戸幕府の世と併せて、わが國における文運極盛の二紀とす。されど上流の社會のみ發達して、人民の智能は貴賤の間に大なる逕庭あり。從うて百般の事物すべて貴族的傾向を帶び、實用を忘れて粉飾に過ぎ、優麗を喜ぶ。されば文學も帝都貴族の間に行はるるのみ、下流の人は文字を知れるものも少かりしなり。

尚武は邦人の通性にして、建國以來、朝政に參與せしものは武門に出でたりき。されど平安朝の大勢力たりし藤原氏は、もとより文事を尚び、泰平に馴れては武事を卑む。文事を尚べば、文學の流行せるも當然のことにして、詩歌は管絃と共に上流の人が必須の技と稱せらる。武事を卑み、風俗優柔に流るれば、文學もまた

この傾向を帶び、女子の宮廷に勢力ありし頃より、わけて纖弱の趣味を育成せり。加ふるに文弱の公卿は京洛數里の間に籠居して遠く出遊せず、悠々たる生活極めて單調なれば、思想の變化も極めて乏し。從うて文學も一局面にのみ發展し、一旦その項點に達しては、停滯し沈衰するのみなりき。

漢文學も、前代よりひき續きて重んぜられたれど、儒教は却つて佛教に壓せられて、人心を感化すること到底彼に及ばず。佛教はこの時代のはじめ、天台・眞言の二宗更に傳來して、朝野に播り、法事供養盛んに行はれ、貴族の出家するも少からず。文學にも、人世のはかなく、宿命の免れがたきをいふこと多くなりしかど、いまだ快濶なる邦人の性質の根柢を動かすに至らざりき。

太古以來、邦人は、老幼憐み、部伍睦みて、人に殘虐の行なく、おのおのその業に安んじて相侵さず、無爲にして化すといふ樣なり。

因襲風をなし、儒・佛二教傳來しても、これによりて人心を箝束する要を見ざりき。平安朝に至りても、なほ往古のまゝにして、外來人爲の道義は、制裁の力甚だ薄し。さりとて當時の人も徒らに慾念の奔放に任するにはあらず、力めて中正なる性情を養はんとす。かくして取るところの人生の尺度は、善よりも美なり。教育は意の鍛冶にあらずして、情の薰陶なり。しかれども情は狂ひ易し。物質的文化の開けて、これを制御すべき道義の存するなければ、その弊や浮華蕩逸となり、文學も實を失ひて華に過ぎ、輕靡綺麗に流れたり。

一、弘仁時代（一四五〇頃より一五五〇頃まで）

太古より維新以前までは、學問といへば、第一に支那の文學・儒學を擧げたりといへども、この時代の如く、漢文學のみ行はれしことは稀なり。既に大化改新の頃より、漢學は興隆の運に向かひ、

爾來年を追うて盛んなりしが、嵯峨天皇は殊に漢文學を奬勵し給へり。その頃京都の大學、地方の國學の外に、名門貴紳が私學を設けて、一族の子弟を教育するもの多し。教ふるところ、經書律令・算術等もあれど、唐代の學風を受けて、專ら詩文を重んじ、學者のうち文章博士の位置最も高し。

勅によりて編成せられし詩集には、凌雲集・文華秀麗集・經國集あり。いづれも弘仁前後の詩を集む。平城・嵯峨・淳和三帝みな詩を詠じ、殊に嵯峨天皇は才藻に富み給ふ。天皇と共に漢文學の興隆に力ありし人には僧空海あり。空海は教界一派の祖たると共に、また文學の恩人なり。その唐に留學するや、佛教研修のかたはら詩文を學び、歸朝の際には、かの國の有名なる詩文集を携へ歸る。わが國の漢文學は、蓋しこれより蔚然として興れるなり。當時小野篁また詩才に富みたりき。

清和天皇以來、また詩文に名ある人少からざりしが、就中、菅原道眞が平易暢達なる辭を以て悲慘なる實境を詠じたる詩は、今に國民の同情をひくこと篤し。されどこの頃より、大江・菅原の二家は文學界における門閥の位置を占め、階級の固定は漸くその道を不振ならしめたり。

當時の詩人が愛誦したるは、六朝より唐代にかけての詩文にして、文選・白氏文集殊に重んぜらる。これらが社會と文學との上に影響せしことは甚だ大なり。浮華驕奢四時の遊觀の盛んなるが如き、一はこれが爲なるべく、わが國の詩家・歌人が取りたる題目も彼に得たるもの多し。綴るところの文辭は四六駢儷體を旨とし、語句の配置に苦心して眞情の流露を忘れ、纖麗の態を喜び、漢文學はこれより衰微の運に向かへり。

和歌は弘仁の頃には漢文學の流行に壓されて一時屏息の姿

なりしが、清和天皇以來やゝ頭をもたげて、漢詩と幷び行はる。これもまた時俗と漢詩との感化を受けて、浮華の體をなす。奈良朝には、歌人卽ち武人なるもの少からず、隨うて和歌も剛壯の氣ありしに、今は文弱なる貴族が席上唱和の具となれば、その風の變化せしや知るべし。かくて五七の調は七五に轉じ、長歌は殆ど衰滅せんとし、爾來この風永く渝らず。在原業平は當時第一の歌人なり。眞率なる詩想の迸出するに任せて、辭句の修練の如きは深く注意せず。僧正遍昭・小野小町またこれと聲名を齊しくせり。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして　業平

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく　遍昭

色見えでうつろふものは世のなかの人の心の花にぞありける　小町

當時また神前にて樂器に合はせて奏する謠物に神樂・催馬樂あり。平安朝の半ばを過ぐる頃まで盛んに行はる。神樂の一部は普通の短歌にして、その一部と催馬樂とは民間の俚謠より取れるもの多し。これらの俚謠は、概ね奈良朝の末よりこの時代の初にかけてのものなるべし。

久しく漢文は行はれしかど、なほ言ふところを自在に筆するは容易きわざにあらず。よりて奈良朝には字を假りて音を寫す萬葉假名なども用ひられしが、これも複雜なれば、ついで片假名・平假名の製作あり。この假名は奈良朝よりこの時代にかけて次第に出來しものなるべく、その使用の弘るに隨ひて、散文は發達せり。散文の發達は小說・日記類に見るべく、その魁として竹取物語の如き傳奇小說を見るに至れり。これと前後して伊勢物語あり。二書の簡潔にして古樸なるは、後人の擬せんとして及び難き

ところなり。

二、延喜・天暦時代（一五五〇頃より一六五〇頃まで）

平安奠都以來年久しく、紀綱漸く弛みて、地方離叛せんとすれども、帝都の文化はいよ〳〵光彩あり。世に醍醐天皇の朝を延喜の聖代と稱す。弘仁時代は專ら外國の文藝を謳歌せしが、この時代に至りて、一方には遣唐使を廢すると共に、支那文物の研究は衰へ、一方にはわが文化の發展に伴ひて、國民の自信は長じ、かくして純一なる國民的文藝は歡迎せらる。繪畫には巨勢金岡ありて美術を國風に化し、文學には和歌盛んに行はれて漢詩を壓す。歌界には紀貫之・凡河内躬恒等新に出で、こゝに弘仁の詩文隆盛は延喜の和歌勃興と變れり。延喜五年（一五六五）貫之・躬恒等勅を奉じて古今和歌集を撰し、萬葉集以後當時に至るまでの歌を集む。歌體こゝに至りて定り、主觀的敍情を主とし、優麗の調を尙び、

永く後世に範を垂れたり。

古今集の編成は、貫之の功重きに居る。貫之の歌を作るや、刻苦經營、想と辭と相合はしめんとして、一語一句苟もせず、眞に雅正の氣あり。後世彼を歌道の宗として、人麿と併せ稱す。躬恒これと並び立ち、才氣の橫溢を以てまされり。

貫之

ひとはいさ心もしらずふる郷は花ぞむかしの香ににほひける

同

逢坂のせきの清水にかげみえていまや曳くらむもち月のこま

躬恒

春の夜の闇はあやなし梅のはな色こそ見えね香やはかくるゝ

同

すみの江の松を秋かぜふくからに聲うちそふる沖つしらなみ

貫之は和歌のみならず、散文にも力を盡くし、これより假名文

大いに世に行はる。その古今和歌集序の如き、漢文の脈絡を應用して國文の一體を開く。されど駢儷體より出でて、やゝ華麗に過ぐる難なきにあらず。貫之また晩年に土佐日記を作る。文體簡淨、國文の軌範と稱せらる。

土佐日記正月二十一日の條

二十一日卯の時ばかりに船いだす。みな人々の船いづ。これをみれば、春の海に木の葉しもちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらむ、風もふかず、よき日いできて漕ぎゆく。この間に使はれむとて附きてくる童あり。それがうたふ歌、

なほこそ國の方は見やらるれ父母ありとし思へばかへらや

とうたふぞ哀なる。かくうたふを聞きつゝ漕ぎくるに、黒鳥といふ鳥、巖の上に集り居り、その巖のもとに浪白くうちよす。檝取のいふやう、黒鳥のもとに白き浪をよすとぞいふ。この詞何とにはなけれど、物いふやうにぞきこえたる。人のほどに合はねば咎むるなり。かくいひつゝゆくに、

船君なる人、浪をみて、國よりはじめて、海賊むくいせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。七十八十は海にあるものなりけり。

わが髪の雪と磯邊の白浪といづれまされり沖つ島守

檝取いへ。

村上天皇の朝は、天曆の聖代とて、延喜時代と並べ稱せらる。天慶・承平の亂こゝに終りて、都人は更に泰平に安んじ、學者・文人また輩出す。延喜時代の反動として、漢文學やゝ復興せるが如くなれども、全詩の結構よりは、寧ろ一二句の修辭に苦心して、器局小に過ぎ、畢竟漢詩の衰運に向かひたるは疑ふべからず。和歌は盛んに行はれて、これを詠ずるもの日々に多し。天曆五年(一六一一)源順等勅を受けて後撰和歌集を撰す。これを古今集に比するに、措辭やゝ蕪雜に流れたり。その後また拾遺和歌集の撰ありしが、

後撰と共に大體においては、古今の前轍を踏むに過ぎざりき。

假名の使用はます〳〵擴張し、散文も漸次複雜となりて、こゝに宇津保物語の長篇を出すに至れり。人情の描寫を主とする小說はこれを始とすべく、九百年に餘れる昔に、この大作ありしは歎美に堪へたれども、その缺點は、情を寫して眞ならず、辭を行ることも粗なるにあり。當時の小說にまた落窪物語あり。

三、藤原氏全盛時代（一六五〇頃より一七五〇頃まで）

この時代の上半は、卽ち攝政道長が榮華に誇りし時にして、藤原氏の勢力絕頂に達し、一門宮廷に跋扈して花月の遊に耽れば、文藝にも優美なる平安朝の特性は最もよく發揮せらる。漢文學は男子が唯一の學問として行はれたれども、既に傾き來りし運命の回復すべくもあらず。今や文學の中心は全く移りて、當時の傑作は實に假名文を以て記されたり。されど學問に誇れる公卿

は卑みてこれを用ひず、いはゆる女文字に甘んぜし女子をして、却つて千歲不朽の名を博せしめたり。

當時の廷臣は京都に蟄居して地方の事を知らず、行政・軍事を賤みて宴飲・管絃に日を送り、官女と和歌を唱和するを事とす。權力扶殖の手段としては、名流貴族いづれもその女を後宮に納れて皇室の外戚とならんことを望む。かくてこれ等の後宮、おのおの才能ある女子を侍女として相誇る。されば、こそ當時の女流には文學の秀でたるものも輩出せしにて、その歌ふところ書くところ、京都のこと、殊に宮廷のこと多く、その風のます〳〵優美柔弱に流れたるもまたこれが爲なり。

當時の女流の最も文才あるを清少納言・紫式部とす。二人はただに當時の第一流と稱すべきのみならず、古今を通じてまた第一流の文學者なり。清少納言は一條天皇の皇后定子（道長の兄關

白道隆の女)に仕ふ。その著枕草子はわが國の隨筆のはじめにして、見聞せるまゝ思ひつきたるまゝを筆に任せて敍述し、寸鐵人を殺す趣あり。筆鋒の鋭利なるは、その才の男子を凌ぐを知るべく、觀察の緻密なるは、女子の特性を現せり。紫式部は一條天皇の中宮彰子(道長の女にて上東門院といふ)に仕ふ。源氏物語はその筆に成りて、貴族の生活を寫せる長篇の小説なり。巧みに長篇を組織して、抑揚あり、波瀾あり、修辭精到にして流麗なり。さればこの書を以てわが國第一の小説と稱するは當然の評なり。

○うつくしき物(枕草紙の一節)

瓜にかきたる兒の顏。雀の子のねずなきするに躍りくる。また紅などつけてすゑたれば、親雀の蟲などもてきてくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の、急ぎてはひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の、目に髮の覆ひたるを、かきはやら

で、うち傾きて物など見る、いとうつくし。手繦がけにゆひたる腰の上の、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池より取上げて見る。葵の小さきも、いとうつくし。何も〳〵いと小さき物はいとうつくし。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の薄物など衣長くて、手繦あげたるが、はひいでくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなる男兒の、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。雞の雛の脚高に、白うをかしげに、衣短かなる樣して、ひよ〳〵とかしがましくなきて、人の後にたちてありくも、また親のもとに連立ちありく見るも、うつくし。鴨の卵。舍利の壺。撫子の花。

○光源氏が須磨のわびずまひ(源氏物語須磨の卷の一節)

須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關ふきこゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、

うち息みわたれるに、一人目をさまして、枕を欹てて四方の嵐を聞き給ふに、浪たゞこゝもとにたちくるこゝちして、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりにけり。琴を少しかきならし給へるが、われながらいとすごうきこゆれば、ひきさし給ひて、

こひわびてなく音にまがふ浦浪は思ふ方より風やふくらむ

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、しのばれてあいなう起きゐつゝ、洟をしのびやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、わが身一つにより、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ言うちのたまひ紛らし、徒然なるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍らしき樣なる唐の綾などに、樣々の繪どもをかきすさび給へる、屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語りきこえし海山の有樣を、遙かにおぼしやりしを、御目に近くてはげに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なくかき集め給へり。この頃の上手にすめる千枝、常則

などをめして、作繪つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有樣に、世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりをぞつと侍ひける。前栽の花いろ〳〵さき亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御樣の、ゆゝしう清らなること、所がらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなくうち亂れ給へる御樣にて、釋迦牟尼佛弟子となのりて、ゆるやかによみ給へる、また世にしらずきこゆ。沖より舟どものうたひのゝしりて漕ぎゆくなどもきこゆ。ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やらるゝも心細げなるに、雁の列ねてなく聲、櫂の音にまがへるを、うちながめ給ひて、御涙のこぼるゝを、かきはらひ給へる御手つき、黑木の御數珠にはえ給へるは、……人々のこゝちみな慰みにけり。

和歌にて、當時無雙の名家は和泉式部なり。和泉式部は紫式部と同じく彰子に仕へ、天稟の詩才、物に觸れ、事に感じて、咳唾珠を

なす。藤原公任は和漢の學に長じ、歌道においても第一の先達と稱せられしが、舊習を墨守して、その實は名にかなはず。これに反して、曾根好忠は詩風の因循固陋に厭き、ひとり用語の自由、格調の變革を唱へたれども、その作に險難の語句多く、世人はこれを卑しとして顧みざりき。

道長薨じて後、藤原氏の勢やゝ傾き、國運もまた振はず。地方には平忠常の亂、前九年の役あり。武人處々に地を占めて、漸く實力を養ひ來る。藤原氏と共に浮沈せし文學は、こゝに至りて、また漸衰の運に向かはざるを得ず。小說も勢源氏に極り、その後の製作はこれを摸擬するに過ぎず。その他の編著にして見るべきものは、邦人の漢詩文を選びたる本朝文粹、和漢・天竺の雜談を集めたる今昔物語などあるのみ。

四、院政時代（一七五〇頃より一八五〇まで）

後三條天皇英邁の資を以て親しく政を視たまひしより、藤原氏の權力は衰へ引いて院政の世となりぬ。紀綱やゝ伸張し、人心また興奮せりといへども、白河・鳥羽の二帝奢侈を好み給ひ、君臣ともに容儀を修すること婦人の如く、後三條天皇の振肅も直ちに弛みて、風俗は益〻浮華に流る。源平鬪爭の世、京都も禍亂の巷となりしが、月卿雲客なほ姑息の安を貪りて舊習を更むるを喜ばず。かゝる時、長篇大作の出づること稀にして、一時の唱和、半日の消閑に便ある短歌が、ひとり流行を極めしも偶然にあらず。

古今集の風調は、歌道の正風として久しく行はれたりしが、世人は久しくその陳套に飽けり。この時に當りて改新の旗を飜しを源經信とす。その子俊頼出藍の才を以て、大いに新體を唱へ、藤原基俊保守の見を懷いて、俊頼と衡を爭ひしかど、天下は靡然として新體に傾く。新體は前期の曾根好忠の詠に得るところ多

く、用語を自由にし、日常の俗語をも採り、また助辭を略し、名詞にて結びなどして、句格を緊密ならしむ。殊に多とすべきは、和歌の題目を擴め、屢〻客觀的に自然の景物を詠ずるに至れることなり。されどその弊や、奇を好み、俗に流れ、蕪雜にして統一なく、擾亂せること、恰も源平の爭の如くなりき。

時に藤原俊成千載和歌集を撰して、新體の長短を取捨す。溫雅にして清新なる一體、こゝに至りて漸く定れり。されどこの改新も根本的の轉化にあらず。社會の思想に變動なければ、和歌の內容も舊の如くにして、寧ろその形式において、精細巧緻なるに至りしなり。さるが中に群を拔きて異色ありしを僧西行とす。

西行はもと武門の人なり。世をはかなみて出家し、四方を周遊して風月を友とす。常に山水の景に接して天成の才を養ひ、詞句に拘泥せずして自在に感想を吐露す。時に佛教の腐敗も既に久

しくして、こゝに革新の氣運に向かひ、新なる宗教まさに起れり。西行この時に出でて、詠ずるところ佛教の趣味多く、和歌の內容に深邃の度を加へたり。

夕さればかど田の稻葉おとづれて蘆のまろやに秋かぜぞふく　經信

うづらなくまのの入江のはま風に尾ばな波よる秋のゆふぐれ　俊頼

夕されば野邊のあきかぜ身にしみて鶉なくなりふか草のさと　俊成

道のべに清水ながるゝ柳かげしばしとてこそたちとまりつれ　西行

和歌の流行と共に、歌論の學も勃興するに至れり。歌論はもと支那の詩論より出でたり。前期に藤原公任出でてやゝ體を備ふるに至りしが、この期に至りて始めて盛んなり。藤原基俊博覽に

誇りて一家の見を立て、藤原俊成これに學びて別に家學を開き、天下の師表となる。藤原清輔また歌論に名あり。されど淺薄なる形式の論、無益なる舊例の爭のみ多かりき。

謠ひ物としては、平安朝の中世このかた、朗詠・今樣盛んに行はる。朗詠は曲節を設けて詩句・短歌を朗吟するなり。今樣は七五の句を重ねたるものにて、その句數の四なるもの殊に多し。平安朝の初、既に佛教を讃したるものなど見え、いろは歌の如きもその一なりしが、この時代の婉柔なる姿を好む風に投じて、大いに世に行はれ、ついで次期にも及べるなり。

散文の見るべきものには、僅かに榮華物語・大鏡等あり。榮華物語は長くして冗漫に、大鏡は史記に倣ひて作れるものにして、筆路頗る勁拔なり。二書ともに關白道長を中心として、藤原氏の榮華を寫す。わが國の國文體の歷史の始なり。（日本文學史教科書）

五十嵐力
文學博士。早稻田大學教授。

三一　近古の文學

五十嵐力

鎌倉時代

一、和歌と連歌

鎌倉時代といへば、通例後鳥羽天皇の文治二年（一八四六）より元弘三年の北條滅亡（一九九三）に至る約そ百五十年間を指すことになつて居るが、こゝには特に範圍を擴げて保元・平治の頃（一八一六年頃）より吉野朝の終、元中年間（二〇五〇年前後）に至る二百二三十年を指すことにしたいと思ふ。本來此の時代は、國文學史中年代の區劃の最もうるさい部分で、大まかに見れば、鎌倉幕府の創立より江戸幕府の成立まで、卽ち賴朝より家康までを一括りにして、平安朝文學と德川文學との繫ぎの時代と見られぬこともなく、細かに分ければ源平時代・鎌倉時代・吉野朝時代、義滿、

義政の應永及び東山時代・戰國時代・桃山時代等の數期に分けて見られぬこともないが、今は便宜のため、此の長い年代を鎌倉及び室町の二つに分け、而して前の鎌倉時代に源平爭亂時代より吉野朝時代までを含ませたいと思ふのである。

かう見ると、此の時代の頭尾に亙つて連綿たる存在(發達とは云はれないが)を續けたのは、たゞ和歌の一種だけであつた。此の時代に於ける和歌壇の產出物を擧げると、まづ源平爭亂時代の壽永二年平家の都落より間もなく、藤原俊成が勅を奉じて撰んだのが千載集で、之に次いで出たのが土御門天皇の元久二年に、藤原家隆・藤原定家等の撰んだ新古今集、これで古今集以來の謂はゆる八代集が出來あがり、それより吉野朝にかけ、新勅撰(定家撰)・續後撰(爲家撰)・續古今(爲家撰)・續拾遺(爲氏撰)・新後撰(爲世撰)・玉葉(爲兼撰)・續千載(爲世撰)・續後拾遺(爲藤・爲定撰)・風雅(花園院御撰)・新千

載(爲定撰)・新拾遺(爲明撰)・新後拾遺(爲遠・爲重撰)・新續古今(飛鳥井雅世撰)の十三勅撰集が出でて、茲に謂はゆる二十一代集が完成した。之に吉野朝の宗良親王が撰ばれた新葉集を加へて、之をも假に勅撰の分とすれば、此の時代に出來あがつた勅撰集は其の數十六篇の多きに達して居る。尙之に加ふるに名々の家の集を以てすれば、歌も作者も夥しき數に上るであらうが、特色ある二三の歌集と歌人とを除けば、千載集が當時の新舊二派の小波瀾に對して小調和を成したる、新古今集が定家の謂はゆる「情は新しかれ、詞は古かれ。」の新說を中心として、形式上の技巧變化を盡くさうと試みたる、新葉集に吉野朝の君臣の慷慨悲涼の情の現れたる、實朝の作に萬葉風の丈高き姿の見えたる、後鳥羽天皇の御製に悲痛な王者的趣味の見えたる、西行の作に道心と俗情と風流の情との寂しく絡み合ひたる等を除けば、——概ね古今乃至新

古今の作風を摸倣襲踏して、墮落し、頽敗し、喪神し、横ぞれしたものであつた。故に此の時代の和歌は、數量に於てこそ初期より末葉に至るまで間斷なく豐かに充實したけれども、質に於てはただ頭尾の兩端に於て見るべきものを有するに過ぎなかつたのである。

蓋し此の時代の歌人は、和歌をば眞情を自由に抒べ表すものと思はずして、一定の法格に從つて文字を並べるものと思つて居た。從つて法格を敎ふる師範家といふものが出來て、それが門戸を張つて歌壇の全權を握り、それが示した法格に合はざれば歌でないと信ぜられるやうになつたのである。かくして和歌は形式の末に走り、嚴しき法格に縛られて益〻衰へたが、吉野朝の頃になつて、和歌の變態とも云ふべき連歌といふものが盛んに行はれ出した。連歌の盛んに行はれたのは、一つは世人が三十一文

字の單調無趣味に厭いたため、一つは徒らに窮屈な法格の束縛を受けずして、活きた感想を自由に發表するためであつたであらう。本來連歌は和歌の上の句或は下の句を一人がよみ、殘の句を他人が添加するのであつたが、此の時代に至つては、一首を二人で詠む制限を破つて、二十句・五十句・百句・二百句・五百句とつゞく長い連鎖を試みるやうになつた。當時連歌の名人と稱せられたのは、兼好等と共に和歌壇の四天王と稱せられた頓阿及びその弟子二條良基等で、良基に至つては、連歌の式を定め、「菟玖波集」といふ連歌だけの集を作るやうになつた。

二、軍記物と方丈記

此の時代に見るべき文學の出たのは、殆ど初期と末期とに限られて居る。連綿不斷の存在をつゞけた和歌すらも、質から見ればさうであつた。他の種類の文學は尙更さうである。初期に現れ

た文學の中で、當代の思潮を代表し、時人の情調を具現したものは、保元物語・平治物語・源平盛衰記・平家物語等の謂ゆる軍記物これに次いでは、文字排列の形式は漢文的であるが、一種の面白き變體日本文と見るべき吾妻鏡である。中にも當時代に於ける最大の文學は軍記物で、軍記の中心趣味はまづ武士が有りがひなしの境涯から脱して、先に自分等を犬馬あしらひした公卿を蹂躙するやうになつた氣味よさ、次いで再び公卿文明に囚はれて平家の滅亡する哀さ、次には源氏が平家の覆轍に鑑み、純粹の武人主義・質素主義によつて武家を興す趣、當時の武人が戰を一つの藝術と思ひ、劍戟の相交る戰場に悠々自適した趣などを書いた處にある。要するに軍記は武人の興隆に伴ふ內面苦惱の生活を書いたもので、其の中に現れたのは概して勝利者の方から見た光明面の時代相であるが、敗北者の側から見た世の中のみじ

めさ、哀さを痛切に描き、時代の暗黑面に對する落伍者の悲觀的時代觀を鮮かに寫して、軍記と反對の方面に重き地位を占めるものは鴨長明の方丈記である。方丈記は通例一通りの隨筆記事と見られて居るが、吾等は方丈記を以て一種の抒情的兼敍事的の論文とも見るべく、又自家の見聞・意見・生活をそのまゝに書いた一種の小說とも見るべきものであると思ふ。方丈記の中には戰爭に踏荒された時代の暗い影がよく寫され、世に背いた作者の寂しい心持もよく現れて居る。之を論文として見れば、劈頭にまづ「ゆく川の流は絕えずしてしかも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びてしばらくも止ることなし。」といふ作者の人生觀を煎じつめた概括的斷案を下し、次に其の斷案を實證すべきあさましき事例を列擧して、最後に、故に我は日野山に世を遁れ、幽寂なる自然の間に方丈の庵を結んで彌

陀の來迎を待つて居るのであると結論したところ、論理の筋がいかにもよく整つて、讀者にしんみりした感銘を與へる立派な論文である。吾等は方丈記を韓・柳・歐・蘇・徂徠・山陽・拙堂等の作文術で固めたやうな論文に比して、遙かに自然な活きた天成の論文であると思ふ。文章として見れば、軍記も方丈記も一面平安朝の傑作を志して及ばなかつたものであらうが、知らず〳〵用語・文體・調子等に時代の新味が加つて、活きた新文學を成すやうになつたのである。西行法師の作と稱せられる撰集抄も方丈記の系統に屬すべきものである。

其の他平安朝の流を追うたものでは、物語類には、苔の衣・石清水物語・住吉物語等がある。日記には阿佛尼の十六夜日記がある。教訓物・逸話集の方面には、十訓抄・古今著聞集等がある。いづれも多少此の時代の面影を印して居らぬではないが、大體平安朝の

手振を摸倣したもので、特にいふべき程のものではない。

又此の時代の初期に現れた紀行文に、源光行の海道記と、光行の子親行の東關紀行とがある。平安朝の柔かな文體に漢文脈の加つたもので、丁度物語文學に於ける平家・盛衰記の地位を占めて居るものである。又文飾を弄ぶ如何はしい修辭癖はあるが、後の上田秋成や曲亭馬琴などの文體を豫想した所もあつて、どこかく一種の新風と云ふべきものである。

三、太平記と徒然草

吉野朝時代に入つて現れた目ぼしい文學で、不朽の生命のあるのは太平記と徒然草とである。太平記は後醍醐天皇の卽位に筆を起して、建武中興及び吉野朝爭亂の顚末を寫したものである。もと平家物語・源平盛衰記あたりを模範として、之にやゝこしき修辭の厚化粧を施したものであらう。花々しい戰爭や大義名

分に關する調子高の記事に滿ちて、人の血を湧かす所があり、又後世に偉大なる影響を及したものでもあるけれども、その文學上の價値は到底平家などに比較し得べきものではない。平家・盛衰記等には平安朝思想と鎌倉思想との絡み合ひ、卽ち公卿生活と武人生活、感情本意生活と義理本位生活との交渉に、言ふべからざる味があつたが、太平記は概して云へば、鎌倉式の一點張り、いひかへれば武人生活・義理生活に偏した一本調子のものとなつた。(皇族も公卿もおほく武人化した。)平家に於ては、驕る平家の威勢といひ、西海の沒落、幼帝の入水といひ、昇り、降り、共に目の覺めるやうな程度に達して居るけれども、太平記に於ては、建武の中興も、新田・楠木の武勳も、足利の成功も、兩朝の和睦も、皆微溫的の好い加減な程度に止つて、深切なる同情を喚び起すべきところがない。平家に於ては記事に一種の趣味があつて、戰爭にも人

情の味が絡んでゐたが、太平記に於ては、記事はすく〳〵として油氣がなく、戰爭は張良・孔明的の詭計の筋の變化や、荒つぽい腕力の挑みあひを宗と寫すやうになつて、事件本位・輪郭本位となつて來た。平家に於ては事が單純にして摑まへ易く、事件の進みが急劇に而も漸層をなして最後の大悲劇を現じたが、太平記に於ては事件が複雜無中心にして同じやうな小事件が廣い場面に撒布せられ、而もその事件がのろ〳〵と開展して最後に龍頭蛇尾の小調和を現じて居る。故に太平記は稀有の大事件を描いた點と、武勇・義理一點張の時代國民を描き得た點と、國民の實際活動に大影響を及した點とを除けば、新趣味を發揮した點に於ても、文體を完成した點に於ても、到底鎌倉の初期に現れた平家其の他の軍記と比較し得べきものではないのである。

徒然草は、枕の草子を狙つて書いたものらしい。文章は平安朝

風の磨き上げたもので、その圓熟して品位のある點に於ては恐らく鎌倉・室町の四百餘年間に於ける隨一であらう。新味と雋鋭なる趣味とに於ては遙かに第一者の枕の草子に及ばぬけれども、兼好といふ洒脫無碍なる暢氣坊主の人格と、戰亂に眩き名分爭ひに揉まれて捨身になつた時代の影との現れた點に於て、盡きざる妙味に非凡なる價値がある。從來の國文家は多く兼好を以て一種の哲學者と見、徒然草を以て達人の達觀を書集めた語錄のやうに說いて居るが、吾等は徒然草を以て解りのよい摺れからしのお爺さんが勝手に囀り散らした出鱈目と思つて居る。思ふに彼は聰明なる資質を以て眞面目に人生の第一步を踏出したであらう。その自ら記す所によれば、彼は八歲にして佛は如何なるものかと父に問ひ、而して父の答へ得ぬまでに問詰めたとある。彼はかやうな資質と意氣込とを以て、神・儒・佛・老の諸道に

出入し、天地・人生の問題を研究したであらう。けれども、戰亂の時代は彼をして取澄ました眞面目くさつた學者・行者とならしめなかつた。彼は吉野朝の世に處して、目のあたり朝に在つて夕を賴まれぬ憂世の樣を見た。名分を喋々し、理窟を捏ねながら、或は宮方或は武家方と、轉々して主取りする武人等を見た。慾望のため、名のため、義のために可惜人生を擦減らし使ひ僵す人々を見た。彼が虛無恬憺・洒脫無礙・瓢簞鯰の趣味は此の間に養はれたのであらう。かくして彼は當時の武人が宮方に行き武家方に行くと同じ心持を以て、神道に入り、儒道に入り、老に入り、佛に入つた。矛盾撞着はいさゝかも氣に留めずして、名利に執着するなと云ふ一方に位記勳爵の有り難い事を敎へ、下らぬ雜事に心を惱ますなと言ふ後から、有職故實・故事來歷に關する知識吹聽を始めた。かくして徒然草は一見いかにも雜駁で不眞面目なものとな

つたが、此の雜駁で不眞面目なやうに見える所が寧ろ此の作の味ひ所である。

徒然草は其の趣味に於て全然方丈記に反して居る。方丈記は純粹にして眞面目なもの、作者の厭世觀を深切に組織的に說いたものであるが、徒然草は之に對して雜駁で不眞面目で、厭世か樂天か、儒か佛か、更に要領を得ぬものである。長明が思想上の態度は二夫に見えぬ節婦の樣であつた。兼好にはそんな態度は全く見えない。自由であり、奔放である。蓋し同じ元祿の思潮が、小心敦厚なる芭蕉をして正風の俳諧に赴かしめ、濶達なる西鶴・近松をして浮世草子・淨瑠璃に赴かしめたやうに、同じ戰亂の時世が、同じく神官より出でて佛道に入つたものながら、溫和な御人好しの長明をして、日野山の奥にさゝやかな居を占めて純厭世の組織ある方丈記を書かしめ、豪放洒落なる兼好をしては、雙が

丘のほとりに浮世の塵を浴びつゝ、無主張・出鱈目の徒然草を書かしめたのであらう。平安朝趣味に思想上の足場を置いた者が、鎌倉の現實・素樸・勇武の趣味に蹴おされて發した泣言は方丈記、鎌倉思想の威丈高になつて發した現實的・活動的の獅子吼は日蓮上人の遺文、鎌倉の豪放趣味を中心にして優美な平安朝思想を加味し、之を以て戰亂の世を茶化したのが兼好の徒然草とも見れば見られる。徒然草全篇二百四十四段の中、一つとしてあの眼前脚下の吉野朝の大戰亂に言及してゐないのは、間接に兼好の洒脫な超越的態度を說明して面白いやうに思はれる。

吉野朝時代に出でた文學で、尙其の名を擧ぐべきは、北畠親房の神皇正統記、これはあの時代の特殊なる思想の發露したものと見ても面白く、文明史の魁をなしたものと見ても面白く、又その文體の强くしつかりして直截明晰に著しく近代的になつて、

後世の普通文・論文の基礎を成した點に於ても注意すべきものである。增鏡、これは大鏡などの體を追うて、後鳥羽天皇の卽位より建武中興までを書いたもの。立派に磨きのかゝつたものではあるが、要するに平安朝の摸倣で、此の時代に重きをなすべきものではない。外に吉野拾遺・梅松論等、いづれも當代の事を書いた可なりの作ではあるが、これ、はたさまで重きをなすものではない。

要するにこの時代を代表すべき作物は、前にしては軍記四篇、方丈記・新古今實朝の金槐集、後にしては太平記・徒然草である。

室町時代

室町時代とは吉野朝の統一された頃(二〇五二頃)より關原役のあつた慶長五年頃(一二六〇)まで、卽ち足利義滿より德川家康までの二百餘年を指す。此の時代の文學の中心をなして居るの

は謠曲である。謠曲は足利三代將軍義滿の保護と、觀阿彌の子世阿彌といふ天才の努力とによつて大成したもので、今日に傳はつて居る主なる曲章が二百番內外ある。

當代の文學で、謠曲についで重い地位を占めるものは狂言である。狂言は謠曲と相伴つて能樂の一部を構成する一種の劇である。謠曲の眞面目なるに對して、これは滑稽を主とし、謠曲が古名句の繼ぎはぎなるに對して、これは生一本の新言文一致でやり通し、謠曲が概して昔の事柄を昔の言葉で表して品位ある時代物を成して居るに對して、これは當時の事を當時の言葉で現して親みある世話物を成して居る。狂言は當代に對する諷刺とも見られるが、誠は當時の貴族等が消閑のため、又謠曲で凝つた肩を和らげるために、我人共有する弱點を客觀に投出して笑つて見て居たのであらう。やかましい哲學によつて作つたもので

もなく、歐洲の新演劇論で眞面目に向かふべきやうなものではないが、とにかく謠曲と共に此の時代に始めて現れた新しい試みで、地の文の雜らぬ劇の最初の試みとも見るべく、又平安朝以後に現れた最初の言文一致文とも見るべく、殊に圓熟して而も活躍して居る點に於ては、恐らく謠曲と共に室町文學中の首位に居るべきものであらう。

和歌は此の時代に入つて實に衰頽を極めた。歌人として名を掲ぐべきは東常縁・宗祇法師・細川幽齋等の少數者があるばかり。それすら自家に見るべき作のあるでもなく、和歌に對する立派な見識のあるでもなく、唯やかましき形式論の末に拘泥し、古今傳授などいふ下らぬ祕說を捧持して、自ら高しとし、世に敬はれた丈であつた。但し和歌の衰ふると共に、非常な勢で興隆して來たのは連歌である。當時連歌の盛んに行はれたことは、立派な歷

歷が名作を得んがために神社に通夜し、或は領地を賭けて優劣を爭つたのを見ても解る。當時の連歌界の偉人は宗祇法師で、その撰にかゝる連歌集に新菟玖波集といふのがある。かくして連歌は非常な勢で行はれて行く中に、段々新鮮の氣を失つて、徒らに面倒な法格に縛らるゝやうになつたが、此の時代の末になつて山崎宗鑑・荒木田守武等が出でて、俳諧の連歌といふ滑稽を主とする連歌の一體をはじめ、これが單に俳諧とも呼ばれて大いに行はれ、德川時代に於ける發句流行の因をなした。

此の時代の初、或は吉野朝にかゝつた頃に義經記・曾我物語が出た。前者は義經の一代記、後者は曾我兄弟の仇討を書いたものである。共に軍記物語の墮落したもので、文章は型に嵌つて伸過ぎて、生氣が無く、殆ど見るに足らぬものであるが、平家や太平記より後の、舞の本・淨瑠璃・お伽草子に至る過渡時代の繫ぎとして

注意に値するものである。

右の外此の時代の文學として名を擧げる必要のあるのは、舞の本・御伽草子・淨瑠璃等であらう。舞の本といふは幸若舞に用ひられた曲章である。その今に傳はるものが百篇内外。曾我物語・義經記の系統を引いて勇猛殺伐な事蹟を誇大な締りのない文章に現したもので、其の文體はいたく近松以前の古淨瑠璃に似て居る。文學上淨瑠璃の手本となつたものは、謠曲よりも、狂言・御伽草子其の他の文學よりも、先づ舞の本であつたらう。舞の本は文學として價値の卑いものであるが、二三百年の後に出でた古淨瑠璃に比して、さまで遜色のあるものではない。

御伽草子は此の時代に行はれた幼稚なる短篇小說の一群に與へられた名稱である。此の時代の文學は、一つは短篇なるより、一つは一篇獨立して記憶せらるゝ價値のある物のない所より、

多くは同種類の一群を束ねた名稱によつて記憶せられて居る。謠曲も狂言も舞の本もさうであるが、御伽草子も亦是等と同じき群の名である。御伽草子の中最も有名なのは文正草子・鉢かつぎ姫等で、其の他今に傳はつて居るものが數十篇ある。多くは簡單な筋の物語を義經記・舞の本式の語り物とも・讀み物とも附かぬ締りの無い文章に表したものであるが、中には可なりの長篇で、筋にも變化があり、文章も可なりに整つたのがある。「あしびき」などがその一つである。

淨瑠璃は戰國時代の末になつて最も遲く現れたもので、その最初の作は普通に御伽草子の一册に數へられる十二段草子と云はれてゐるが、此の時分の淨瑠璃には一定の曲章がなく、或は御伽草子や舞の本の文章を借來り、或はそれらをよい加減にはぎ合はせ、作りかへて用ひてゐたらしいやうである。（新國文學史）

佐々政一
文學博士。
大正六年歿、
年四十五。

三二　近世の文學

佐々政一

一、前期（元和元年——享保二十年）

元和偃武より以降二百五十年の昌平は、我が文學の發達に十分なる機會を與へたり。加ふるに、德川家康は兵馬倥偬の間にあつて文敎樹立の志を懷き、關ケ原の戰役以前、既に藤原惺窩・林羅山等を引見すること屢なりき。されば江戸時代の文藝の發達は、家康が施設に負ふところ甚だ多しとなす。

かくて幕府の創制に關して、先づ江戸に召されしは羅山なりき。羅山は惺窩の門人にして、夙に宋の程朱の學を修め、子孫代々家學を以て幕府に仕へしかば、漢學の最も榮えしものは程朱の學なりき。程朱學の外に、羅山より稍後れて、近江の中江藤樹と備前侯に用ひられし熊澤蕃山との陽明學を、會津侯に用ひられし

山崎闇齋の垂加神道を唱ふるあり。その說く所、林家の說に等しからずと雖も、亦宋學の範疇を出でざりしに、元祿の頃、伊藤仁齋出づるに至りて、始めて宋儒の注脚を排して、直ちに經傳の本文に就いて研究せん事を主張せり。これを古學といふ。仁齋の子東涯も、父の說を奉じて、博覽宏識を以て聞ゆ。折しも五代將軍綱吉、好學の名あり。諸侯も競うて儒者を聘せしかば、元祿の頃に當つて、學者東西に輩出せり。中にも江戸に出でし荻生徂徠は古文辭を唱へ、從來、道德・經義に專らなりし漢學者の間に、始めて詩文を重んずる一派を生じぬ。徂徠とその門人太宰春臺・服部南郭とは、實に文藝として見るべき漢詩文を創めたる人といふべし。

古文辭派に對立して、木下順庵の木門あり。順庵は初め京都にありしが、後、江戸に召さる。その學風は唐・宋諸家の說を派別せず、なほ詩文をも兼修して集めて大成するにありたれば、門下には

和漢古今の書を洽く渉獵したる者多く、新井白石・室鳩巣等の大家をも出せり。今日の普通文たる和漢混淆文も、この派の學者や、一度、順庵に師事したりし貝原益軒等の努力によりて大成せられしものにして、中にも白石は博學多才、將軍家宣・家繼に歷仕して、政務に畫策せるところ多きのみならず、その識見の卓拔なる、その行文の縱橫自在なる、本邦稀有の文豪なり。

顧みて國學を檢するに、足利期の歌學を傳へたりしは獨り細川幽齋のみなりしが、幽齋の門に中院通勝・烏丸光廣・松永貞德等あり。貞德の門に北村季吟あり。季吟は諸家の說を集めてその穩健なるものを取り、遍く中古の著名なる文學を注釋せり。今日もなほ廣く行はるゝ源氏物語湖月抄・枕草子春曙抄の如きは實に彼の著すところにして、主として足利期傳來の學說を以て集成せり。

然るに恰も漢學者間に宋學を排して本文研究を主張する者出でし頃に、國學者の間にも亦獨立研究の說を成せるものあり。所謂古學復興派これなり。下河邊長流・僧契沖は實にこの派の魁を爲せる者なり。時に水戸光圀、修史の志あり。彰考館を開いて大日本史を撰せしめ、兼ねて古典の研究に心を傾けたりしが、長流の古典に通ずるを聞きて、之に萬葉集を註せしむ。長流業を卒へずして歿するに及び、これを續成せしは卽ち契沖が萬葉集代匠記なり。代匠記は總べて中古以來の僻說を排し、全く本文により て新しき研究を遂げたるものにして、近年の國學はこの書によりて創始せられたりといふべし。契沖より少しく後れて、荷田春滿の別に國學を創始するあり。亦、古典の獨立研究を主張し、儒教・佛教の影響を蒙らざる我が國體と神道とを明かにせんとせり。

以上は主として學問の發達なるが、純文藝の方面に於ても、恰

も漢學・國學と等しく、元祿期に至つて空前の發達を見たり。

文藝の流行は、當初、最も通俗にして入り易き俳諧より起れり。松永貞德、古學の資を以て、先づ連歌に似て卑俗なる俳諧を始め、西山宗因の談林派はこれを更に通俗自在ならしめしが、元祿に松尾芭蕉出づるに至りて、從來の幼稚なる滑稽詼諧の域を脱して、主として閑寂なる天然を吟じ、こゝに新なる俳道を樹立せり。

これより先、宗因の門に井原西鶴あり、俳諧より出でて筆を小說に染む。從來の小說は假名草子と稱する幼稚なる教訓談風のものなりしに、こゝに始めて寫實小說成れり。行文犀利、觀察奇警を極めて、よく社會の裏面を穿つ。八文字屋自笑・江島其磧等ついで出でて西鶴を摹倣し、亦一時に鳴れり。

西鶴より少しく後れて近松門左衞門あり、元祿・享保の頃に百餘篇の淨瑠璃を作れり。その結構の巧妙、詞藻の豐麗、古今に冠絶

三學士　柴野栗山・尾藤二州・古賀精里。

して、在來の淨瑠璃はこゝに全く顧みる者なきに至りぬ。尋いで竹田出雲あり、遙かに後れて近松半二あり。その作、時に門左の壘を摩す。

二、後期（元文元年——慶應三年）

前期の最盛期たる元祿・享保の頃、文化の中心は漸く江戸に遷りて、前期の文豪が主として京阪に出でしに反して、後期の名家は多く江戸に出でたり。

漢學は益〻盛んにして、寛政に至りては、名高き三學士出づるあり、漢詩文彌〻流行せり。又、種々の學派起りて門派の爭を生ぜしかば、所謂異學の禁令發せられて、一時は却つて漢學の發達を阻礙する感なきにあらざりしが、幕末に至りては、賴山陽・齋藤拙堂・廣瀨淡窓・同旭莊・梁川星巖等、詩に文に、名人の輩出せしこと擧げて數ふべからず。

元文・寶暦の交に最も目ざましかりしは古學復興派なり。初め江戸に戸田茂睡ありて和歌の復古を唱へ、ついで荷田在滿京都より來りて、又堂上風の歌學を排斥せしが、賀茂眞淵出づるに及びて、その勢力は全く古風を壓し、且漢學と對立する勢をなせり。その一派を縣居派といふ。眞淵は春滿の說を敷衍して古道を明かにし、漢學・佛教の影響を蒙らざりし古に復らん事を主張し、これが爲に專ら我が國最古の歌集なる萬葉集を研究し、萬葉調の歌を作れり。萬葉考を始として考證・注釋の著書多しと雖も、その才は寧ろ創作にありしが如し。

眞淵の門下に、近世隨一の學者本居宣長あり。その志一に國體を闡明して外來思想を却くるにあり。その一代の研究は古事記の注釋に集注せられ、國學界無比の大作、古事記傳は成れり。門人に伴信友・平田篤胤等あり。信友は考證に長じ、篤胤は幕末の形勢

に促されて、學者よりも寧ろ宗教家又は政事家として實行家たらんとするに至れり。宣長と同門にして、最も名高きを加藤千蔭・村田春海とす。ともに歌文に專らにして、眞淵が創作の才を繼げり。この三人を始として所謂縣居の門流には、學問に詩歌に高才逸足多く、天下靡然としてこれに歸せんとす。

されど國學者間にも亦別に派を立てて、これと對抗せんとする者も尠からざりき。就中、小澤蘆庵・香川景樹が、縣居派の好んで萬葉の古調に倣へるに對して、專ら平明なる語句を用ふることを主張したるは頗る注意すべし。景樹は特に歌調の流麗を重んじ、その作物亦秀拔なるもの多く、門流今に盛んなり。これを桂園派といふ。

後期の通俗なる文藝にも亦見るべきもの多し。文化の中心の江戸に移ると共に、先づ榮えたるものは、快活敏捷なる江戸氣風

によりて成れる滑稽的小文學にして、俳諧より出でたる川柳あり、蜀山人等の始めたる狂歌・狂文あり。小說には青本・洒落本の輕妙なるもの專ら流行せり。然るに寶曆より安永・天明にかけて國學盛行し、漢學の知識も益〻流布せしかば、こゝに學問の影響は通俗なる文學の中にも著しくなりぬ。

寶曆の横井也有が俳文は、極めて引喩に富み、學識あるに非ざれば成らざるものなり。天明期に與謝蕪村等出でて、俳諧の復興を企てぬ。その材料は、多くは中古の歌物語にあらずば、漢詩・漢文の趣味なりき。又縣居派の門流中より、上田秋成・建部涼岱の如く、和學・漢學の素養を以て筆を小說に染むるもの出づるあり。こゝに滑稽的寫實に專らなりし山東京傳等も古傳說・支那小說等を材料としたる讀本・合卷などと稱する小說を作り始めぬ。この傾向を大成したる者を曲亭馬琴・柳亭種彥とす。殊に馬琴は博識宏

才よく和漢・古今の書を涉獵し、且略〻經義に通ぜしかば、その作、一に勸善懲惡を主として、他の小說家の如く筆を野卑なる境に染むること稀なりき。里見八犬傳・椿說弓張月はその傑作にして、我が國小說界の雄篇なり。斯くして當時一般の文藝が學問又は傳說の臭味を帶び來りし間に、依然として滑稽に巧みなりしを十返舍一九・式亭三馬とす。三馬の文は輕快にして然も銳利なること、動もすれば西鶴に過ぐ。

天保に入りて文運は稍衰退せり。弘化・嘉永に至りては幕末擾亂の世、既に靜かに文筆に從ふを得るもの少く、纔かに維新の志士等が悲憤慷慨の調、時に人心を動かすに足るものあるを見るのみ。通俗なる文藝は益〻社會の最下層に媚びて、全く墮落し了りぬ。

藤村作
文學博士。東京帝國大學教授。

三三　現代の文學

藤村作

明治時代の文學は、それ以前の文學と異なつて、西洋文學の影響を受けて內容的に深くなつて來た。この意味から之を三期に分つて觀察すると、前期は明治初年から明治十九年坪內逍遙氏の小說神髓の出る頃までであつて、之を歐化主義の時代といふことも出來る。この時代は新しき西洋思想の輸入によつて歐化主義の極端に現れた時代で、英國風の實利的傾向と基督敎的博愛の精神と自由民權の思想とによつて、過去の日本を破壞してしまはうとした。而して一面には詩歌・小說・劇の各方面に飜譯が現れるとともに政治小說が行はれて、靑年の理想を作品として表現した。しかし未だ外面的粗朴であつて、個性的な纖細なる感情を把へる事は不可能であつた。而してたゞ批判的な見地もな

くして西洋思想を讃美したのである。もとよりこの風潮の間にも舊文學の傳統の流は、假名垣魯文の小說や、河竹默阿彌の脚本にも見られ、宗匠風の俳句や、堂上風の和歌の流にも殘つて居るのであるが、一般の傾向としては西洋讃美となり、過去の美しき價値あるものをも亡し盡くさうとしたのである。

而して、中期は明治二十年頃より明治三十四五年までの時期の文學であり、浪曼主義の時代ともいへる。この期の文學は、前期の皮相なる見地から個性的意識に目覺め、西洋思想と固有思想との融合の下に、新しき文學的活動をはじめたのである。

小說に於ても、寫實殊に心理描寫を唱道して、坪內逍遙氏や、二葉亭四迷が出で、更に尾崎紅葉を中心とする硯友社と、幸田露伴氏とが對立し、更に泉鏡花・川上眉山・廣津柳浪・樋口一葉諸氏によつて、觀念小說・深刻小說などが作られたが、眞の現實に立脚しな

モウパッサン Guy de Maupassants 佛國の有名なる小説家。

ゾラ Emile Zola 佛國の自然主義作家の泰斗。

い所に浪曼的傾向が存する。これは詩歌の方面に於ける文學界一派の詩や、島崎藤村氏や、土井晩翠氏の抒情詩に於ても見られ、又、落合直文より明星派の歌の傾向に於ても見られる。この時代に起つた新派劇や史劇の如きも皮相なる寫實の上に起ち、若しくは理想主義・浪曼主義の上に立てられたものである。斯の如く、この期の文學の主潮は浪曼主義的傾向であつたのである。

而して、後期は明治三十五六年頃から明治の末年に至る自然主義の時代である。此の期の文學は、眞の現實の上に立脚して物の眞相を捉へんとした。これにはフランスのモウパッサン・ゾラ等の影響が著しいが、小説に於ける國木田獨歩・島崎藤村氏・田山花袋氏等の自然主義運動は、明治文學のみならず、日本文學の一大革新運動と言ひ得る。かくて美を中心とした文學が眞の上に立脚するに至つたのである。これは長詩の上に於ける象徴主義、

劇の方面に於ける社會劇・思想劇などと相呼應する。しかし自然主義の文學は餘りに現實の醜をのみ求めて、人生そのものの全部を眺める態度にかけて居たため、そこに不滿を感じて、やがて衰へてしまつたが、この運動の起つた事は極めて注意すべき現象である。

明治時代の後に來る大正時代の文學は、自然主義の上に立てられた人道主義・新理想主義的傾向、又は新現實主義的傾向のものであつて、現實の醜を認めた上で、その上に理想を建設せんとする、或は現實をば人性の上から一の解釋を加へようとする、卽ち人性の基礎の上に立つて居る所に明治時代の第二期の浪曼主義と異なる所がある。これは小説に於ける武者小路實篤氏や、菊池寛氏の作品、長詩に於ける民衆詩的傾向や、短詩に於ける新寫實的傾向などに於ても見ることが出來る。而してこの機會か

ら更に新なる開展の道を辿らうとするのが現在の狀態である
やうに思はれる。（國文學史總說）

土居光知
東北帝國大學
教授。文學者。

附錄　國民文學と世界文學

土居光知

書かれた文學の前に民謠と神話・傳說とがある。民謠は情緒生活の何者にも捉はれないきれ〴〵な詩歌の本能的な現れであるが、神話は已に體系をなし、民族の生活や政治狀態に影響されるため、民族的精神・戰爭その他特殊の興味が多く加り、人間性の表現の直接さと廣さとに於て著しい差違を生ずる。世界中の神話から人間的の興味の最も饒かで、世界文學の源泉となるものを求めるならば、それはギリシヤ神話であらう。科學的な心は全く神話からは遠ざかつてゐる。しかし少年の心は、今日に於ても、人類が少年期にあつて人間の運命や自然に對し驚異の眼を見張つた時代の感想に共鳴するのみならず、詩的な心はいつもそれに對し遠い故鄉の感をいだく。人間的な姿を以て、森や海や空

を充たした美しいギリシヤ人の想像は、一民族の神話たるに止らず、我々にとつても世界的文學の故郷である。上古の地中海東部沿岸諸國の神話を醇化し綜合して成長したこの神話は、早くより羅馬の神話を同化し、文藝復興の頃からは佛・英詩人の詩的想像の世界に甦つた。獨逸は久しくゲルマン民族の好戰的な國民的神話を以てギリシヤ神話に對抗せんとしたが、ヴィンケルマンやゲーテの時代から後者に傾いた。自國民族の神話を忘れることは悲むべきことであらう。しかし眞に人間的な最も美しい神話が詩的想像の眞の故郷であつて、自國の神話を維持せんがために、これを黜けることは更に悲むべきことである。

ゲーテ

歐洲人の美感はギリシヤ人のそれに影響されてゐる點が非

ヴィンケルマン Winckelmann 獨逸の考古學者。

ゲーテ Goethe 獨逸の詩人。

エスキロス Aeschylus ギリシヤの詩人。

ユーリピデス Euripides 古アテネの詩人。

常に多く、歐洲文藝の原型は大部分ギリシヤに發見される。ギリシヤの文學は個々の作品として最早現代のものでないと謂ふべきであらうが、全體として、卽ちギリシヤの藝術的精神としては決して生命を失つてゐない。敍事詩の中で最も世界的文學の要素を有するはホーマーであらう。ホーマーの興味は他民族の征服や寶の爭奪、奇蹟の續發にあらずして、人間の心の動き方にある。トロイ戰爭は人倫が亂されたことに對する英雄たちの憤に起因してゐる。古代人が想像し得たあらゆる誘惑と困難に打勝つ英雄の冒險を主題としたオヂッセーは、「人間を我に語れ、美神よ、見聞廣く、いと多くさすらひたる。」の語を以て始る。歐洲の文學が常に人間的興味を中心にしてゐることは、それがホーマーに源を發したからであるとも考へられる。次にホーマーに較べると、エスキロス・ソフォクレス・ユーリピデスの劇詩とプラトー

プラトーン Platon ギリシヤの哲學者。

ヴィルギリウス Virgilius ローマの詩人。

ホラティウス Horatius ローマの詩人。

サタイヤ Satire

ンの對話篇とは更に直接に吾々に訴へる。ギリシヤ劇を世界的文學として重んずる理由は、實に人間性の嚴肅な觀照と清澄な表現とのためである。またプラトーン主義が歐洲の思潮の本流であることは、こゝに述べる必要もないであらう。

次にラティン文學の中でヴィルギリウス及びホラティウス等は、ローマンス語國の文學に對しては今に尙勢力を維持してゐるやうであるが、しかし羅馬人が創始した文學は單に諷詩(サタイヤ)のみで、他は皆ギリシヤより繼承したものである。古代羅馬の詩人たちは、我々の世界的文學に對しては、自ら發する光輝の弱さと緣遠さとのため、肉眼では明かに見得ない星群である。

人間の靈的覺醒を語る聖書はギリシヤ文學と相並んで世界的文學の源である。すべての深刻な告白の文學、靈と肉との惡戰苦鬪を直接に物語る文學で、聖書の反響を聞かないものはない。

若やかな銳敏な心を以て人をありのまゝに見、美と光のうちに歩まんとしたのはギリシヤ精神であつた。嚴肅な心を以て靈性の生活を强調し、美を蝕み、光を覆はんとする闇の力を克服せんとしたのはヘブライ精神である。ギリシヤ主義は美しい理想であるが、それを實現せんが爲には性情の醇化と意志の鍛錬を必要とする。それを缺いたがため、ギリシヤ精神は享樂に溺れて中途にして崩解し、クリストの理想が世を救つた。ギリシヤ主義とヘブライ主義とは歐洲文學の二大源泉であるが、その一方のみで大文學を生むことが不可能であることは、後者が前者を排した紀元後千年間に世界的文學と稱すべきものが全くないことを見ても推せられるであらう。中世以後の偉大な文學は常に兩精神の融合から生れてゐる。文學の方面から言へば、ヘブライの精神の特性は、靈を直接に感ずる力であり、ギリシヤ精神のそれ

リズム Rhythm 旋律。
カーライル Carlyle 英國の史家、文學者。
ラスキン Ruskin 英國の美術批評家、文學者。
ホイットマン Whitman 米國の詩人。
ニイチェ Nietzsche. 獨逸の哲學者。
ツァラツーストラ Zarathustra ニイチェの著書。

は觀る力であつて、心の世界を美しい姿で滿たす。前者は文學の内容を深め、後者は容姿を整へる。之を詩の形律の方から考へると、前者は心の直接なリズムを響かせるが、後者は整齊を保つ詩形の中に内容を盛らんとする。前者は散文詩となり、後者は高雅な定形詩となる。前者の影響を全然拒んだ歌からは、輕い調子と修辭的な印象を受けがちである。カーライル・ラスキンを始め莊重な詩的散文の大家は聖書の調子に感化されてゐるが、ホイットマンの散文詩、ニイチェのツァラツーストラにさへもその反響が聞かれるであらう。

ニイチェ

紀元後一千年に至る中世の前半は、基督教會が歐洲の自然人を教化し、精神世界の住民とするために費されたのであつて、中

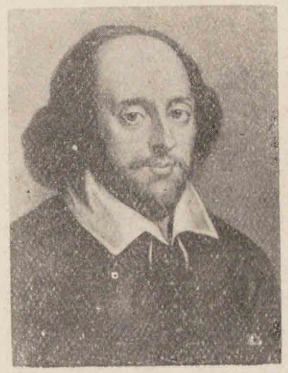
プロヴァンス Provence 佛蘭西南東の舊州。
アーサー Arthur
ウェールズ Waies 大ブリテンの一部。
トリスタン Tristan

世の精神が創造的になり、文藝の華を開くやうになつたのは十一世紀以後である。新しい世界的文學の發生地は十二世紀のプロヴァンスであつた。新文化の發生地は諸文化を綜合し得るやうな形勝の位置にあると同時に、過去の傳統に支配されることなき文化の處女地であることを必要とする。プロヴァンスは最も豐饒な土地であつて、もとギリシヤの植民地があり、その後羅馬・チウトン・ケルト人等が相次いで占有し、歐洲の優秀民族の粹をあつめ、東は羅馬の文化、西は當時スペインにまで侵入してゐたアラビアの文化に接することが出來た。此處で新に生れた文學の中心の力は、心情の熱誠な憧憬であつて、千年の間抑壓されてゐた心情は、人格を基礎とする愛に目醒め、その力によつて創造的になつた。歐洲の抒情詩は此の心情の目醒めに始る。アーサー物語はウェールズに起り、トリスタンの物語にはケルトの情

ランスロット Lancelot
パアシバル Percival
シェクスピヤ Shakespeare 英國の劇詩人。

調が保たれ、ランスロットの物語はフランスに發達し、パアシバルの騎士道は獨逸人の寄與であつた。しかしそれよりも更に深く中世の心を表現するものはダンテの神曲である。

文藝復興の精神は、南歐に於ては主として繪畫・彫刻及び建築に表現されたが、その文學としての表現はエリザベス朝の文學、特にシェクスピヤに見られる。こゝにこの世界的に知られた劇詩人に就いて紹介する必要はない。彼の作は殆ど各國語に譯


ヤピスクェシ

され、その國の文學の寶となりつゝある。潤やかに捉はれざる心を以て人生をありのまゝに見、それを劇に表現するとは如何なる事であるかを、近代人に教へたのは彼である。

十七世紀の後半から十八世紀の終に至るまでの文學は、世界

デッフォ Defoe 英國の小説家。
スウィフト Swift 英國の小説家。
ルッソー Rousseau 佛國の哲學者。

的に不朽な作品を出さなかつた。それはファウスト・ハムレット・ドン、キホテの如き眞に生ける人間の姿を一つも產まなかつた。併しこの時代は文學の自意識を喚びさまし、古典文學の價値を明かにし、理智に重きを措いて文學を空想の夢中遊行から喚びさまし、心理的省察の尙ぶべきことを教へたかくて韻文を以てする空想物語の時代は去り、英文學ではデッフォのロビンソン漂流記、スウィフトのガリヴァ旅行記等に始る小說の時代となつた。十七八世紀は精密明晰な散文を創始した時代である。

この文學は十八世紀の末葉において一大展開をなした。ルッソーはこの客觀的明晰と心理的省察に富んだ散文を抒情詩の領域へ取入れ、心情の世界を對象とし、曾てなき直接さと精密さを以て心の展開を描き、自己を告白した。この告白の文學を更に進めたのはゲーテである。彼は「ヴェルテルの悲」に於て先づこれ

を試み、內的生活の最も多樣で直接な抒情詩を世界文學に寄與し、世界精神を體驗するファウスト及びヴィルヘルム、マイスターを書いた。ルッソーの考では、社會は自由平等なる個人の集合であつて、個人の自由と幸福とを增進することが理想であつた。ゲーテも自我の充實した、自由な展開を人生の目的と信じ、ファウストの第一卷、マイスターの前篇にこの精神を表現したが、「親和力」には個人の要求と、より高き要求との衝突が描かれ、マイスター及びファウストの後篇には、個人の要求を超越して、人間のため、社會全體のために生くべきことを說き、既に理想的な民衆主義を暗示した。

現代に於て此の思想の展開を繼承する文學は何處にあるかといふことに關しては、見る人によつて意見を異にするであらうが、それはゲーテの青年期の思想と晩年の理想、或はニイチェ

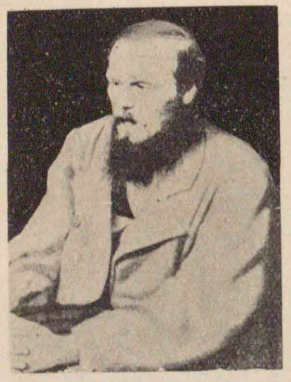
トルストイ Tolstoi ロシヤの小說家。

ゴーゴリ Gogol ロシヤの小說家。

ゴルキー Gorki ロシヤの小說家。

に共鳴する精神の所有者とトルストイに共鳴する精神の所有者、そして兩者を融合せんとする人々の文學でないであらうか。自然主義の時代以後、我が國の文學に最も親密な交渉を有するのは、フランスの文學と北歐の文學であつた樣に思はれるが、文明の病氣を語る弛緩した享樂の文學は永遠のものでない事を感じる。ロシヤ文學に於ては、原始時代の樣に素朴な心と極端に進んだ心とが一緒になつてゐる。其の中でも特に興味をひくのはゴーゴリからゴルキーに至る中間であつて、西歐の教養からロシヤの民衆を顧みて、それに歸らんとしたツルゲネフ、ス

ツルゲネフ



ドストエフスキー

ツルゲネフ Turgenieff ロシヤの小説家。

ドストエフスキー Dostoyevsky ロシヤの小説家。

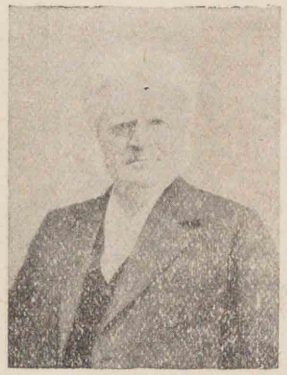
イブセン Ibsen 諾威の劇詩人。

ビヨルソン Bjornson 諾威の劇詩人。

ストリンドベルヒ Strindberg スウエーデンの小説家。

ラヴの心のうちに潜んで沒我的な人間の愛を育んだドストエフスキー、ロシヤの農民を眺め、そこにたゞ人間を眺めたトルストイである。そして方面を異にするが、三人とも人間の心の動き様を深刻に透察する比類なき心眼を有してゐた。この三人を思ふとき、想ひ出すはスカンディナヴィアの三人、イブセン・ビヨルソン・ストリンドベルヒである。トルストイ等の人道的な心に對照すると、イブセン等はニイチェの代表する思潮の繼承者であることを感じる。

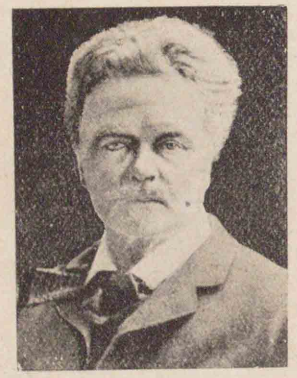
イブセン



ビヨルソン

以上が歐洲文學の主脈の目標となる高峰とすれば、如何にし

てそれらに親み得るであらうか。ソフォクレスやプラトーンは我等の世界から遠く離れてゐる感はあるが、近づけば親しさの感が深まつて來る。まともに人間を表現する民衆主義なロシヤの文學は、何れの國民に對しても傳統の隔てをおかぬ。シェクスピヤ及びゲーテもまた潤やかな心を以てあらゆる人に語る要素をもつてゐる。そして年久しく注意深く耳を傾ける人には、常に新しく、より深きことを語るであらう。



ストリンドベルヒ

若し我々が西洋人のなしたるが如き自我の覺醒を經驗すれば、わが文學も西洋文學と等しき要素をより多く持つことになるであらう。卽ち靜寂主義的なもの、自然の愛を中心にしたものは遠ざけられて、自由な我の表現、人間性の表現である如き文學

が重んぜられるであらう。只傳統を尙ぶとき、文藝は自己の世界を狹める。傳統を無視するとき、過激な精神の渦卷を惹き起し、蕪雜にして怪奇なる作品をもまた多く生ぜしめる。文藝の傳統を保ち高雅な教養を持つことが必要であるとすれば、わが文藝の傳統を出來るかぎり宏濶な世界的なものとならしめねばならぬ。（文學序說）

國文學年表

時代區分	作家	作品	參考	外國文學
奈良朝以前				
一三七〇				
奈良朝				
一四五四				
		古代文學（上代—一八五一）		
	柿本人麿（天平三） 大伴旅人（天平五） 山上憶良（寶龜六） 山部赤人 吉備眞備（延曆四） 大伴家持	（歌謠） （祝詞） （壽詞） （宣命）	神武天皇卽位 漢學傳來 佛敎渡來 聖德太子 推古朝の美術	ホーマー パンチャタントラ ジャータカ 〔ギリシア悲劇〕 エスキラス 釋迦 〔周の文學〕四書・五經 孔子 老莊 ソクラテス 〔漢の文學〕史記・漢書 舊約全書 キリスト 〔六朝の文學〕文選 陶淵明
	古事記（一三七二） 風土記（一三七三） 日本書紀（一三八〇） 萬葉集 懷風藻（一四一一）		奈良奠都 國分寺建立 遣唐使・留學生 天平時代の美術	〔唐の文學〕王維 李白 杜甫
	平安奠都			

一八五二

平安朝

菅原道眞（延喜三）
在原業平（元慶四）
凡河内躬恒（延喜七）
紀貫之（天慶九）

紫式部
清少納言
和泉式部
藤原公任（長久二）
源俊頼
藤原基俊
藤原顯輔
西行法師（建久元）

（神樂歌）
（催馬樂）
竹取物語
伊勢物語
古今和歌集（一五六五）
延喜式（一五八七）
土佐日記
落窪物語
宇津保物語
源氏物語
紫式部日記
枕草子
和泉式部日記
蜻蛉日記
和漢朗詠集
今昔物語
榮華物語
大鏡
更科日記
山家集
千載集（一八四七）

天台宗・眞言宗傳來
大學・國學・私學
片假名・平假名
遣唐使廢止（一五五四）
菅原道眞左遷（一五六一）
歌合
平將門の叛（一六〇〇）

藤原道長薨（一六八七）
前九年の役
後三年の役

保元亂
平治亂

歌論

平清盛薨（一八四一）
平氏滅亡（一八四五）

源頼朝征夷大將軍に任ぜらる

〔宋の文學〕
歐陽修
司馬光
蘇東坡

柳宗元
韓退之
白樂天

鎌倉・室町時代

藤原俊成（元久元）
鴨長明（建保四）
源實朝（建保七）
藤原家隆（嘉禎三）
後鳥羽天皇（延應元）
藤原定家（仁治二）

阿佛尼（弘安六）
吉田兼好（正平五）
北畠親房（正平九）
頓阿（元中元）
二條良基（元中五）

中世の文學（一八五二―一二六二）

水鏡
方丈記

新古今和歌集（一八六五）
金槐集
保元物語
平治物語
平家物語
源平盛衰記
東關紀行
十訓抄（一九一二）
古今著聞集（一九一四）
宇治拾遺物語
十六夜日記
增鏡
徒然草
神皇正統記
太平記
曾我物語
義經記
新葉和歌集（二〇四一）
（謠曲）
（狂言）
犬菟玖波集（二一七四）

承久亂（一八八一）
眞永式目
金澤文庫
淨土宗
日蓮宗
禪宗
元寇（一九三四）
建武中興（一九九四）
足利尊氏の亂
能樂京都に行はる
應仁の亂
東山時代の美術

ダンテ（一三二一）

〔元の文學〕
元曲
琵琶記
水滸傳
西廂記
ペトラルカ（一三七四）
チョーサー（一四〇〇）
コロンブスのアメリカ發見（一四九二）
ルーテルの宗教改革（一五一七）

二二六三	宗祇（文龜二） 山崎宗鑑（天文二二）	（御伽草紙） （連歌） （俳諧）	徳川家康征夷大將軍に任ぜらる
江戸	松永貞德（承應二） 安原貞室（延寶二） 西山宗因（天和二） 井原西鶴（元祿六） 松尾芭蕉（元祿七） 僧契沖（元祿一四） 北村秀吟（寶永二） 榎本其角（寶永四） 貝原益軒（正德四） 近松門左衞門（享保九） 新井白石（享保一〇） 室鳩巢（享保一九） 竹田出雲（寶曆六） 賀茂眞淵（明和六） 加賀千代（安永四） 平賀源內（安永八） 谷口蕪村（天明三） 横井也有（天明三）	近世の文學（二二六三—二五七一） （貞門俳諧） 俳諧御傘（二三〇六） （談林風俳諧） （假名草紙）（浮世草紙） （正風俳諧）七部集 萬葉集代匠記（二三八） 源氏物語湖月抄 （淨瑠璃）時代物世話物 藩翰譜 駿臺雜話 冠辭考・萬葉考 （俳文）鶉衣	儒學振興 古書出版 漢學 國學 大日本史編纂開始（二三七）	シェークスピア（一六一六） 明滅亡（一六六一） モリエール（一六七三） ミルトン（一六七四） コルネイユ（一六八五） トムソン（一七四八） ゴールドスミス（一七七四） ルッソー（一七七八） 北米合衆國獨立（一七八三） フランス革命（一七八九） ナポレオン皇帝（一八〇四）

時代	柄井川柳（寬政二） 小澤蘆庵（享和元） 本居宣長（享和元） 荒木田麗（文化三） 加藤千蔭（文化五） 上田秋成（文化六） 村田春海（文化八） 式亭三馬（文政五） 蜀山人（文政八） 小林一茶（文政一〇） 良寬和尚（天保二） 十返舍一九（天保二） 香川景樹（天保一四） 瀧澤馬琴（嘉永元）	（川柳）柳樽（二四二五） 古事記傳（二四五八） （黃表紙）（洒落本） うけらが花 雨月物語（二四二八） 琴後集 浮世風呂（二四六九） （狂歌・狂文） おらが春 東海道中膝栗毛（二四六二） （桂園の新歌調） （讀本）南總里見八犬傳	明治天皇踐祚	シルレル（一八〇五） キーツ（一八二一） シェレー（一八二二） バイロン（一八二四） スコット（一八三二） ゲーテ（一八三二） チャールスラム（一八三四） コルリッヂ（一八三四） ワーズワース（一八五〇） サツカレー（一八六三）
明 二五二七	大隈言道（明治元） 橘曙覽（明治元） 八田知紀（明治六） 太田垣蓮月（明治八）	經國美談 新體詩抄 小說神髓 浮雲 風流佛 五重塔	王政復古 東京奠都（二五二九） 學制頒布（二五三二） 西南の役（二五三七） 活版術 新聞・雜誌 歐化主義	ロセッテイ（一八八二） ツルゲネーフ（一八八三） シモンズ（一八九三） ヴェルレーヌ（一八九六）

治時代	河竹默阿彌（明治二六） 樋口一葉（明治二九） 大西祝（明治三三） 正岡子規（明治三五） 高山樗牛（明治三五） 尾崎紅葉（明治三六） 落合直文（明治三六） 福地櫻痴（明治三九） 綱島梁川（明治四〇） 川上眉山（明治四一） 國木田獨歩（明治四一） 長谷川二葉亭（明治四四） 藤岡作太郎（明治四三）	桐一葉 若葉集 天地有情 默阿彌全集 一葉全集 大西博士全集 海言 子規全集 樗牛全集 紅葉全集 梁川全集 獨歩全集 二葉亭全集 國文學全史	國粹保存主義 言文一致 憲法發布（二五四九） 俳句・和歌・戲曲の革新 日清戰役（二五五四） 評論の勃興 日露戰役（二五六四） 大陸文學輸入 韓國併合（二五七〇） 自然主義 明治天皇崩御（二五七二） 大正天皇御即位	スキンバーン（一九〇九） トルストイ（一九一〇） ビヨルソン（一九一〇）
二五七二 現代文學（二五七二―）	石川啄木（大正元） 長塚節（大正四） 夏目漱石（大正五） 上田敏（大正五） 森鷗外（大正一一） 饗庭篁村（大正一二）	啄木歌集 長塚節全集 漱石全集 上田敏詩集 鷗外全集	皇太子攝政とならせらる（二五八一） 社會問題 民衆文藝	ロダン（一九一六）

國文新編（全五册）

大正十五年十月十三日印刷
大正十五年十月十六日發行
昭和二年二月六日訂正印刷
昭和二年二月九日訂正發行

定價		昭和臨時年度價	
卷一金七拾六錢	卷一金壹圓貳拾四錢	卷一金壹圓貳拾四錢	卷一金壹圓貳拾四錢
卷二金七拾六錢	卷二金壹圓貳拾四錢	卷二金壹圓貳拾四錢	卷二金壹圓貳拾四錢
卷三金七拾五錢	卷三金壹圓貳拾貳錢	卷三金壹圓貳拾貳錢	卷三金壹圓貳拾貳錢
卷四金七拾六錢	卷四金壹圓貳拾四錢	卷四金壹圓貳拾四錢	卷四金壹圓貳拾四錢
卷五金七拾五錢	卷五金壹圓貳拾貳錢	卷五金壹圓貳拾貳錢	卷五金壹圓貳拾貳錢

編者　東京市神田錦町一丁目十番地　垣内松三

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　株式會社明治書院　取締役社長　鈴木友三郎

印刷者　東京市神田區雉子町三十四番地　綾部喜久二

發行所　東京市神田錦町一丁目（振替東京四九九一番）　株式會社明治書院　電話神田一四一四番

不許複製

広島大学図書
2000302695